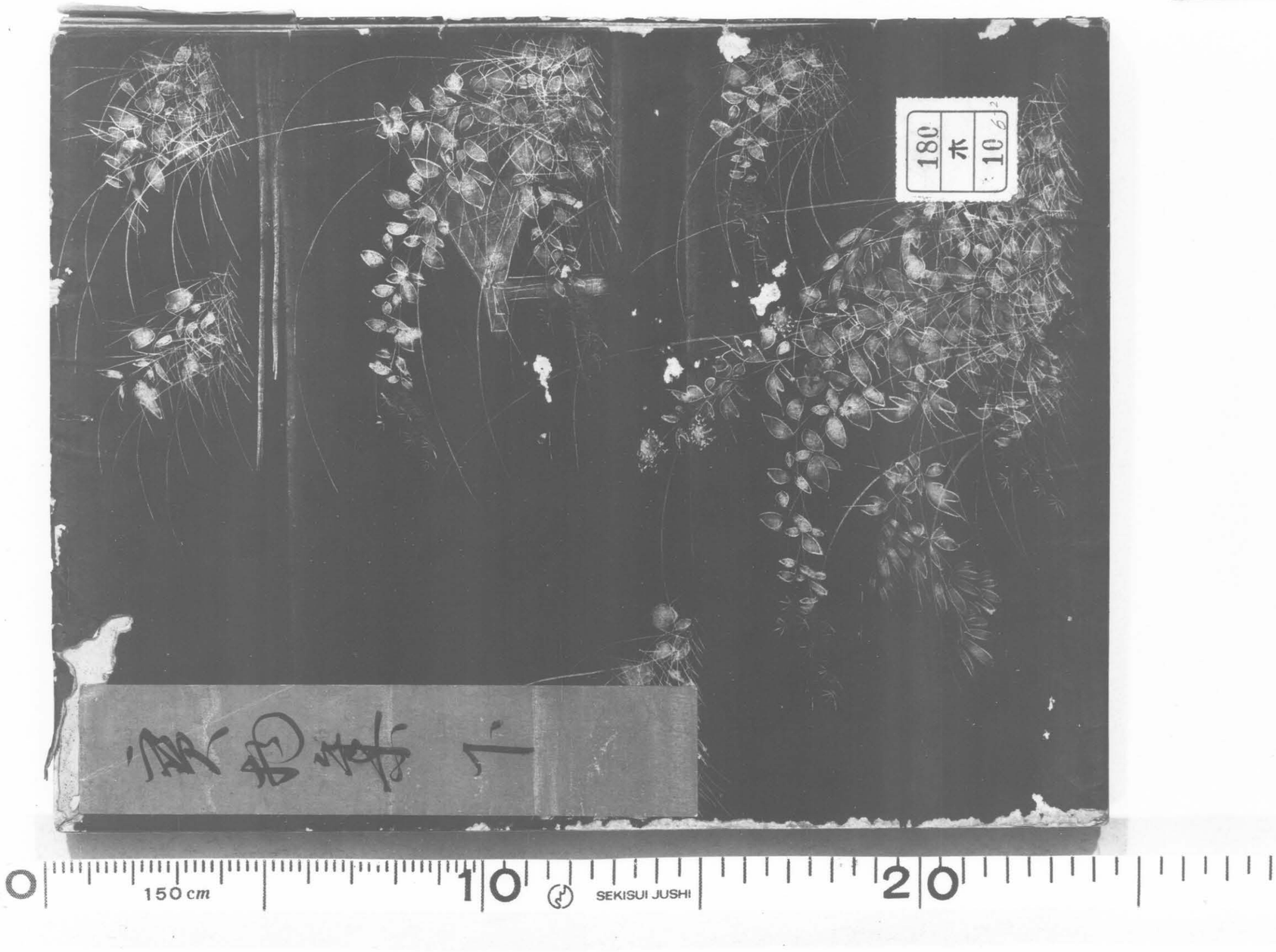

180
ホ
10
150 cm
SEKISUI JUSHI

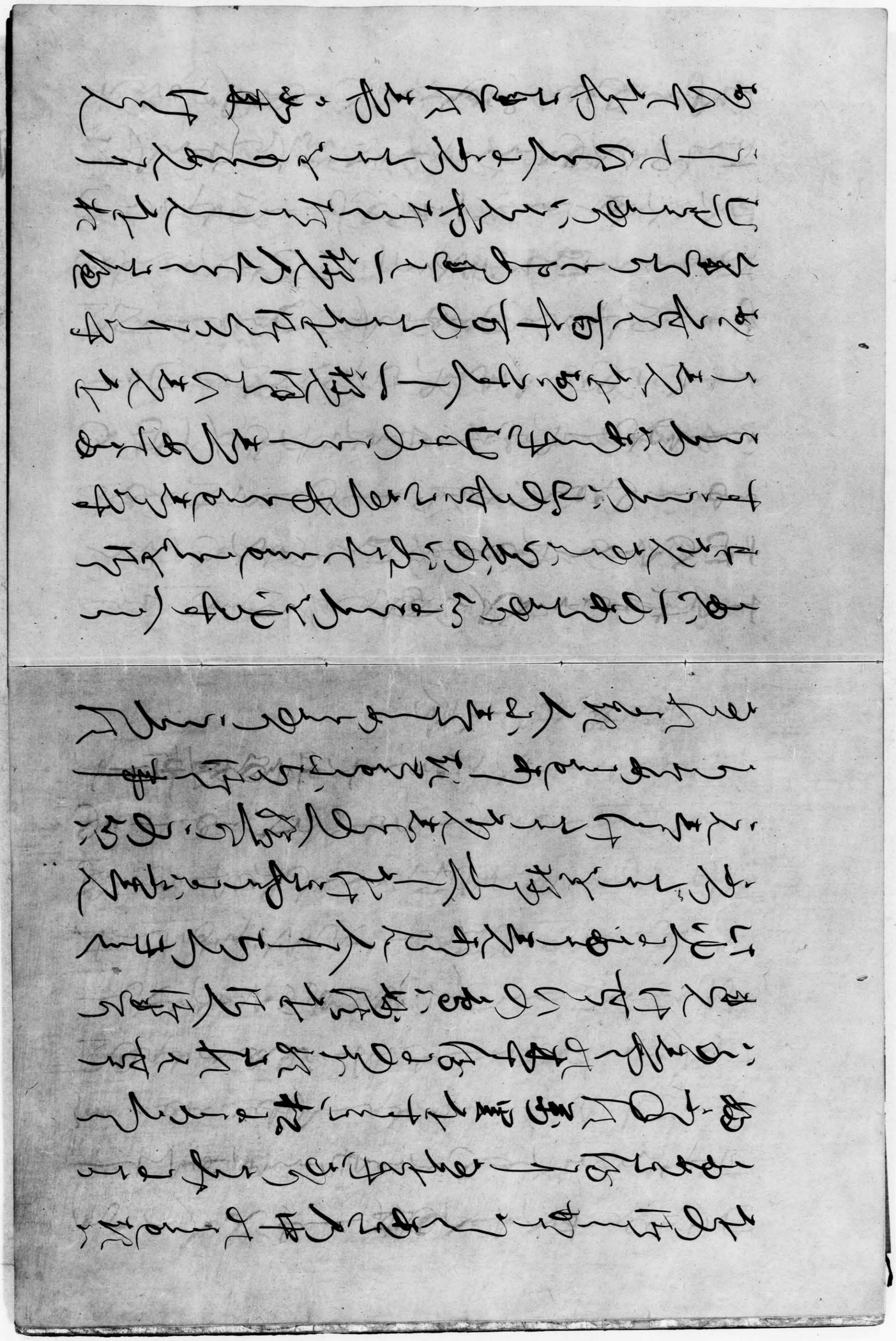
180
木
10

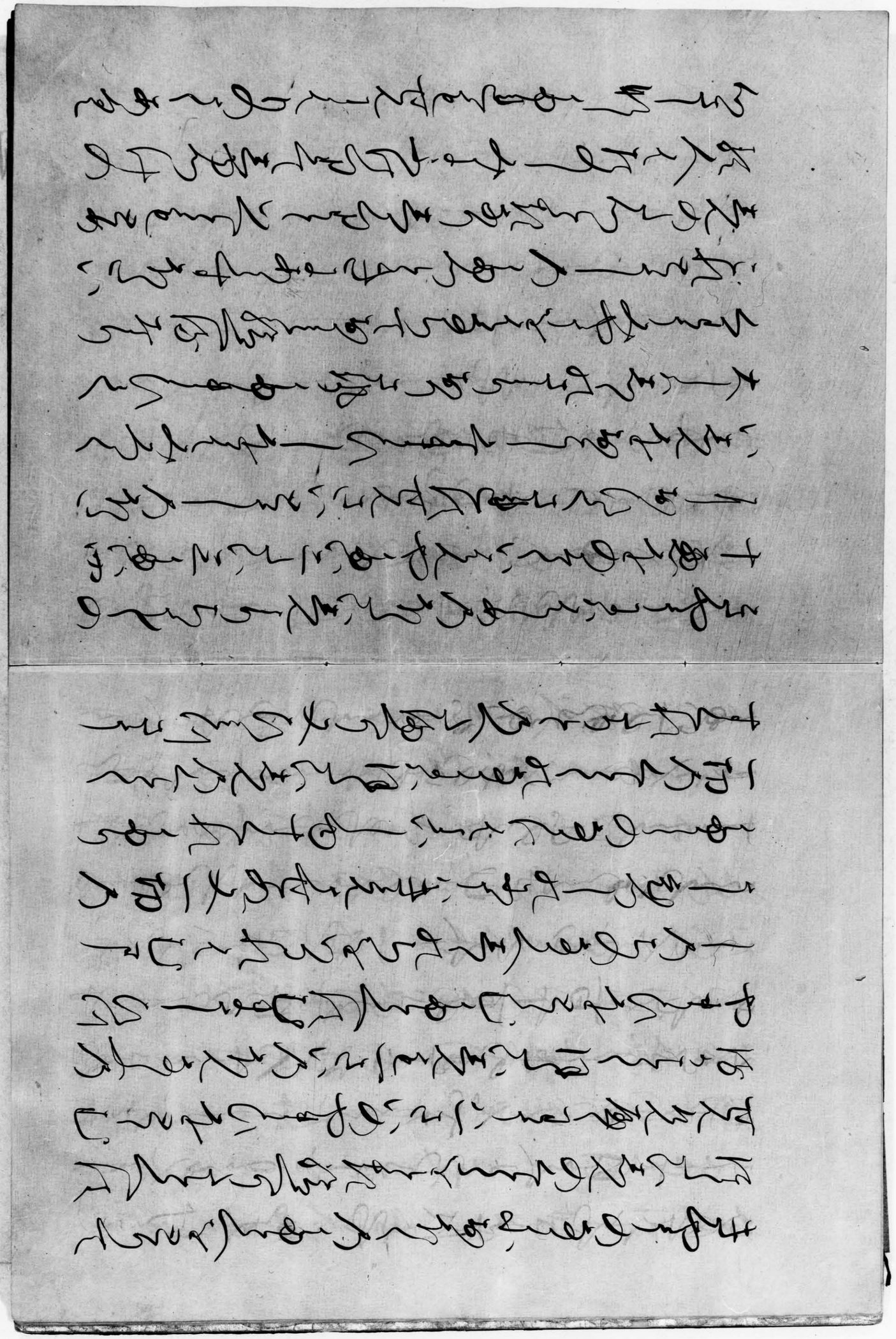
帝國圖書館藏

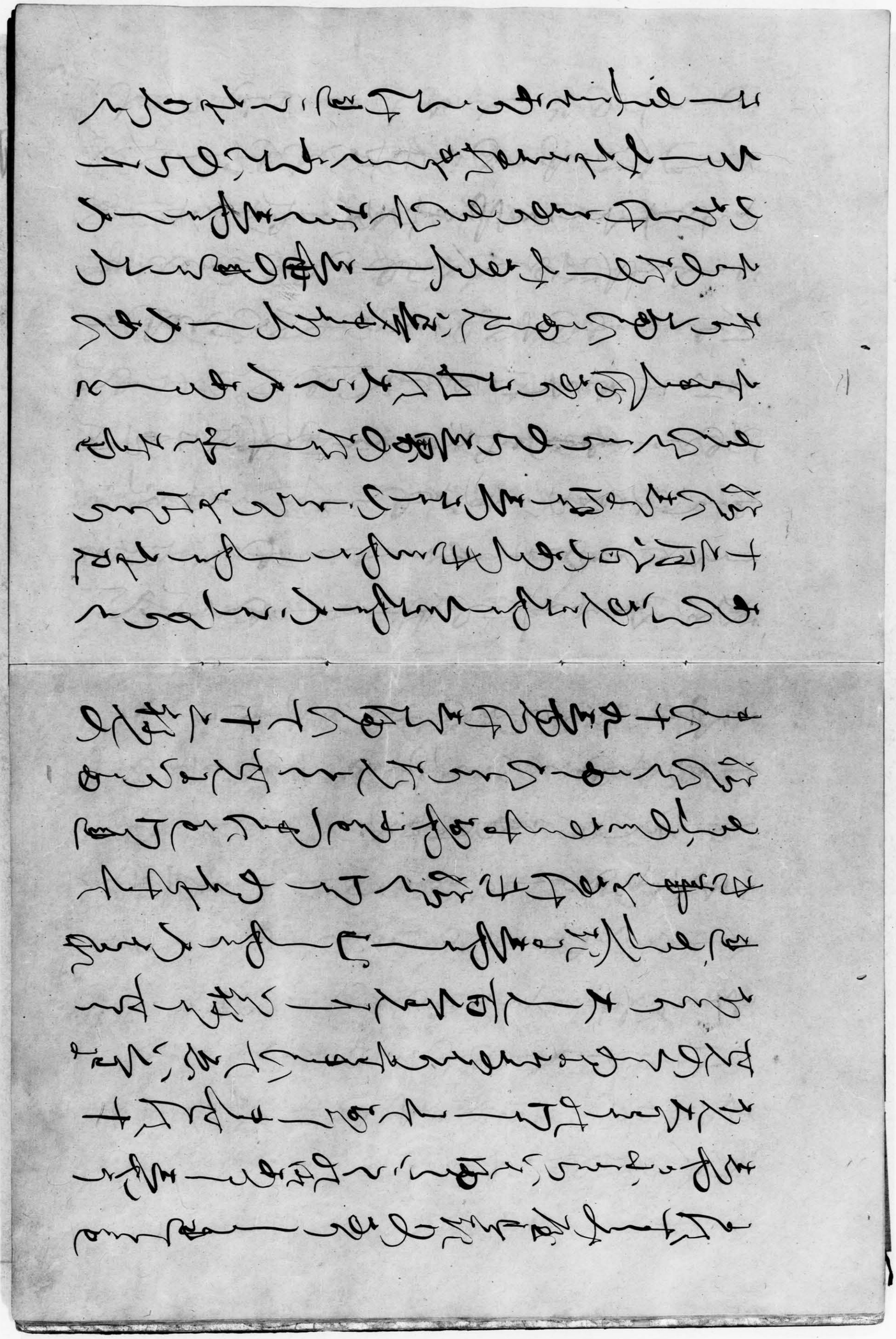
帝國圖書館
昭和 24. 3. 19
182202

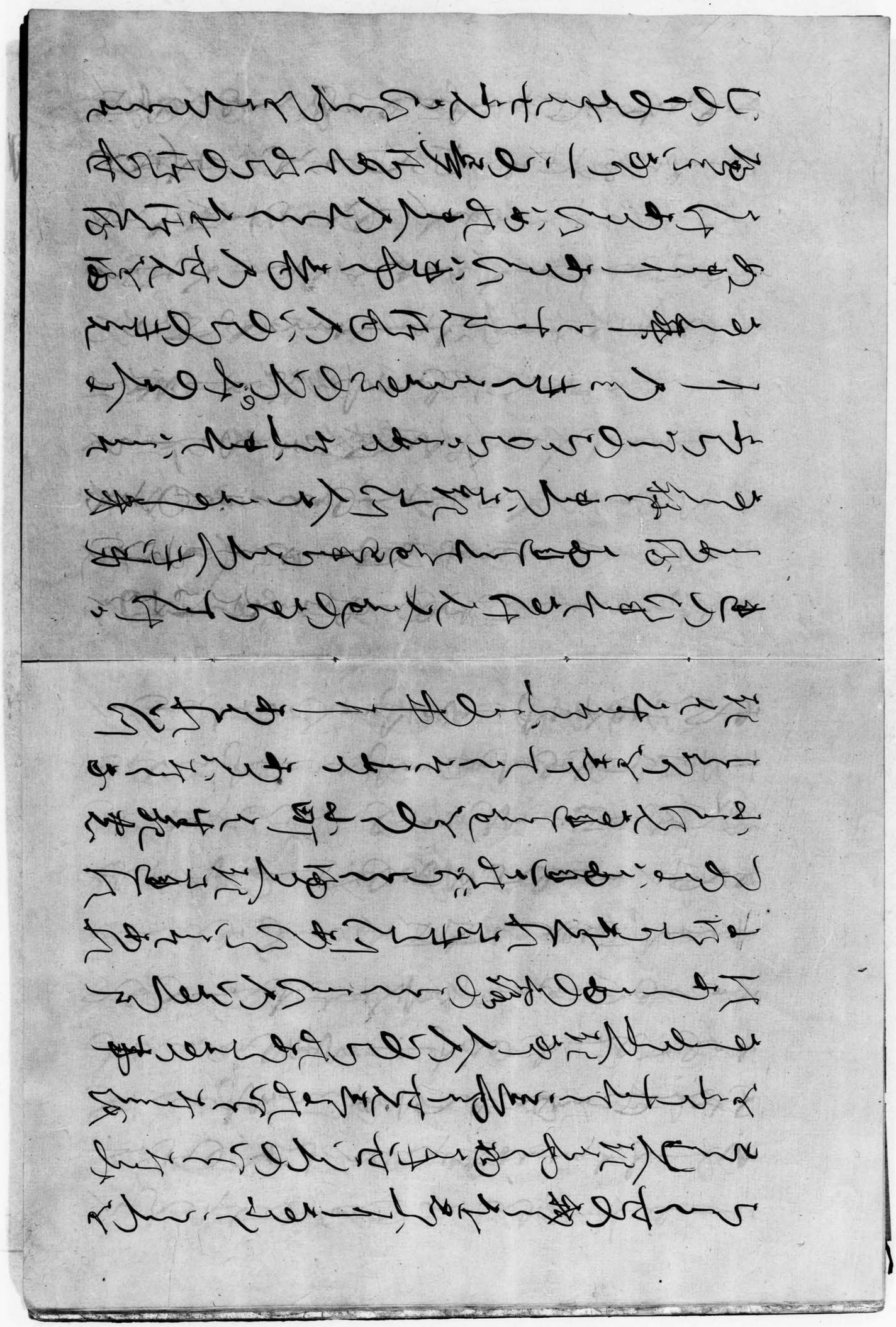
寶物集下巻

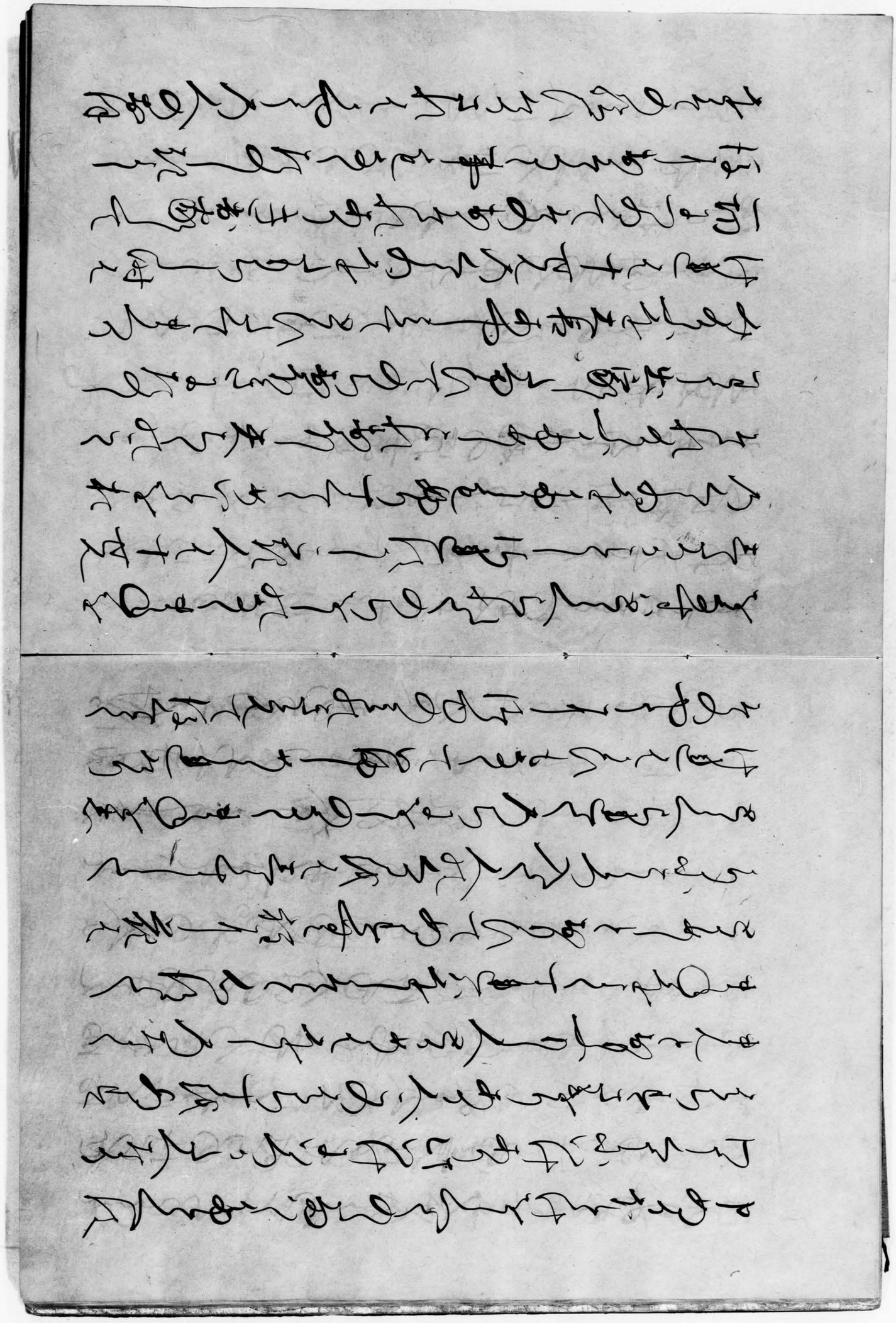
第一にたうしんをおこして出家遁世して
なかくけりすへしといへはこれあしきの
志ゆこうやうなり末法はいろ〳〵の事すこと縁
それによりて別の法なしおのつから志んをおこして
志やうしんのりてしまへしきあり念はいへえあらし
此人あり世にあらすこのあたまのなかに
しけつ志んすると毛さしへをのあり志
むまれここんりのしきときよまて
むへたきりせんそんの林しふかる人の色





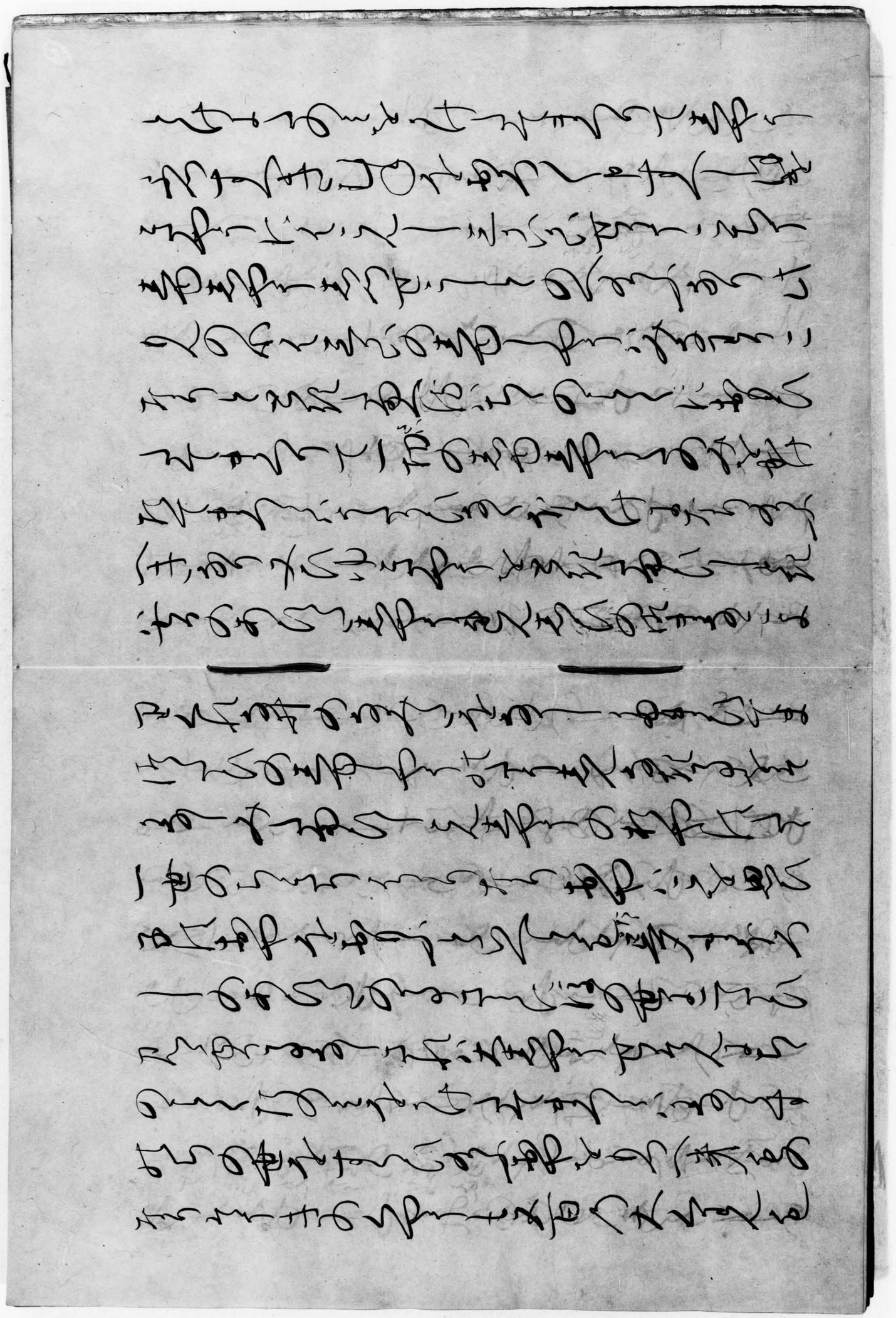






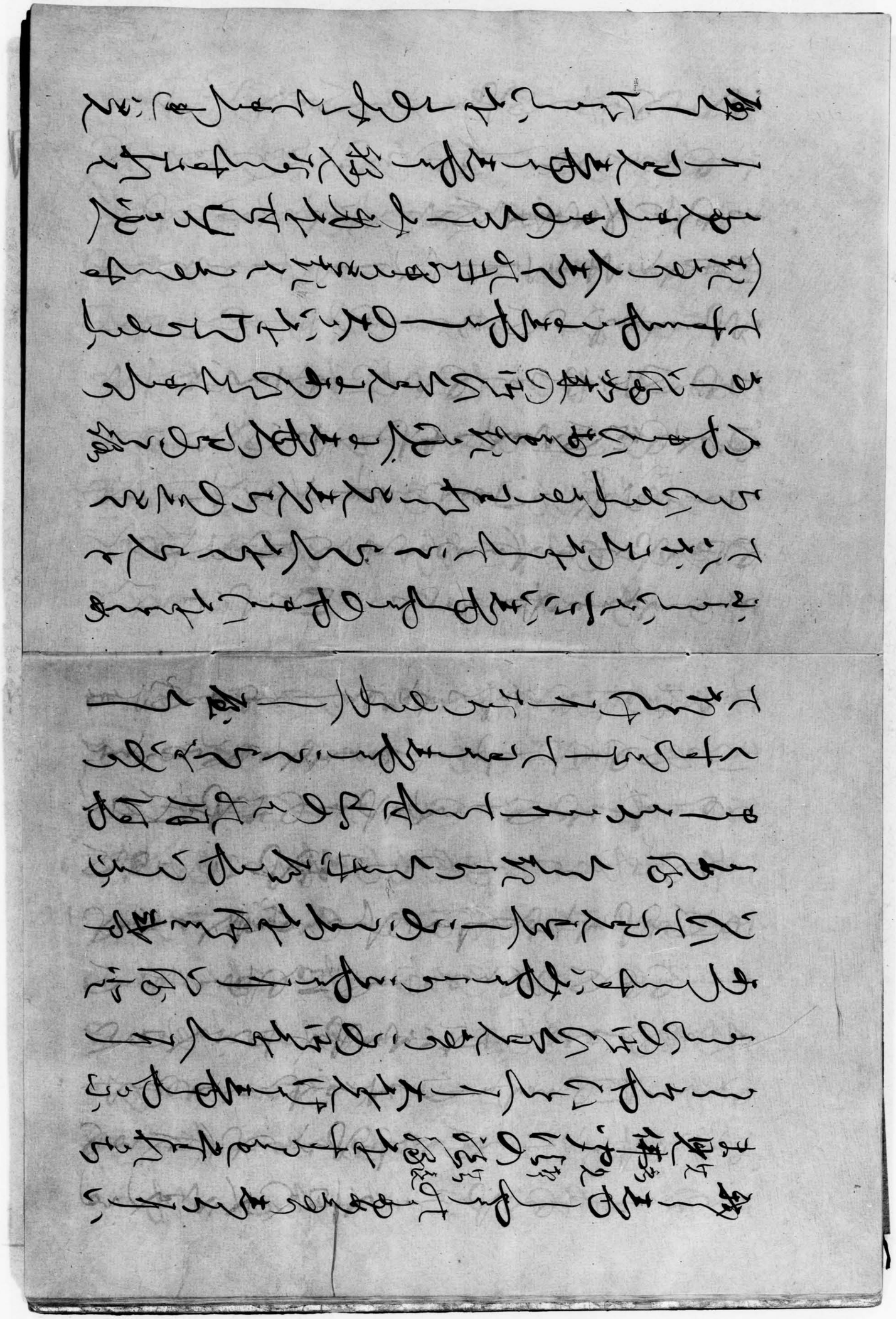
きこしめし候へくすりとよろこひけれは
をつかへまうけさせ給ふあそはしとして
作られけるこのことはいつれとしりたまはつ
かしけれ時まうす事してたまひけるにまうするを
ゆるしとのうへてあり惡道はわろくて
まうす事あそはしてよろこひ死ありしてけん
そくまうさしれの罪業おもきかゆへ入り
大地獄しあらしこれさいしんといふを
まれまくていて七日けんとこまうすにみゆ
まうてちかくにおもさせてちかい出家しける

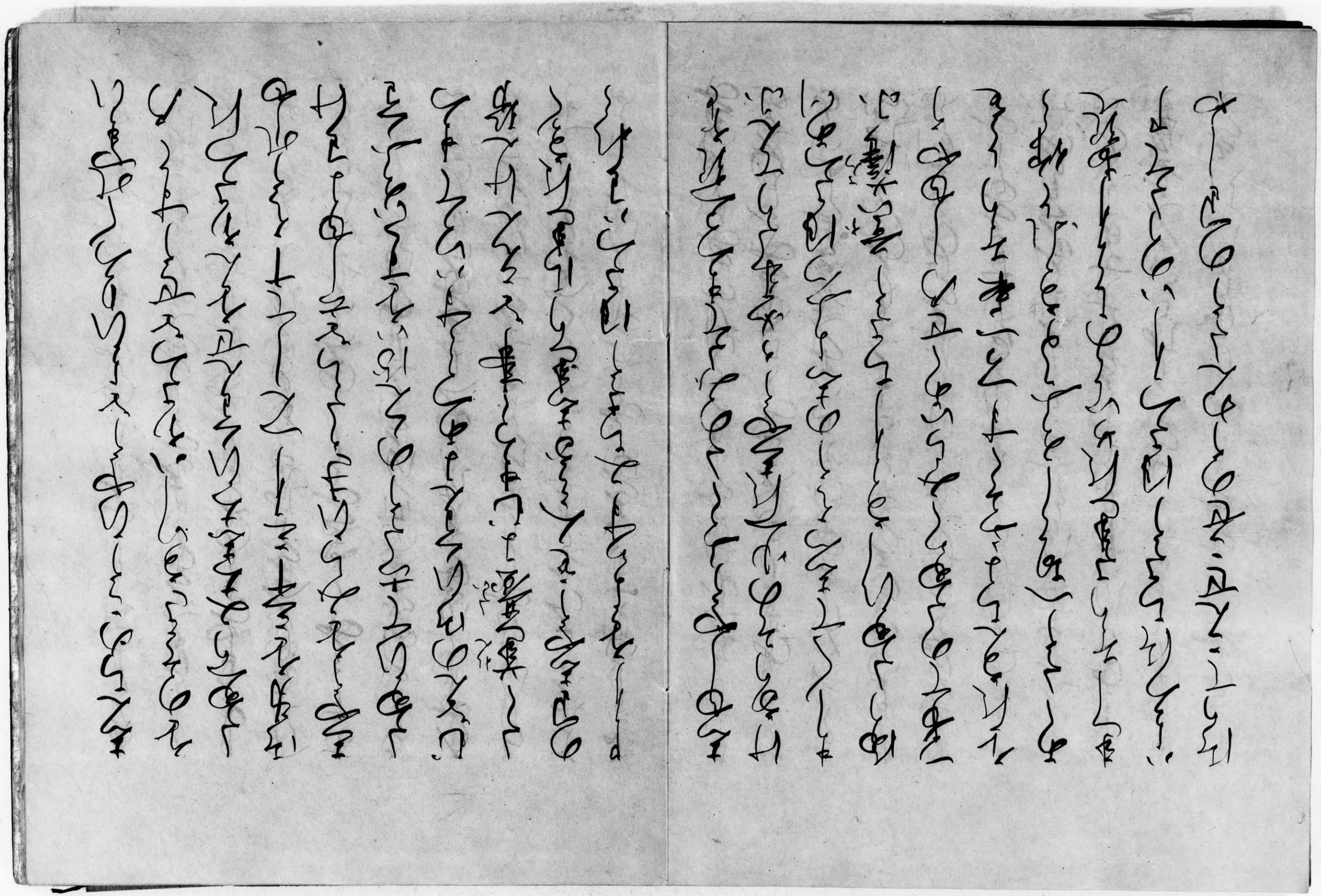
あしくていはさりといはけすしてさまよひま
かりそめのことをあらそひしかは
ひて惡道をのかれたまひけんやうまうして
とおもひて出家しあらんとおもひて
てゆるいのちのうへ死ありけやくしかた
まうそあらしてさうかくにそうらふ
きあり才二にうくこかうをまうし
かしけにあるへしとは悉達佛となれ
三かうをまうしてたうとまうしつる
三月ひとかはかかりてのとうあり



しけよこのことをうけたてまつりてきやう
ふかくきしん日をおろくしくすへしはき
きやうにくこんし三ちいせうしこちう
きちきやうきやうせうしのへのまふありけ
りんのかくさうゐのきちしやうはみなもろこ
なりとさとれとまたほいちくのことくにあらは
よそまつりて一切のきちきやうのみをあけ
たてまつらいさういまたしけよたちのふ
へきありまたひゆうきやうとさとれともいしとれ
ふちのあれうきやうきえきうゐのはまをこよ

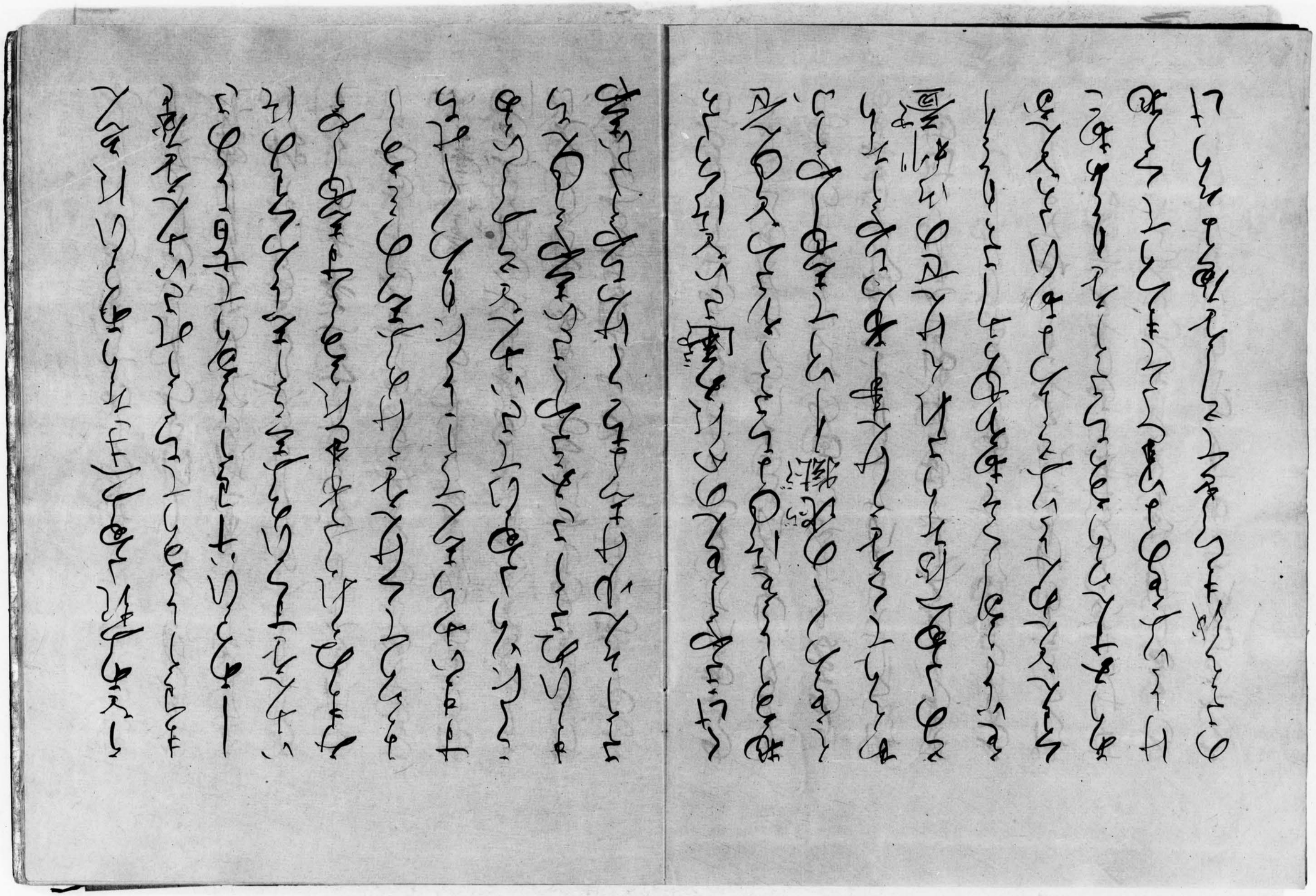
まくれ弁のかみさまをまつしめまいらせま
ほうゐのきちやうはきちさうたるをそ
あまねみなみかいりしんきやうのわかれさ
一世のちからくりなりあやいこと思は
子はあやをおりふしとくてこそ忠らまかる
しのあいこのかるさにほの世よこてかい
見るかめるさいれは大きやうせそ人まち
のことなのことをうけとてまつりはよかす
めちの世をすくいあくをやとりて未来のため
なりそうきみのためしも又百の大くちんを





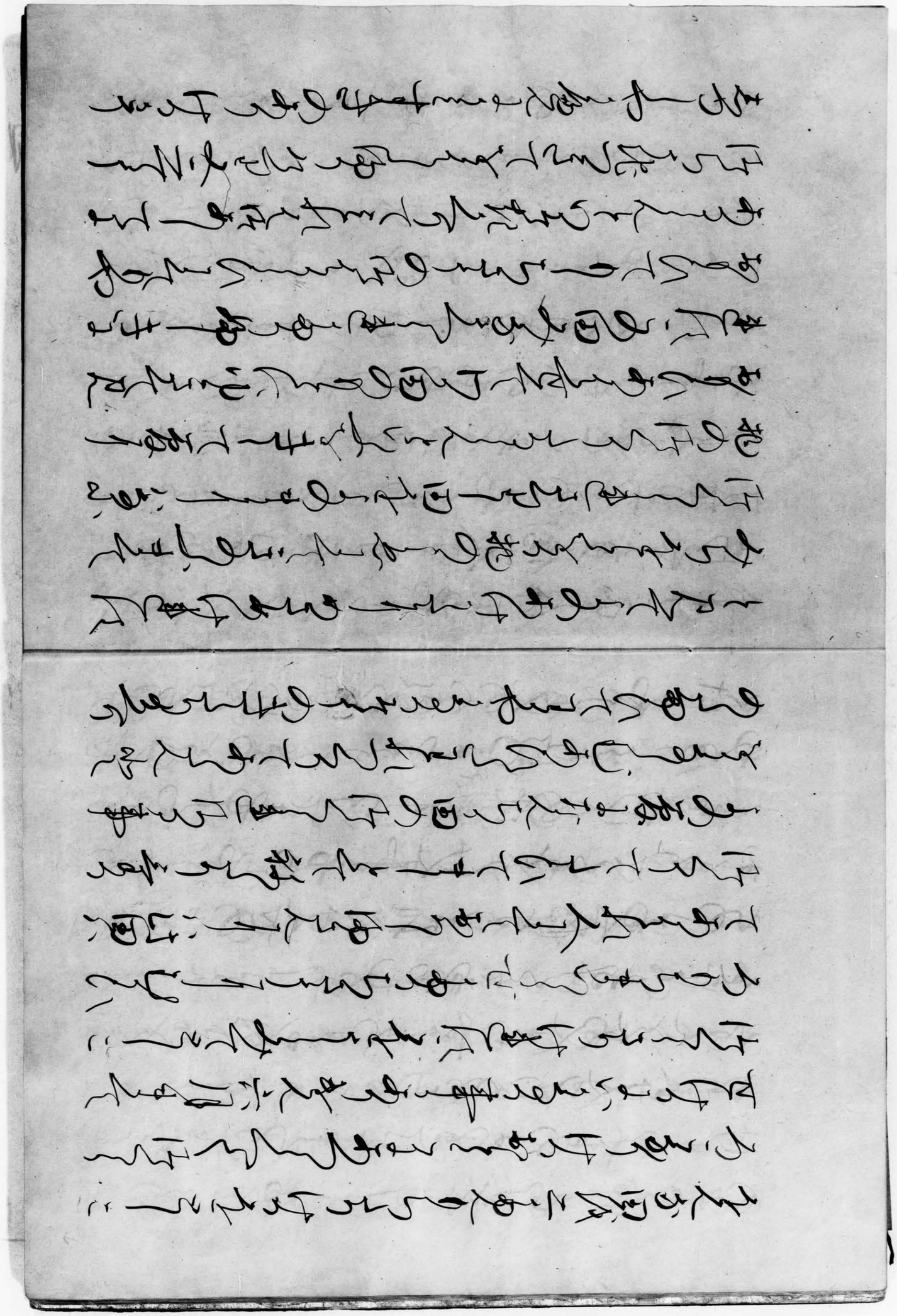
しんらのこくりやうとといひりつくはやまい
そのときさかりしはかさつをせうすての
しまいり又たしたいしんせいせんかさうに
ほとけを三千三百てんしてくわんも
しやうをみちひきたまふとなん申なりけ
しかしてむかしのえんはいをすゝめ給ふ
むかしのほとけよりつたはりてまつ
ことに蓮臺にむまるゝ事をえんけん
のちしやうを人にすゝめしめまいらせたまはゝ
ゆめゆめすてゝ千すみちさせはつはりれ

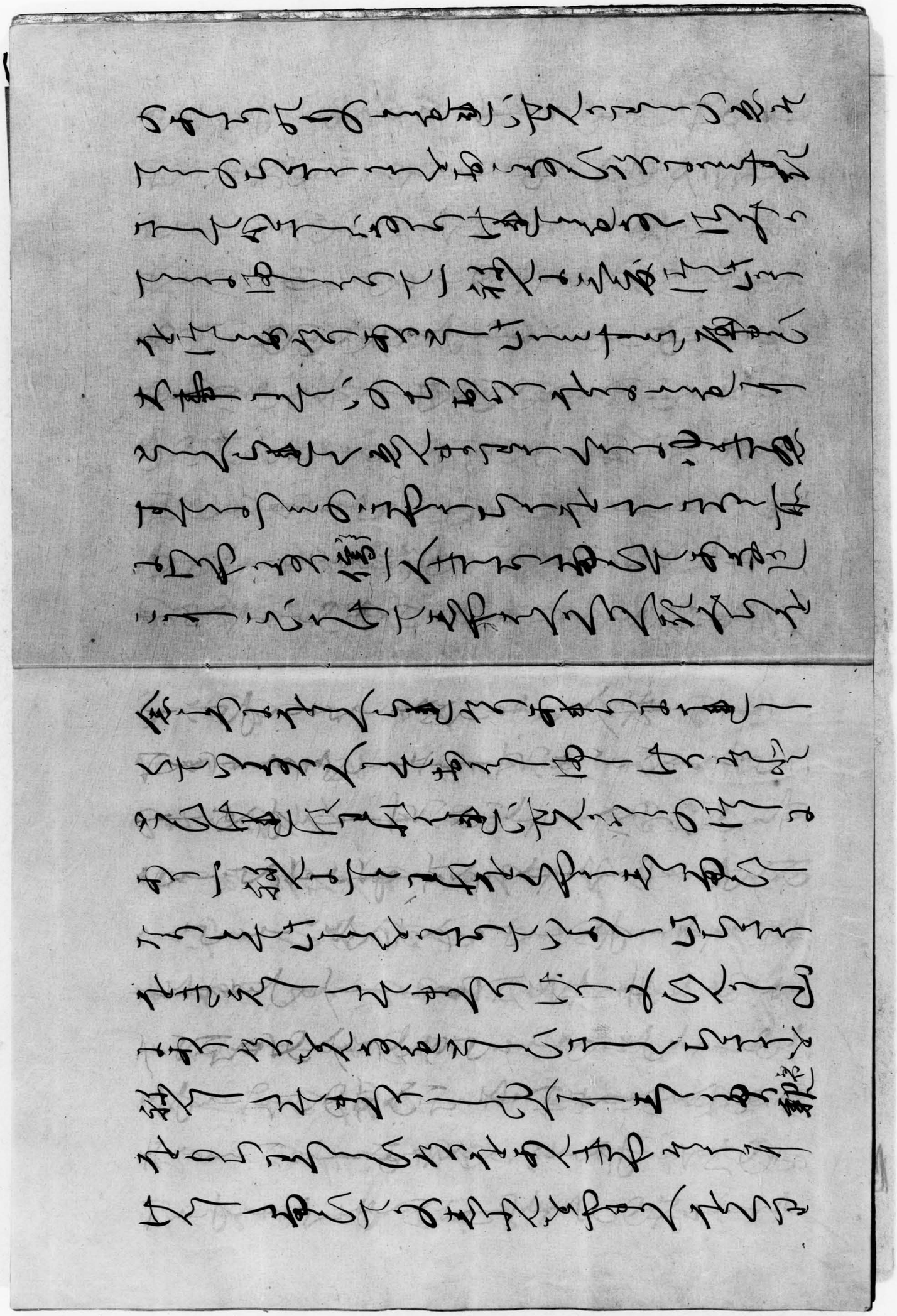
しやうしやくのみたてまつる是をと
けありそのゆへはしやうかめてたくてんに
ましくてしやうくうのしようほとゝあり
ゆめゆめありうちたまふ菩薩に
一ほてのゝゆうてみちひきせんのしやう
これあちらよふてすゝめ一乗をさとりを
あまへありしみよりまいれと
まつそのことはめいてのしよりめいり
かうはちよりはなつけいのりそて
はりてえせにせのりめんさうのみちしや

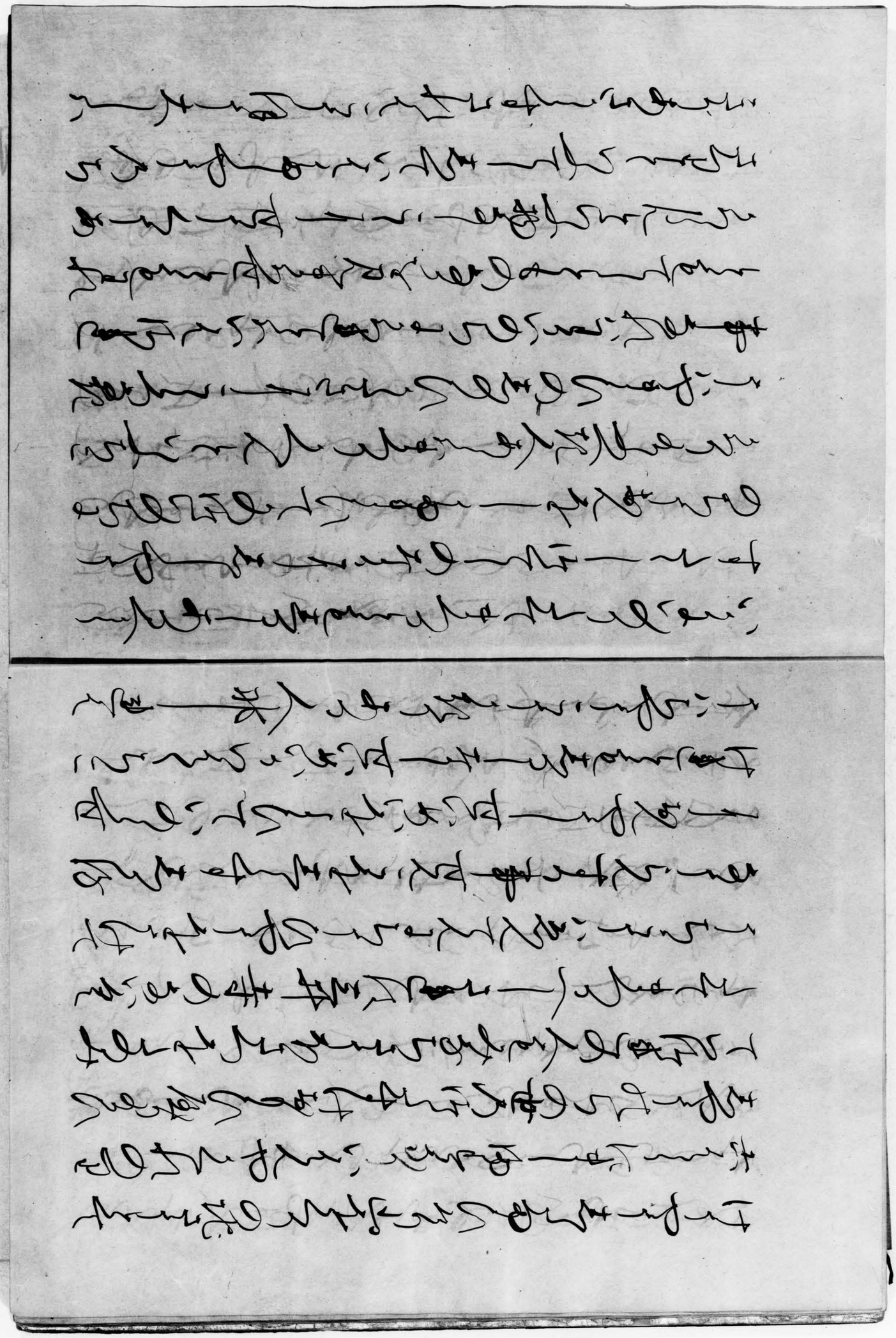


うとあか龍女につきたりあつかひはせん
まうりとあまりてちかうれさいかんを座を
しあつかひは十ゆうりとあまりて七百しのさ
いかんをすつひのうへにしゆくはこのはに
みまぬかれうてあきはるのすきいしや
よろりてくけんをうけのうへのことあし
すゝまいかちえんていしくにわうくゐち
こしいりあまいてさいかんをうつしいあ
ましめさりさめさやくさいきみそえち
さうえんけけきつちこけかちやさいまや

くけさやうきんのかはめ逢さいをはくらうら
ねまうしとをはのよちこうれうとものえを
くをくろくの地獄いりて申しやうふ
わくろりてくをとうけん事あかちやうたり
このうあへ修そりされんけんせのは利益
をいとあくてありもろみしさうりそり
かんとえかんとをかふさうろうまよあはれうとんお
ありみすんつりあつちてさうりそりとあおこ
けといふをのよいまとてそまくりてくる地
のさる繊まうしきてこうしを庵よのけり

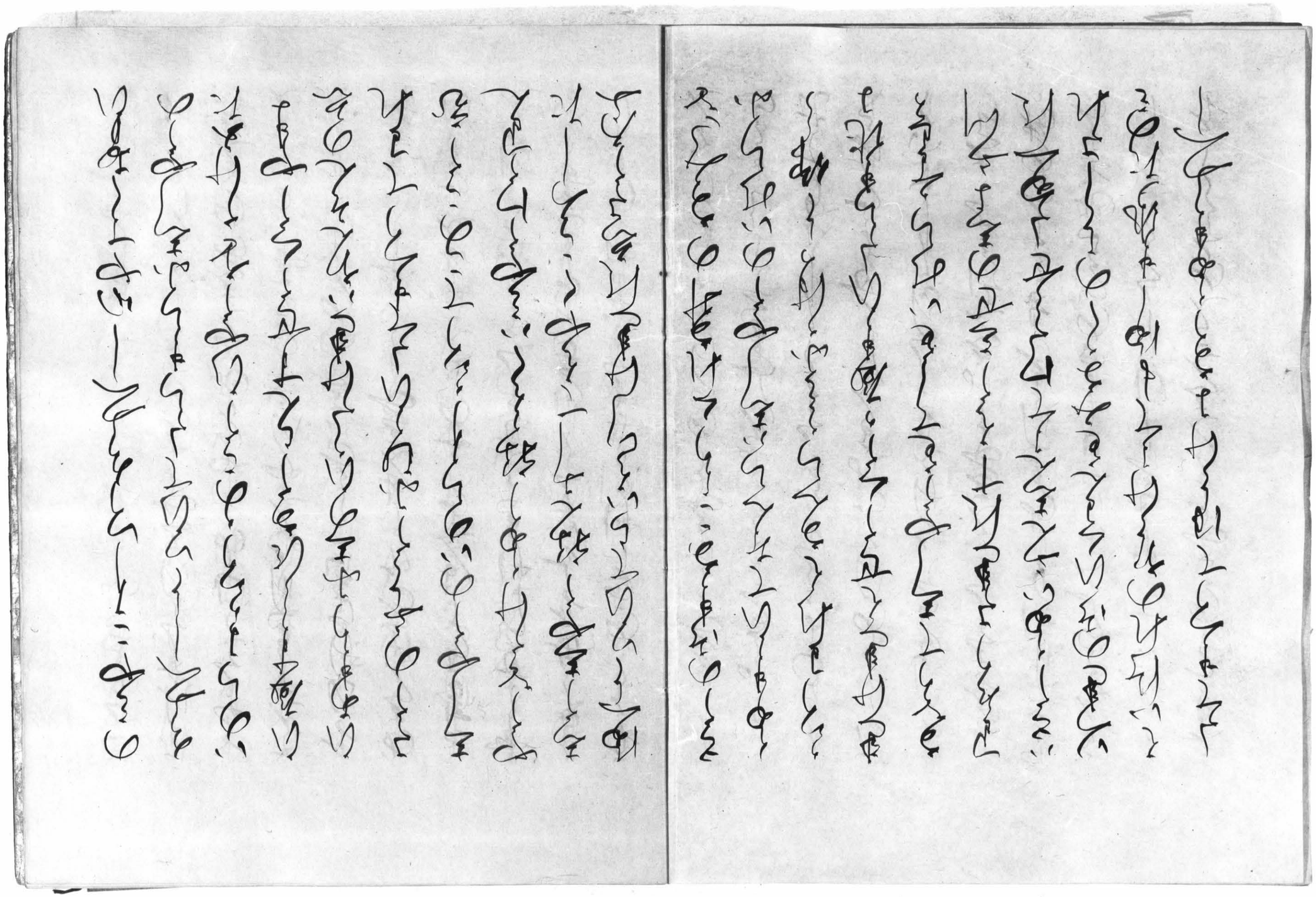






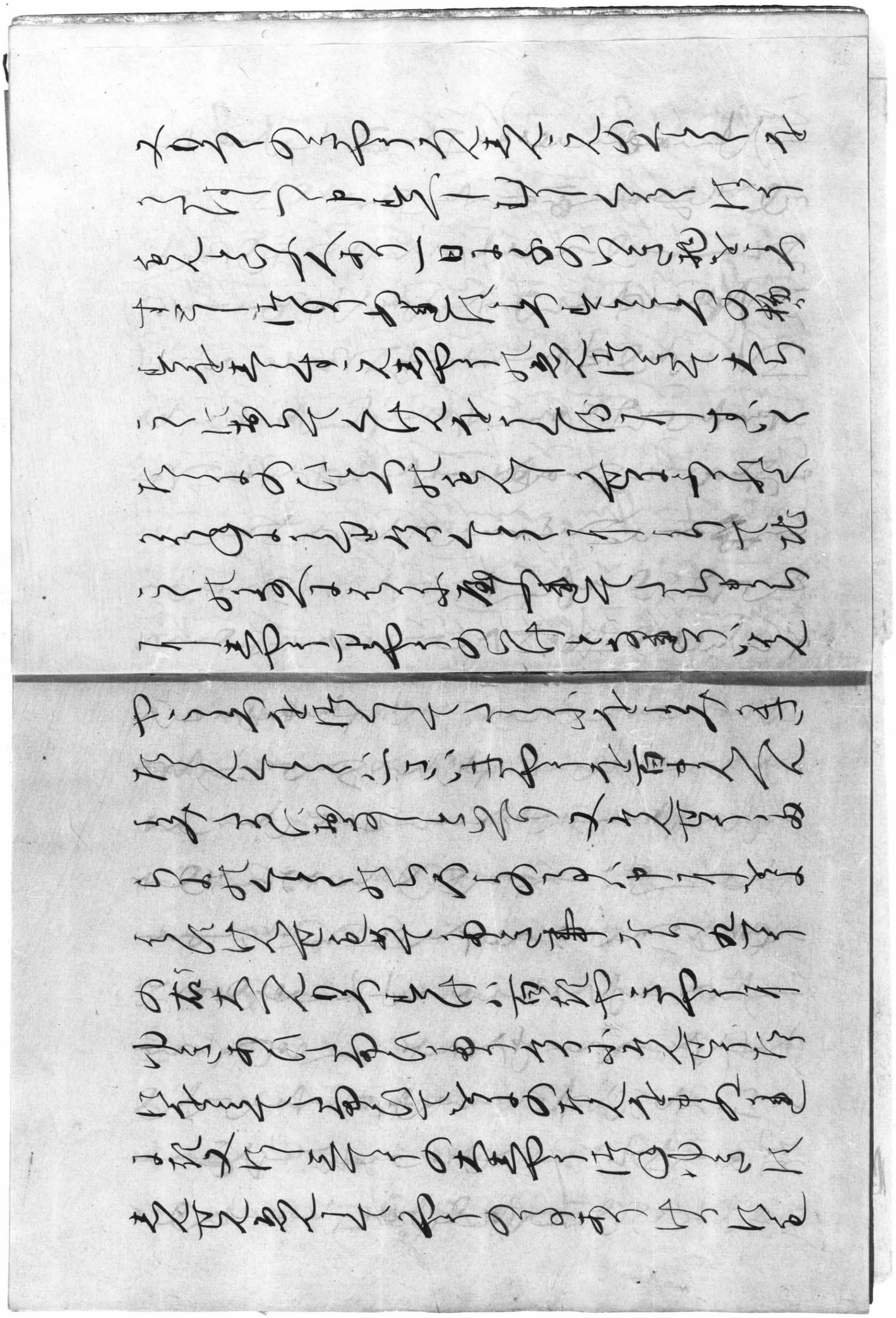
三世のちきりおやは一世のむつひと御
れしまゝせいめいふしとしまつりやうの命
みなりてこれのやまひをけはなけるよ
めいとよありむくしいそさまつりくよ
とりなをさてちうこうみさをあらして
いとくわいのちよろこひかさしれさまと
しけまいらせてしをくりしてされさてん
事は実女にもよろまもあそひたまふり
あへしけすしといれれをせうらくいけに
おもしはうまといふ所とおりゐまゐらせ

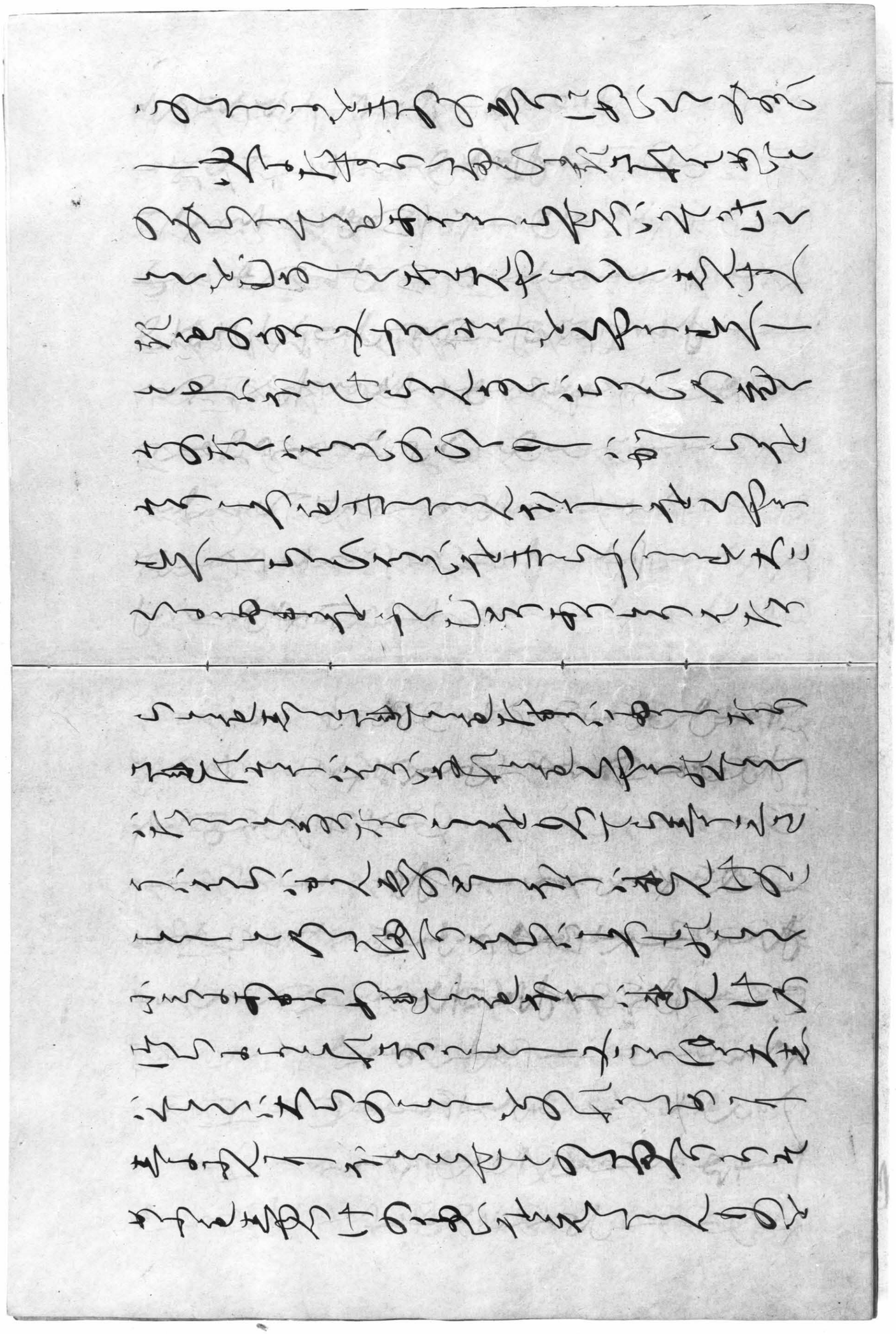
をさなのありけるまゝて八十にあまり
くめし母をたすてゝゆきなかん事いゝ
ふしせうしけまいらせゝくるいろくはてん
三宝ちうあんあいふのさんきあんみやむ
ねまんまうおんあん玄やしよふうをを舞
をのけかをけこゝろは三くのちりは
てんすまいれなんあんそなるへ事あるしえ
をそてゝむねりいか地まんまうの之あり
これすてにまやうのあいりさりなれ
けうきふらてゝをろあすむね

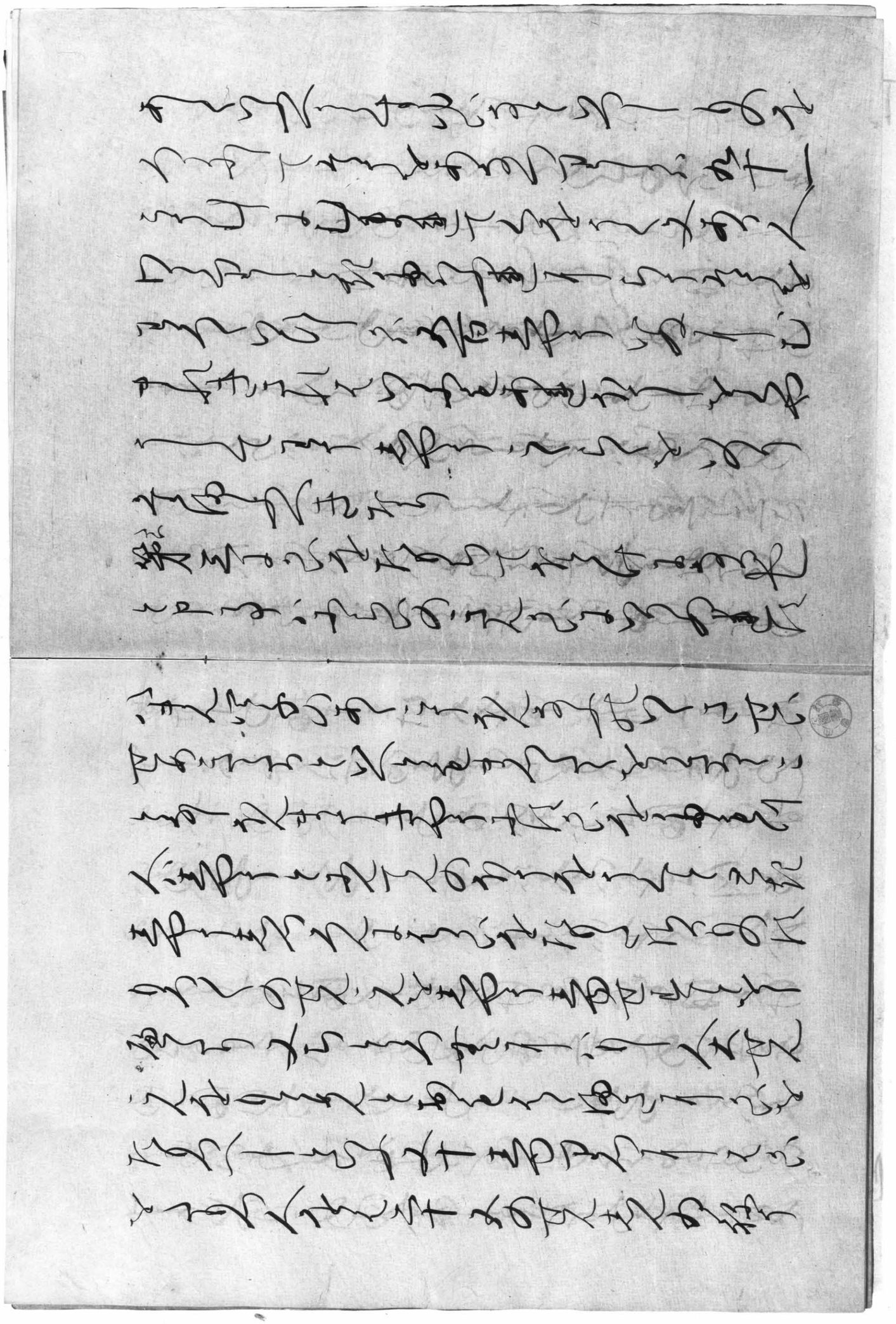


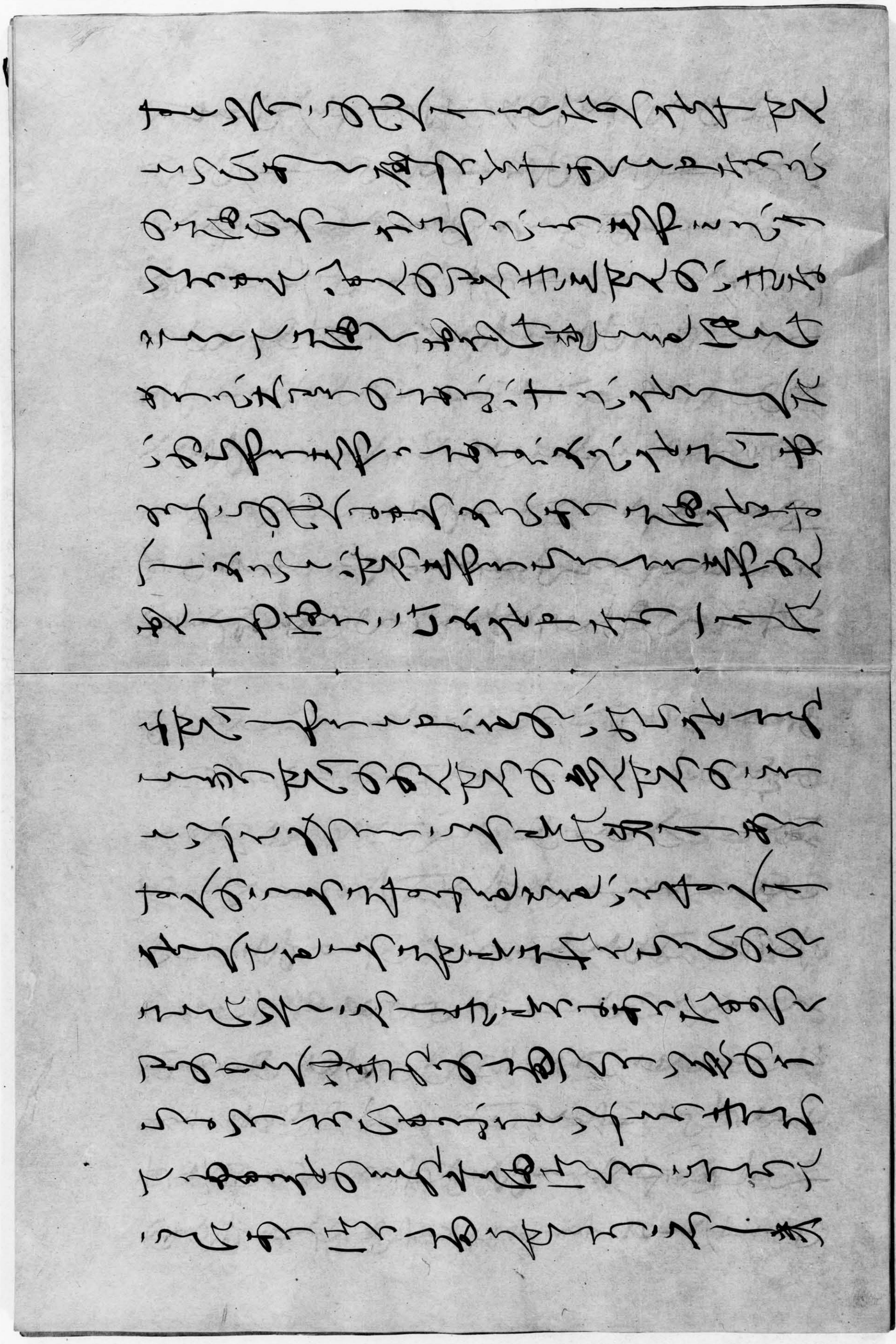
のこやこそりつかへしいやすくおもひ
かへしといひてまうまふしやうの
いのちをかきりのことりやうをうけた
い座すしんあすらえすせぬくしやうま
いあまり小まのいさけましいおんえんの
こうのかてゝふしひとひこそまうりてまれ
まつやうのいのちりきりてこみこうらむ
やうとうけあり称せくいこやうわかえん
まうまやう称えまし一くやくこうした
ゆへといひてらいさしけまれゑさうゑ

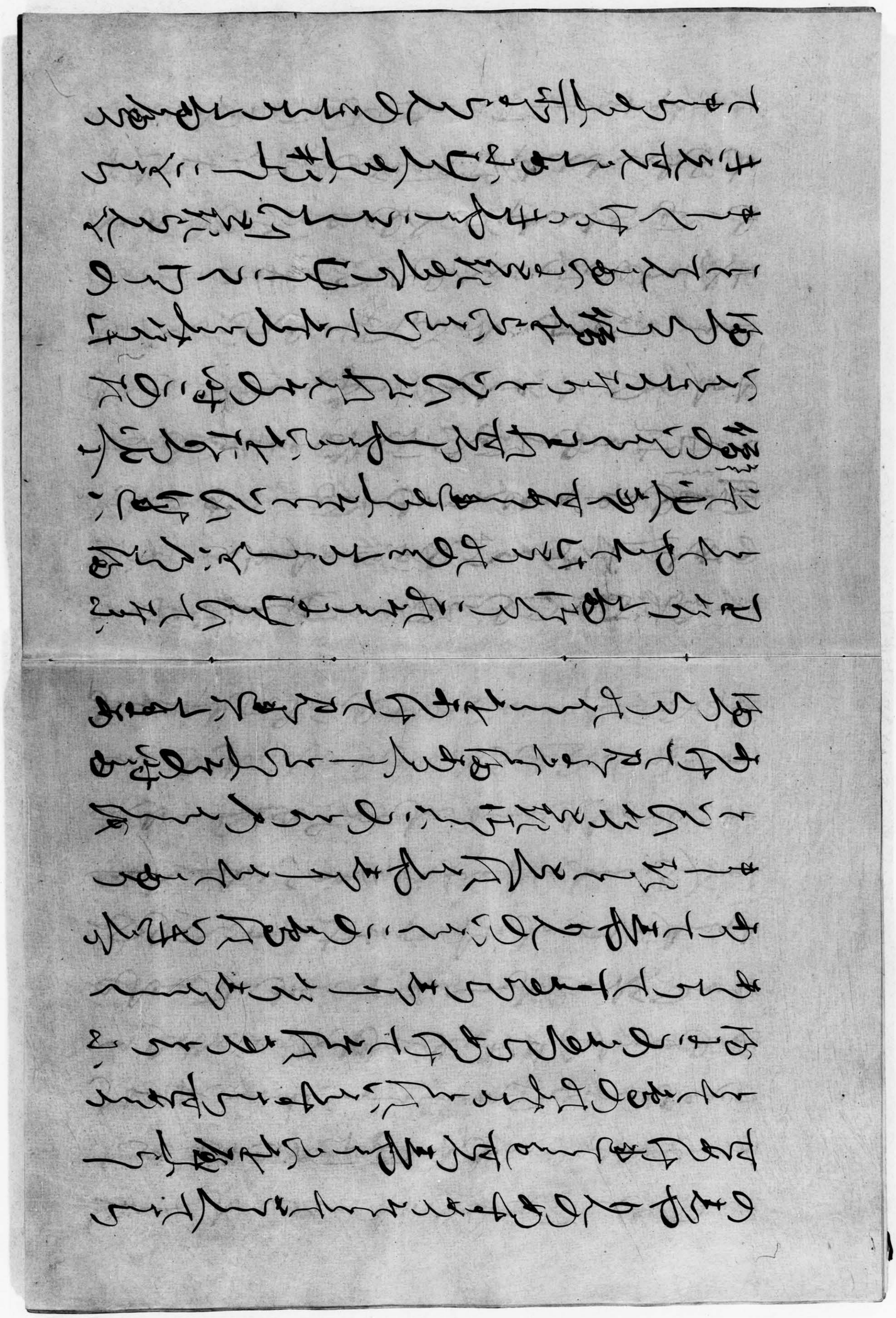
こゝのはまるこらくれ身のうみさを
あまいてかんらい志しやうのいぬらふ
らりまれくするらぬふはつく御う
まけまてんせぬくしの座まひとらま化よ
まうつて志しやうをてしをいぬらそさる
つかりさまれ十くゝ三世の志よ三川
いさしあい二え志えそてわつせ三悪道
いつまのはひくえをみまくのこしされ
ていはれのかうけまてもゆし本願のこ
さてまうてはしけよあつるあまつくし

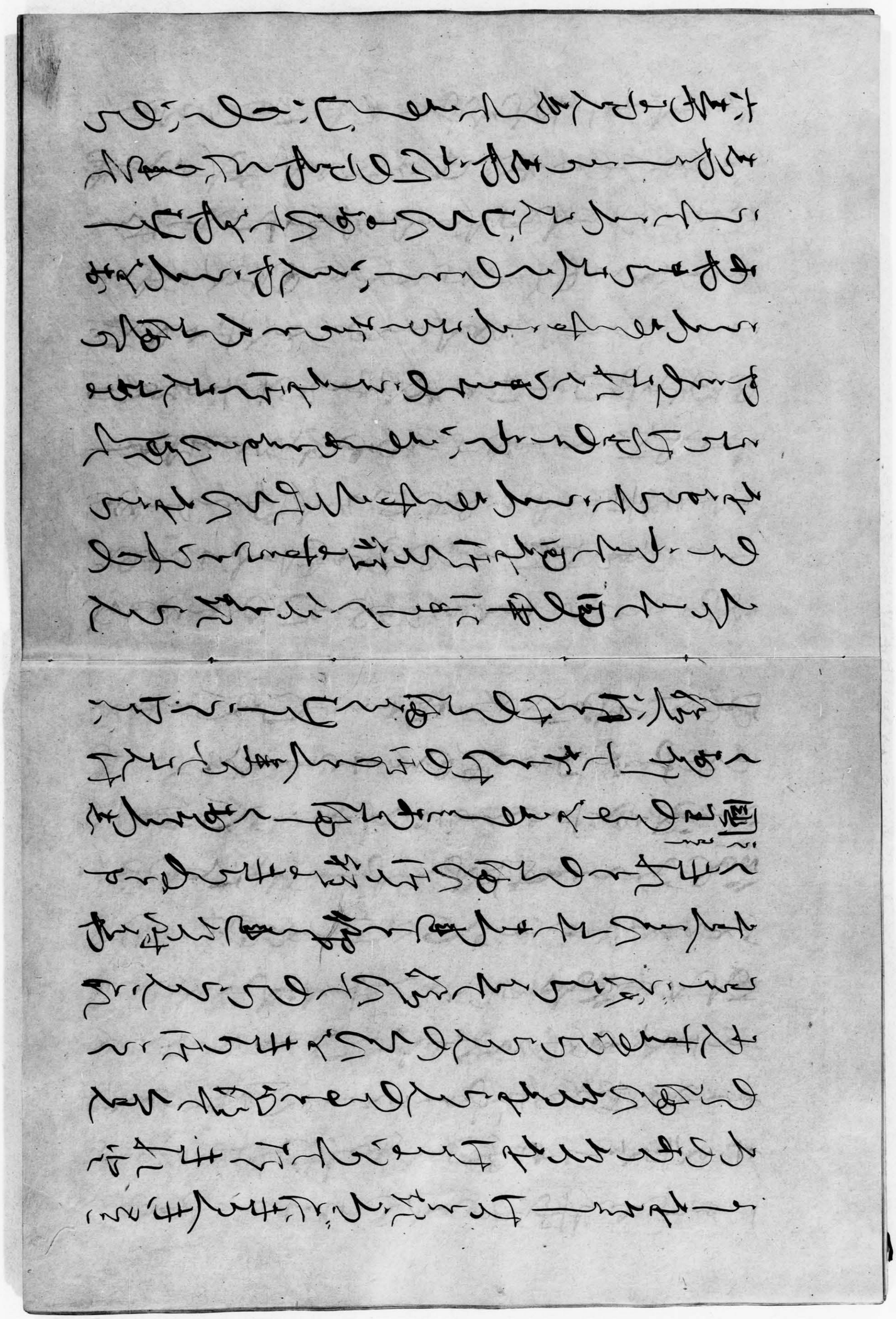


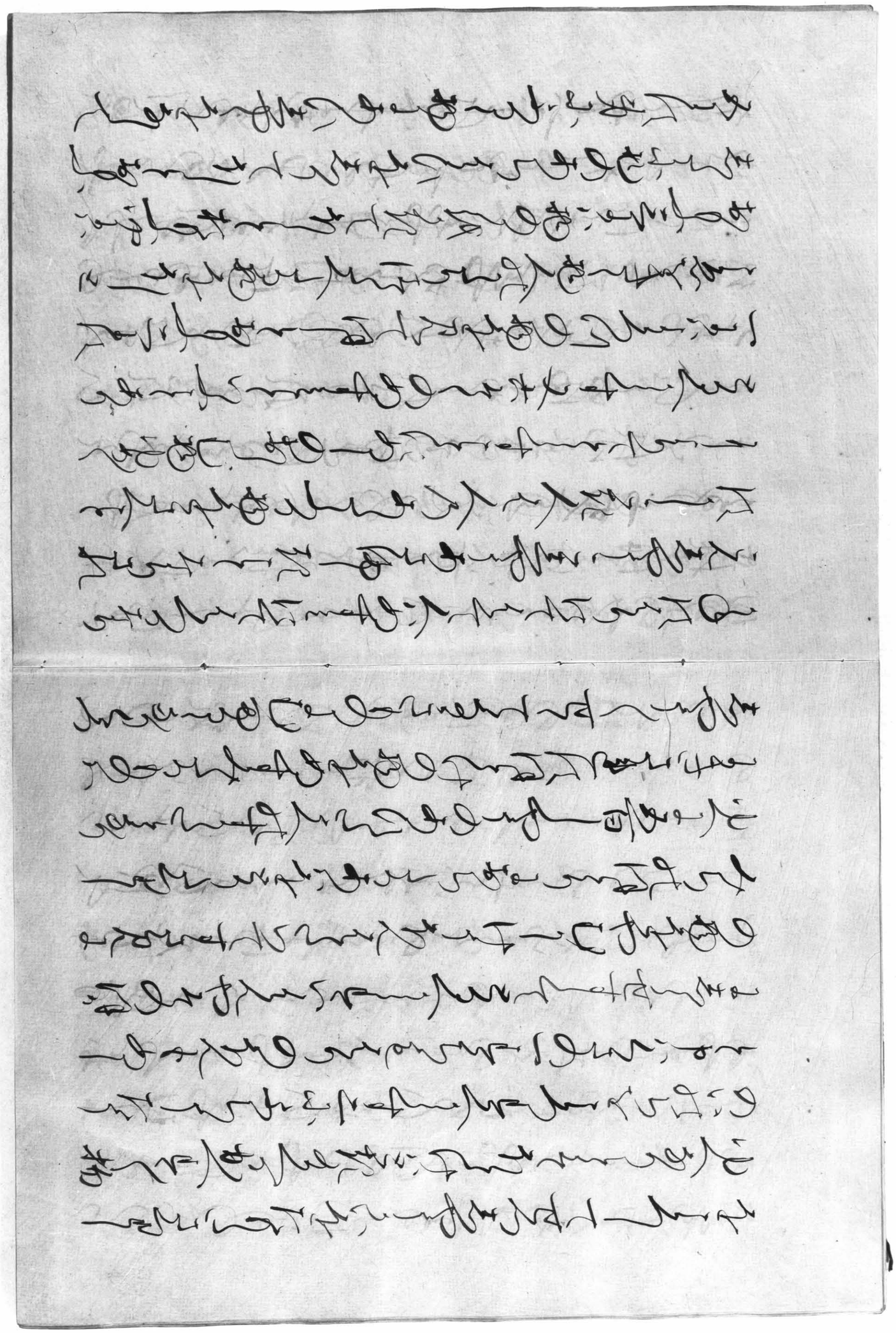


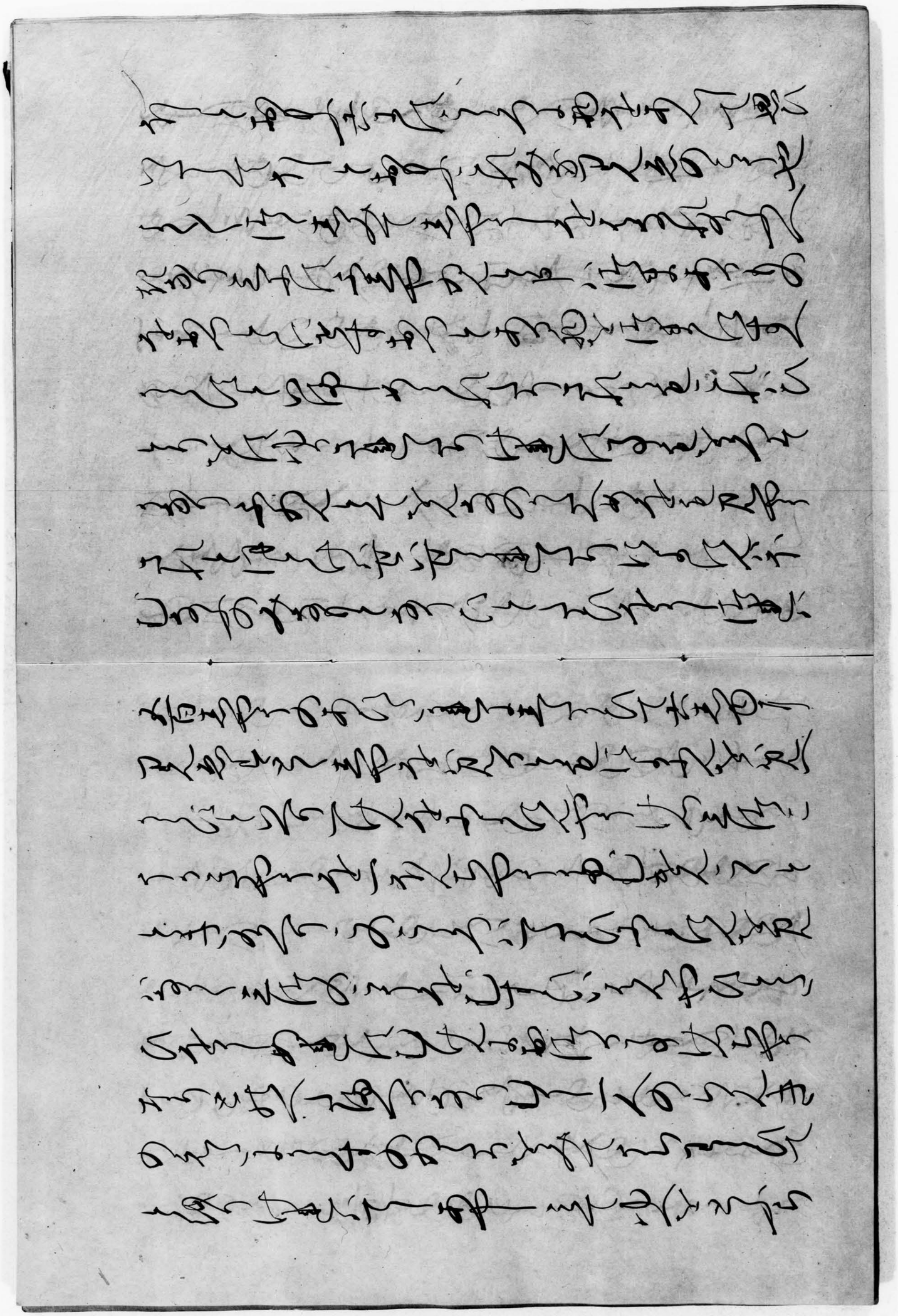


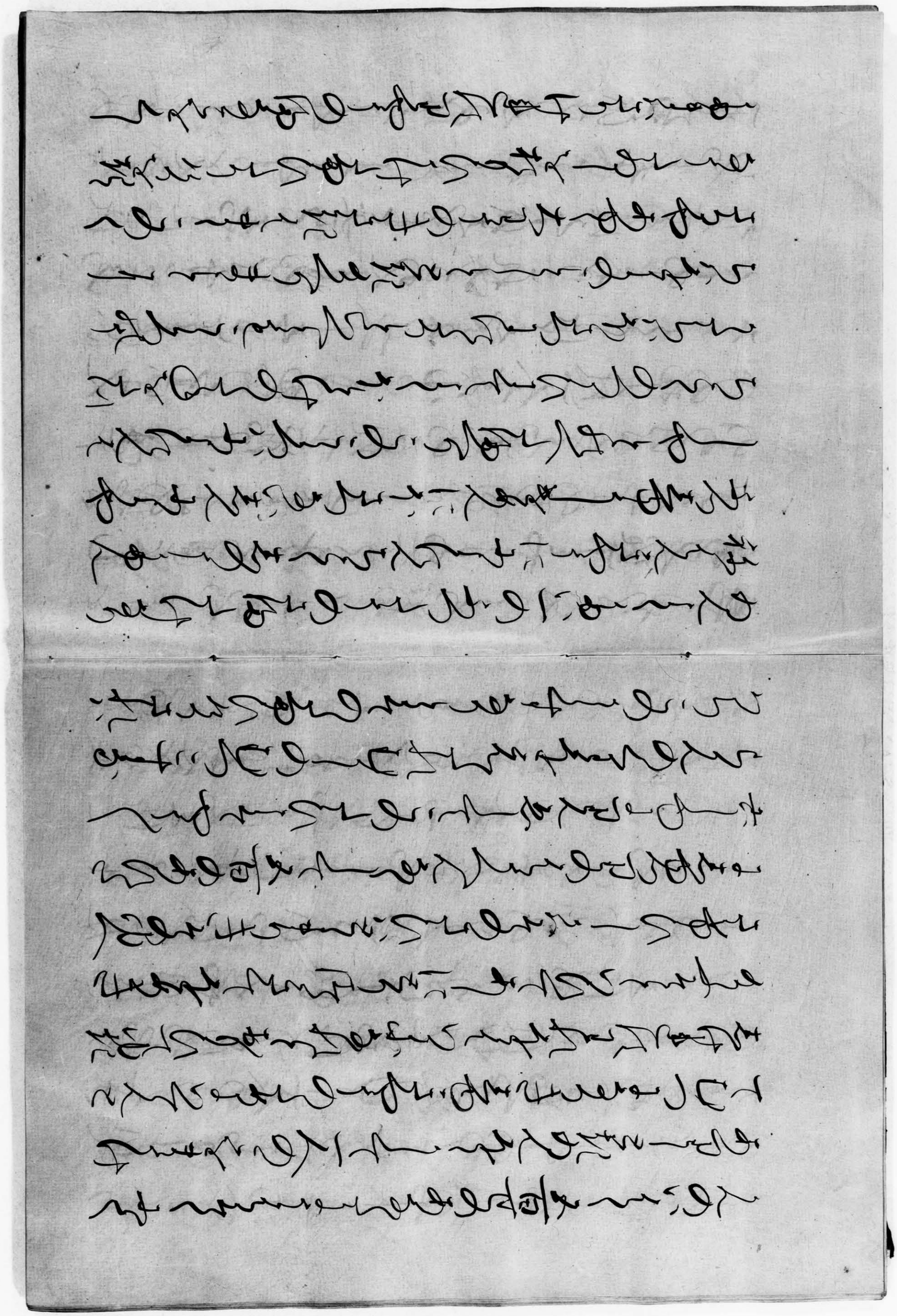


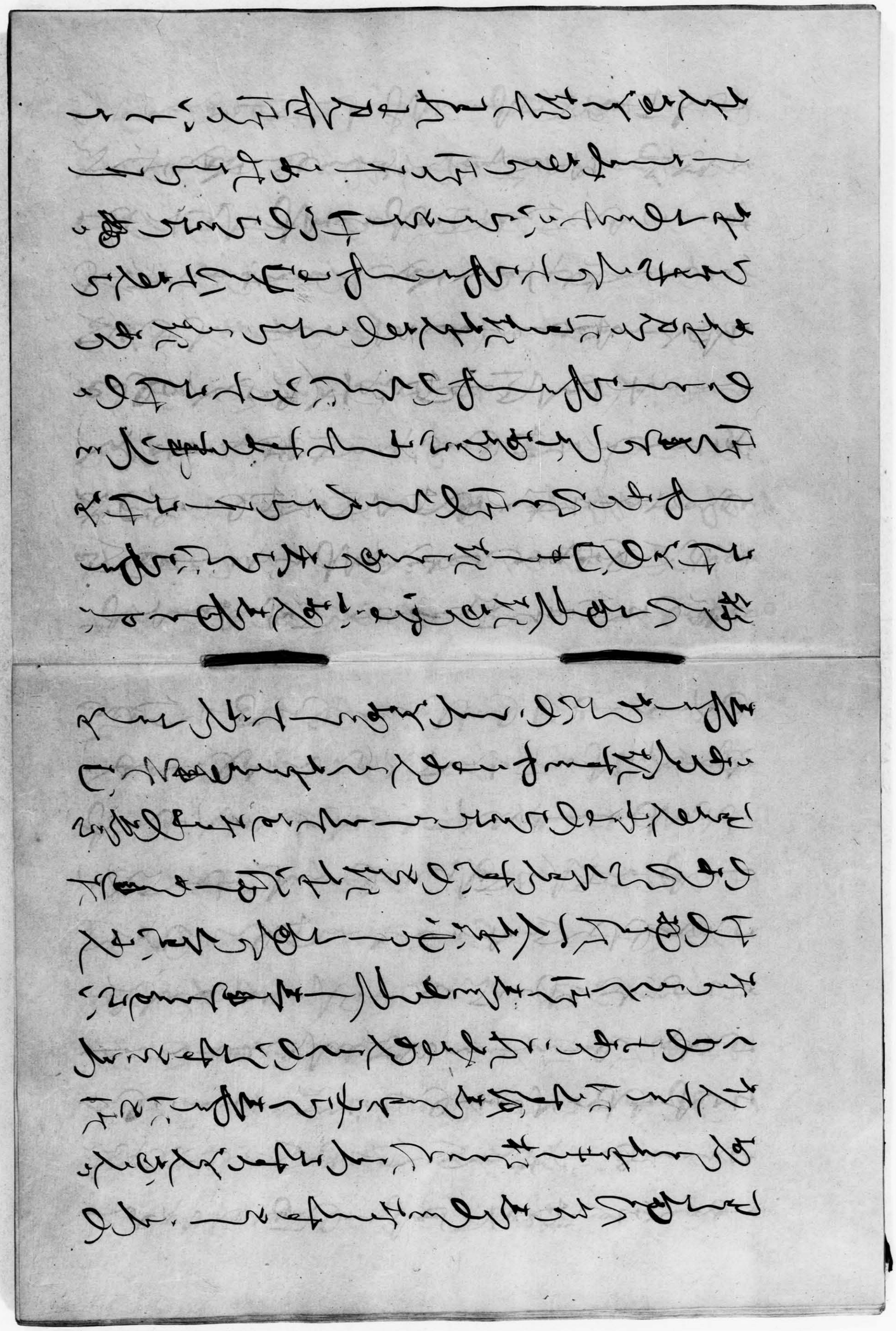


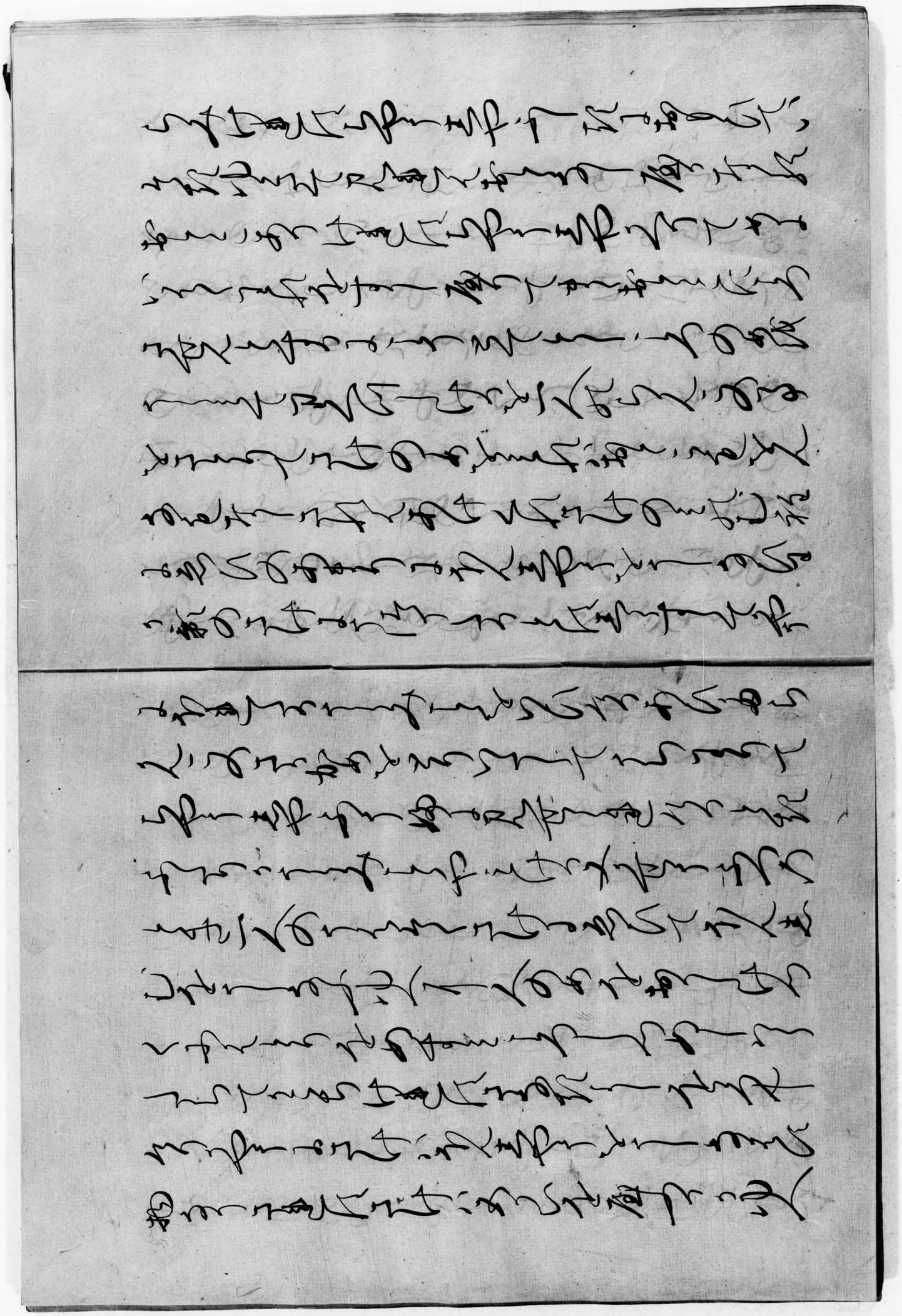


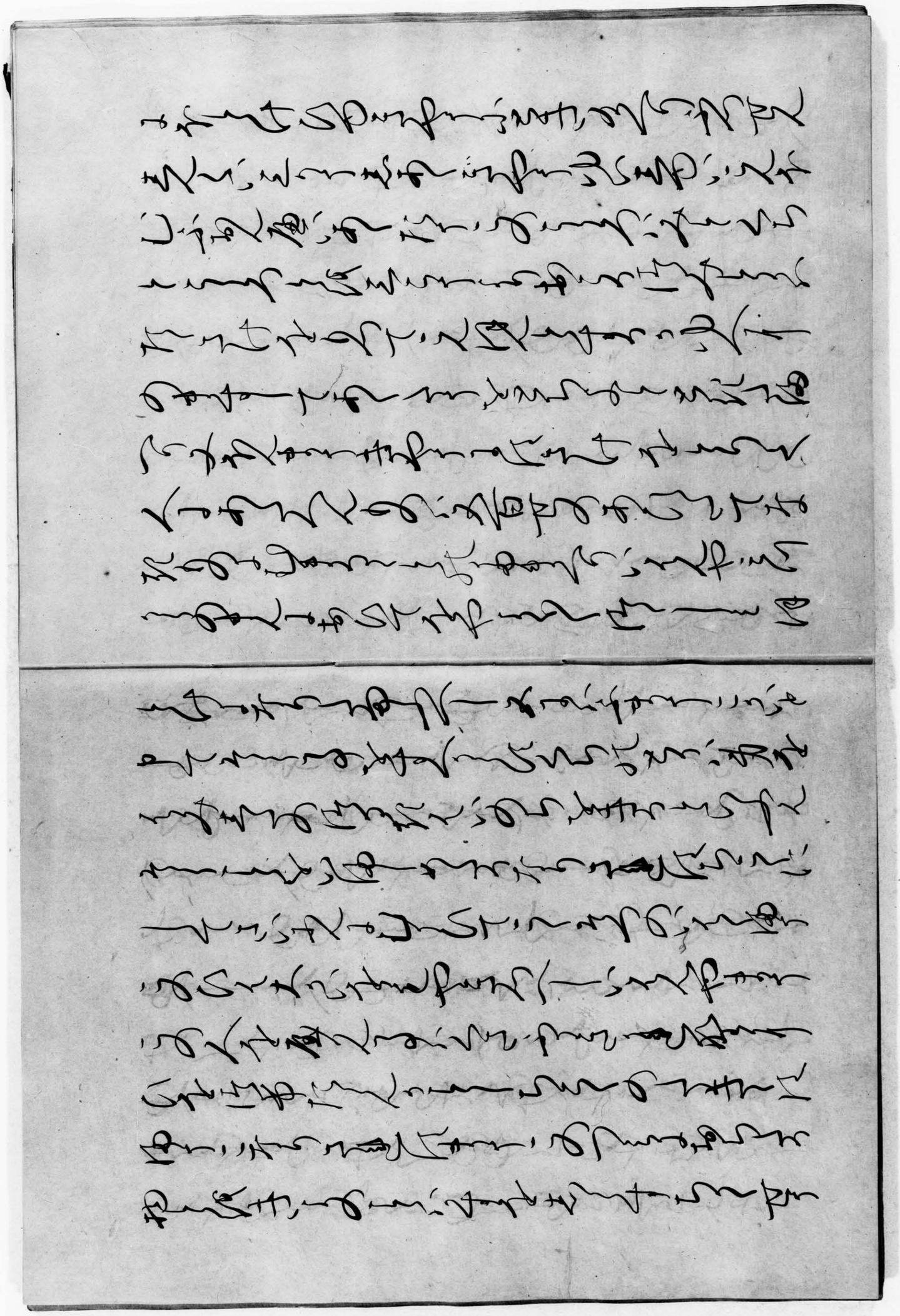


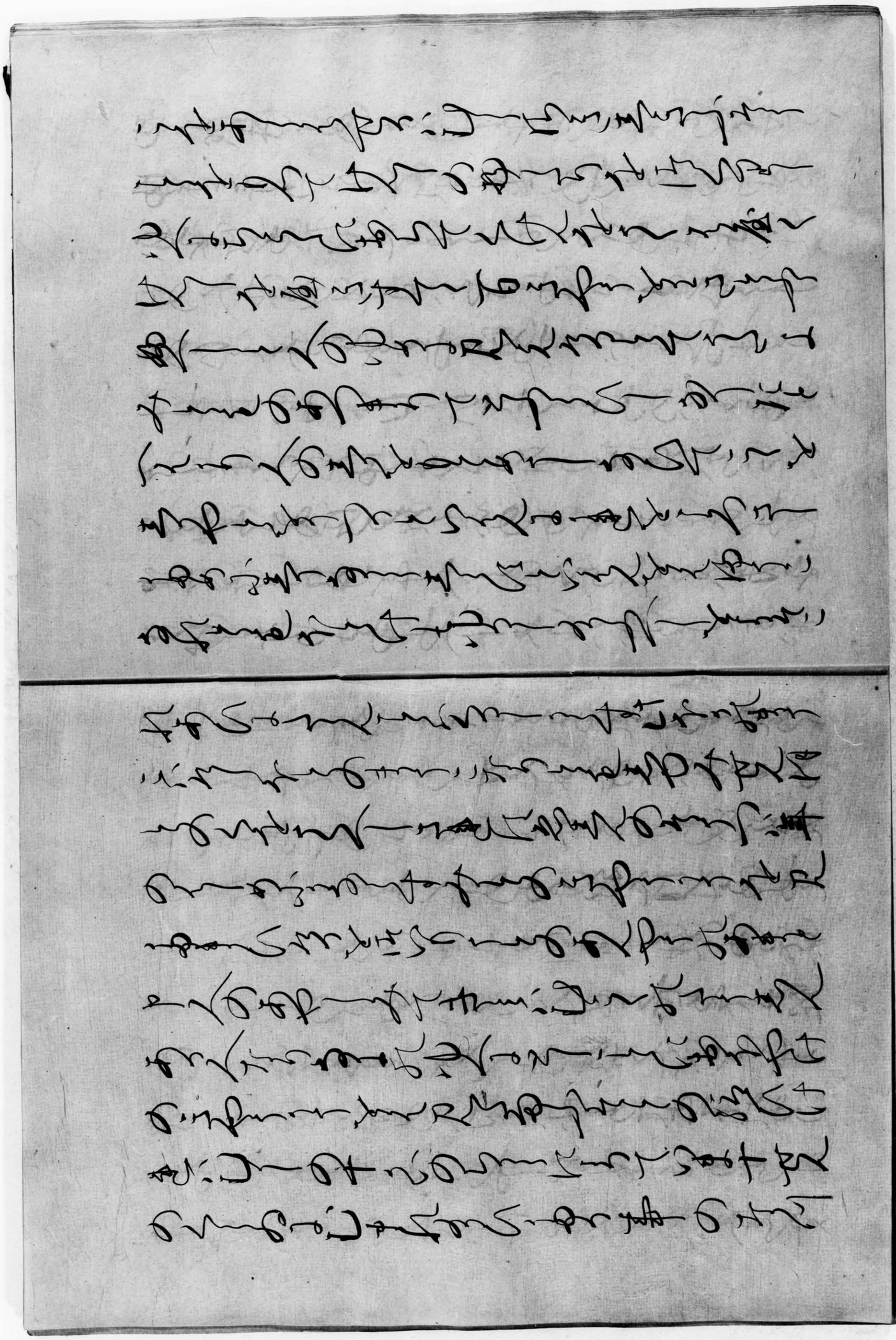


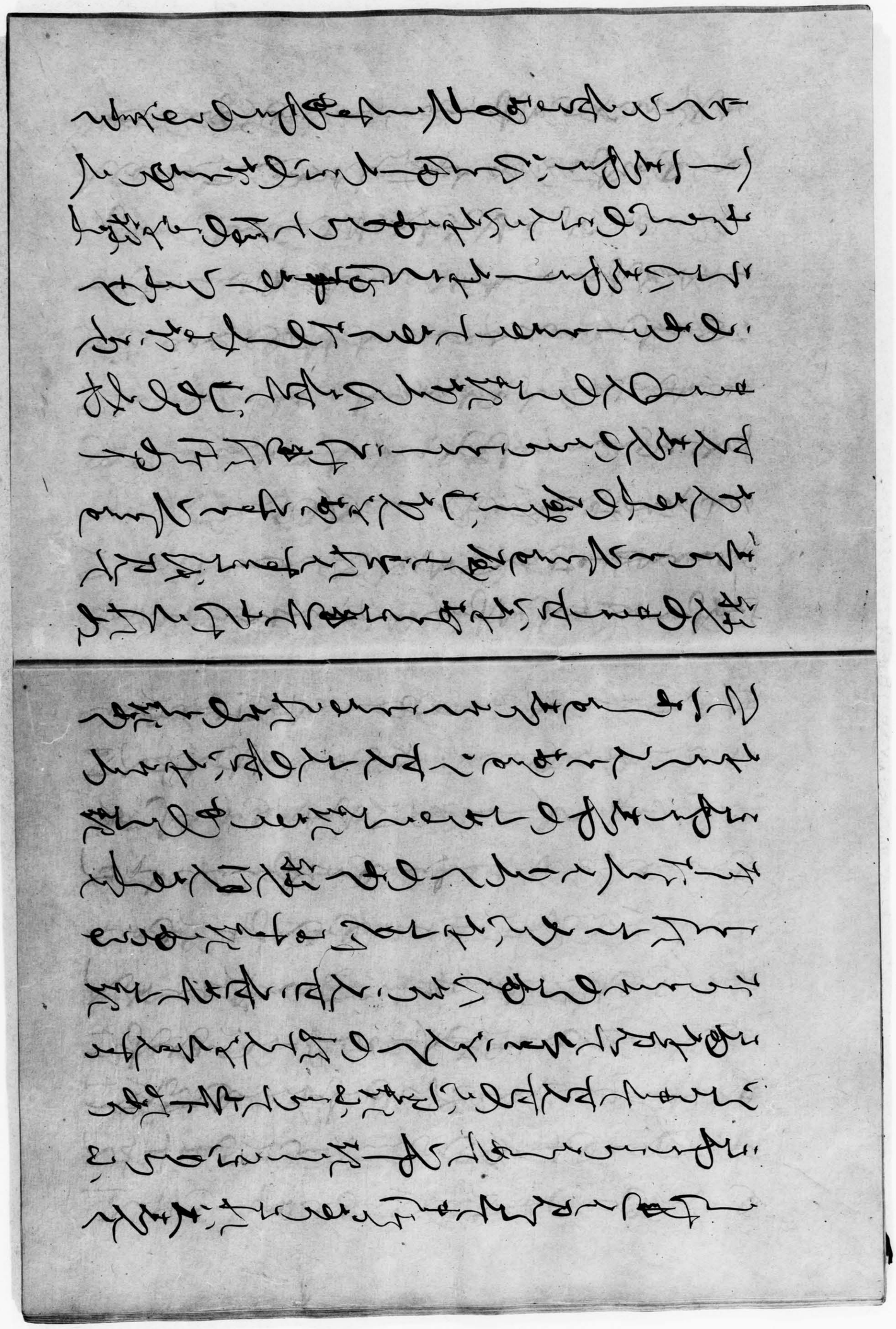


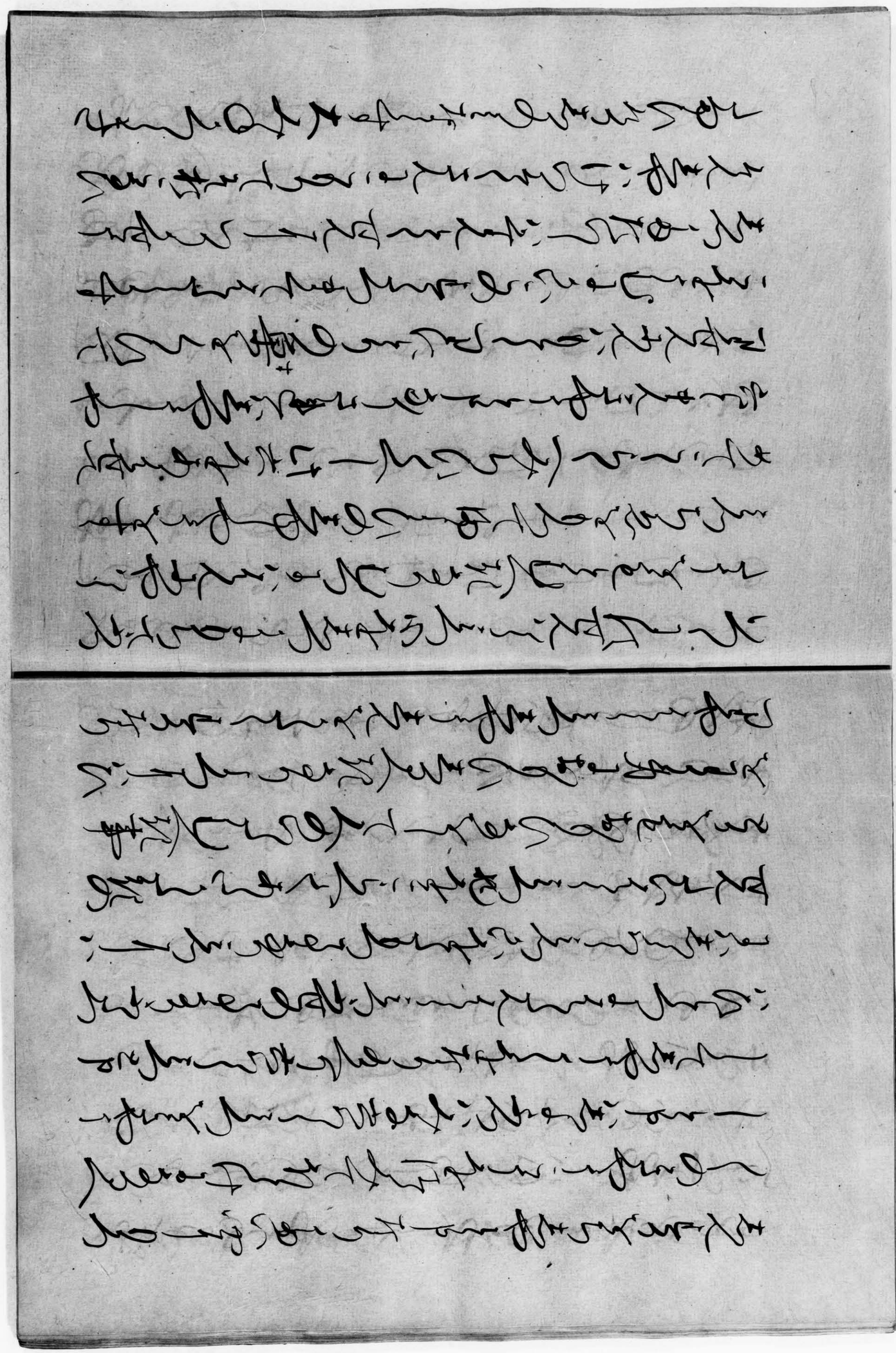


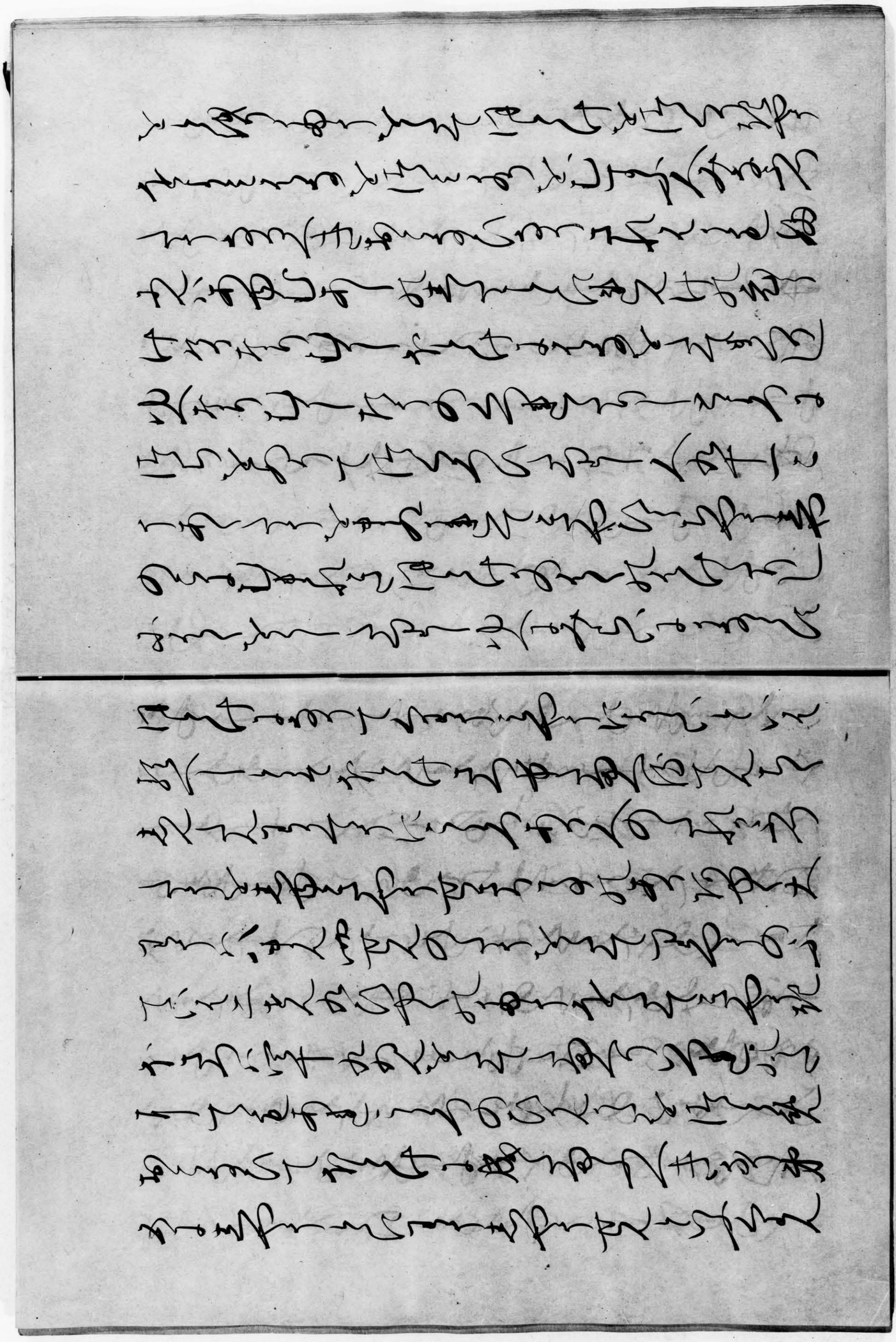


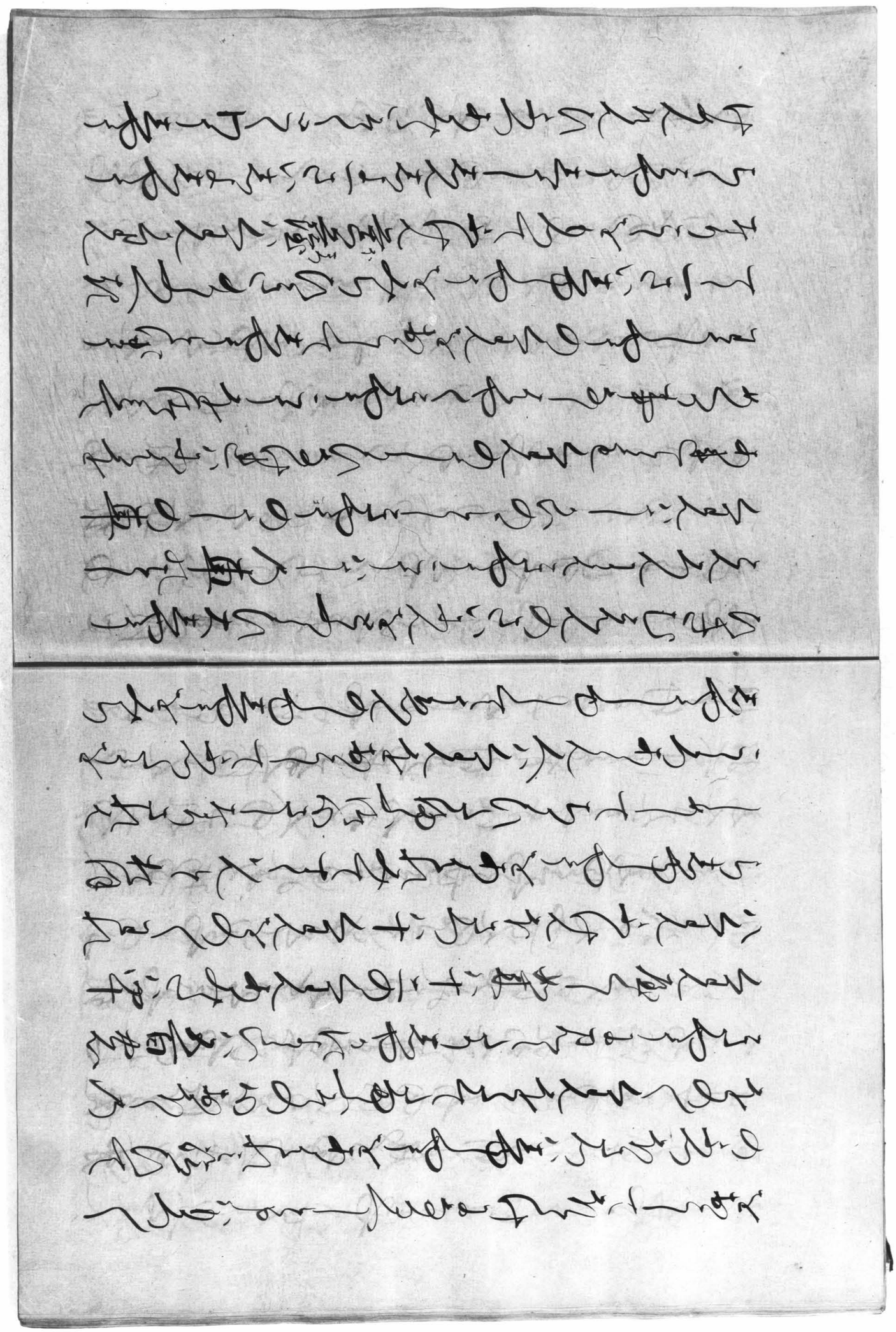


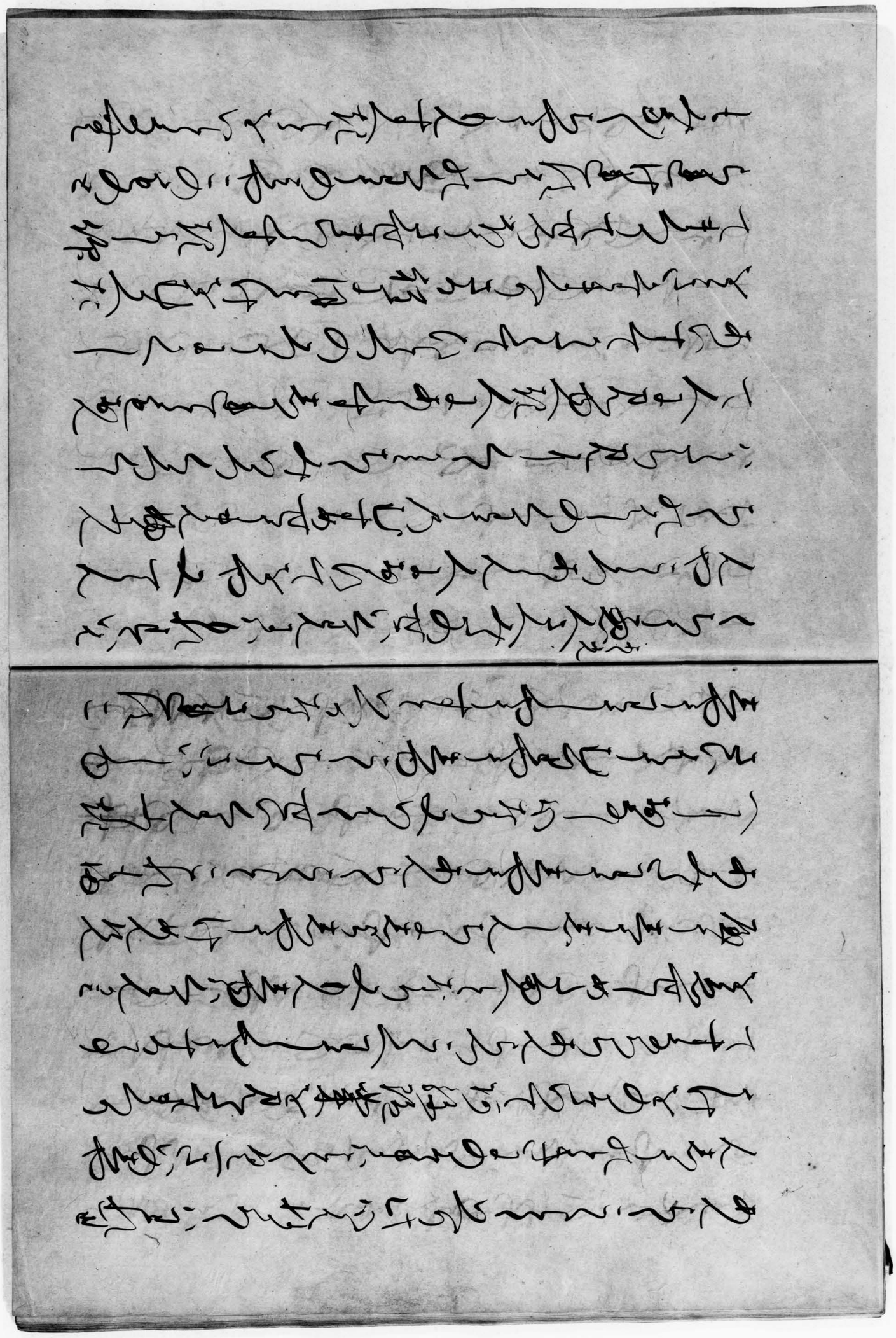


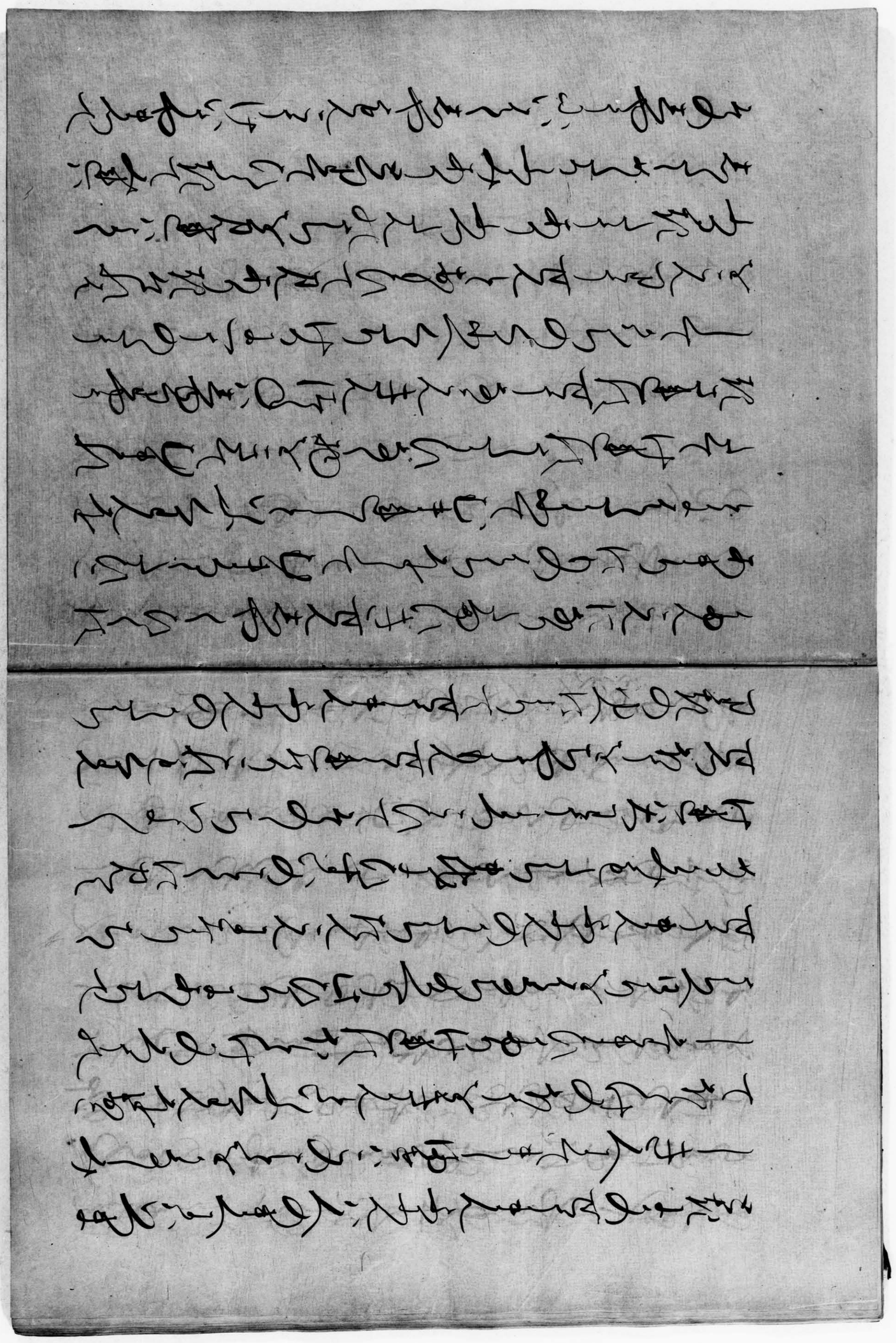


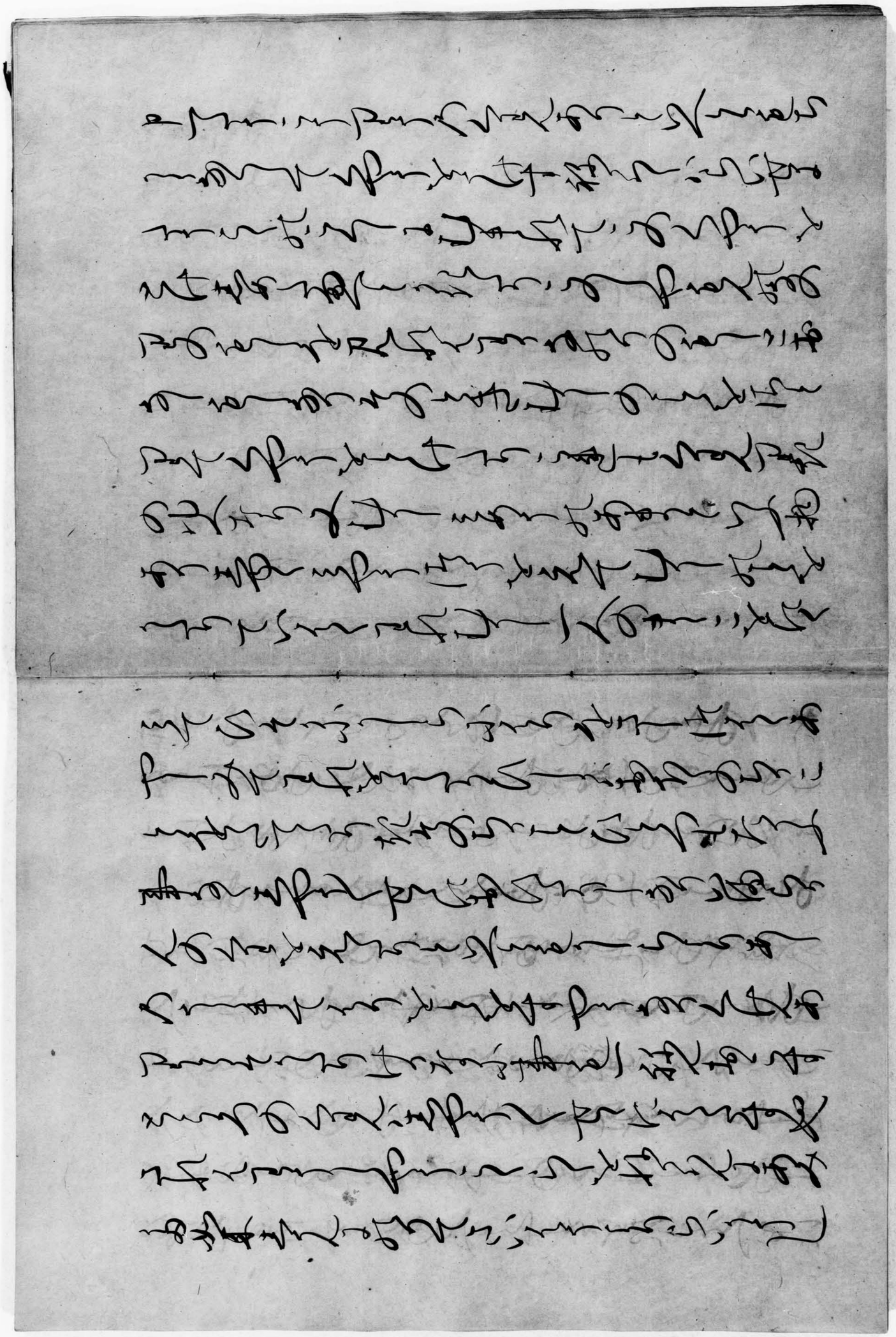


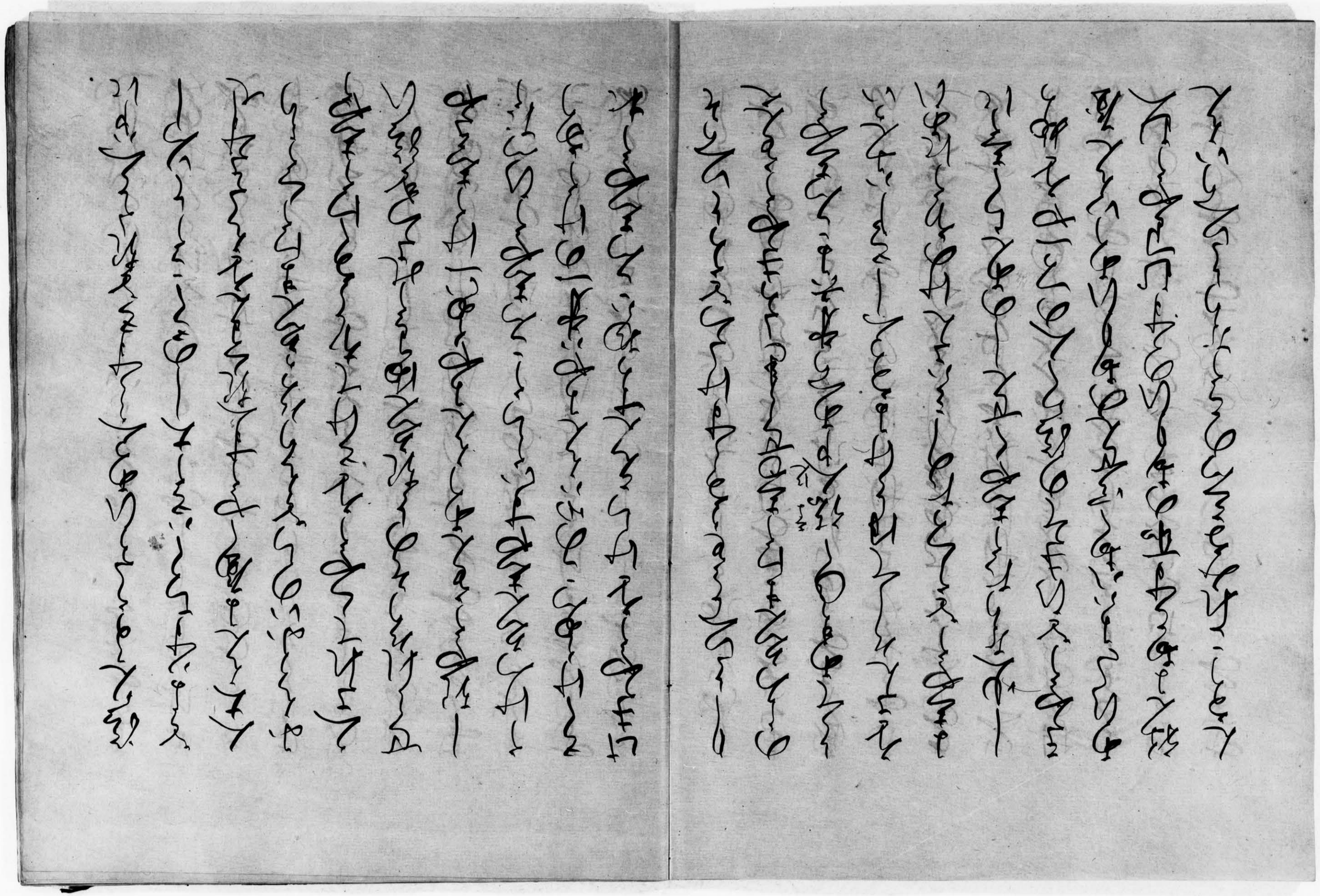






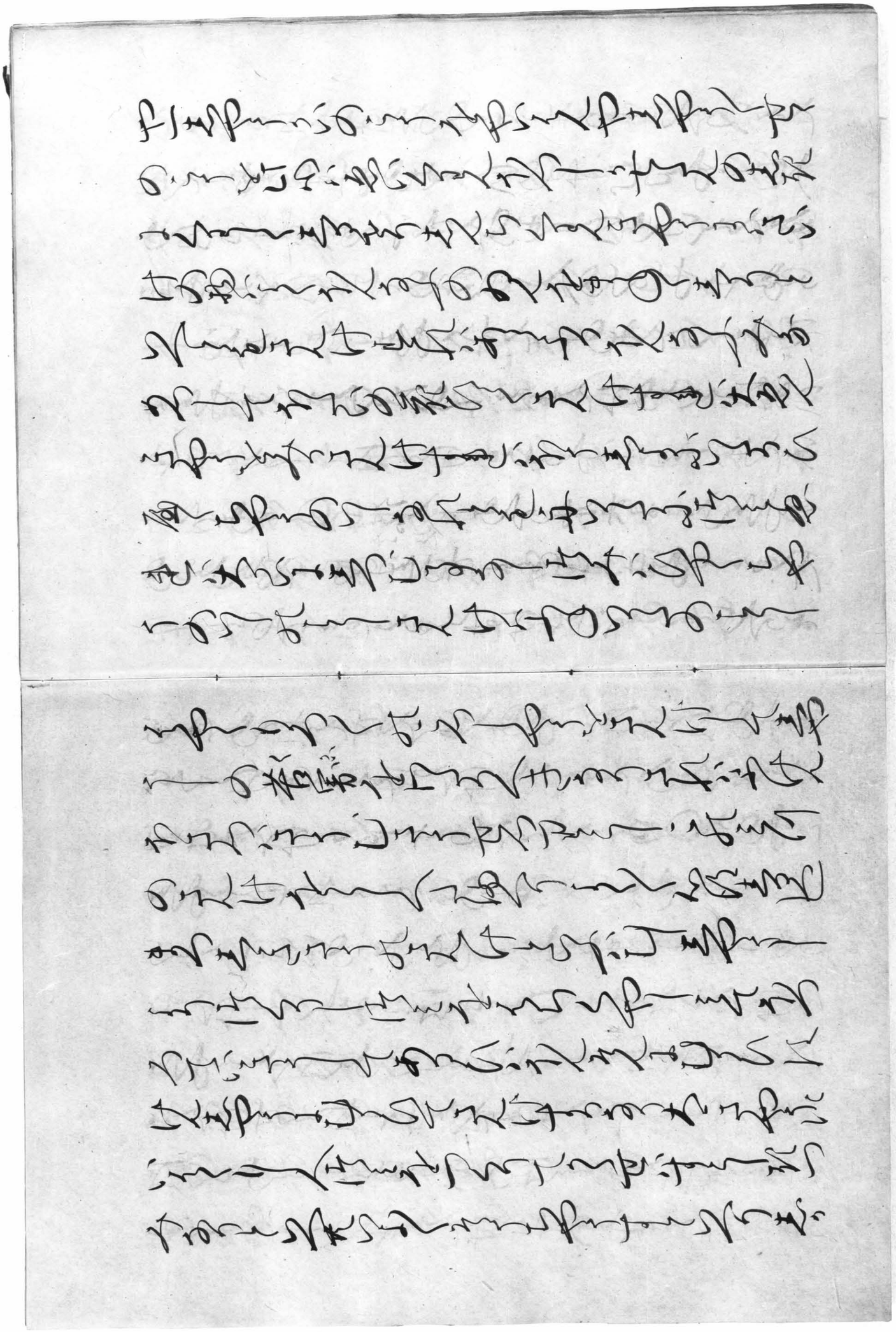


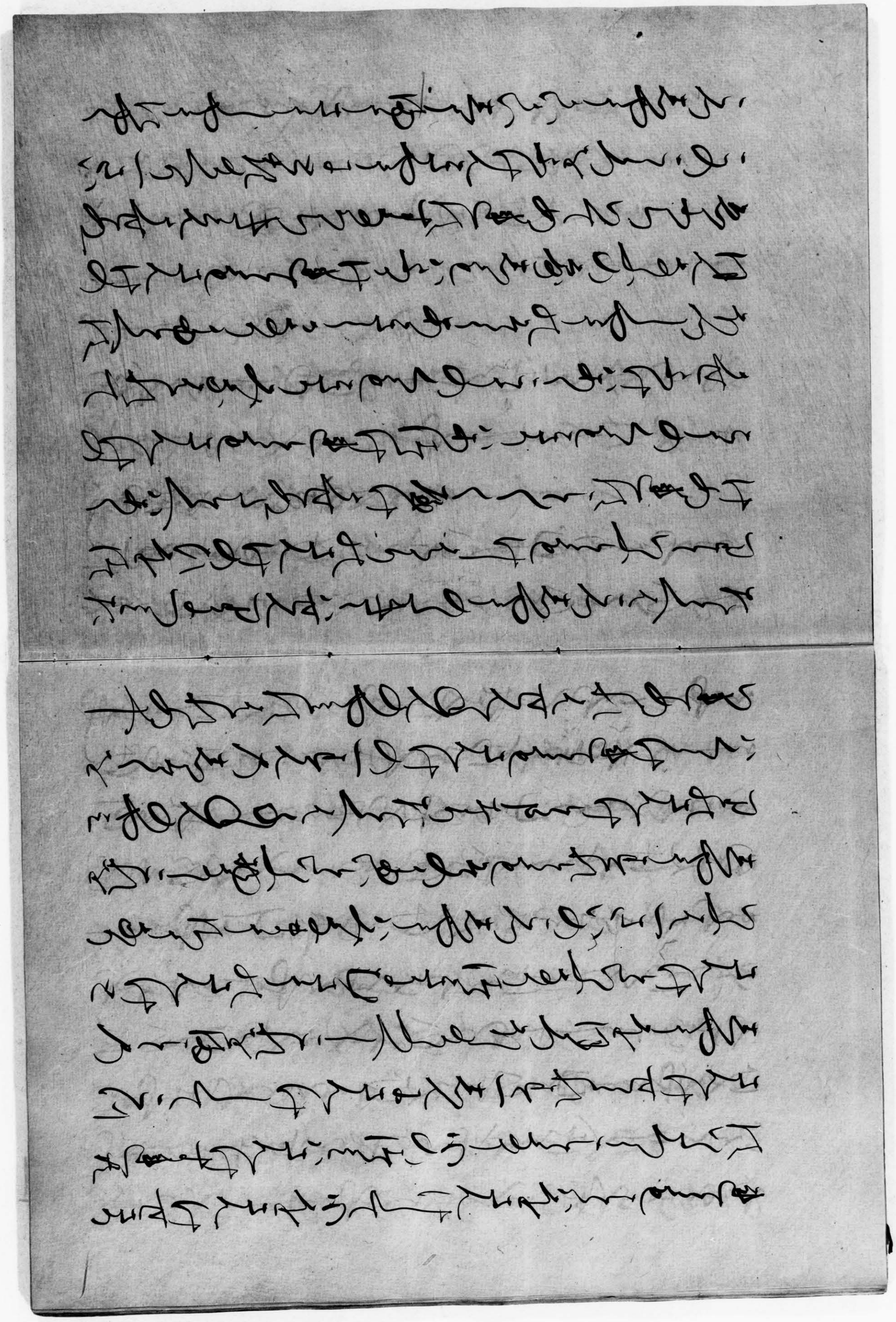


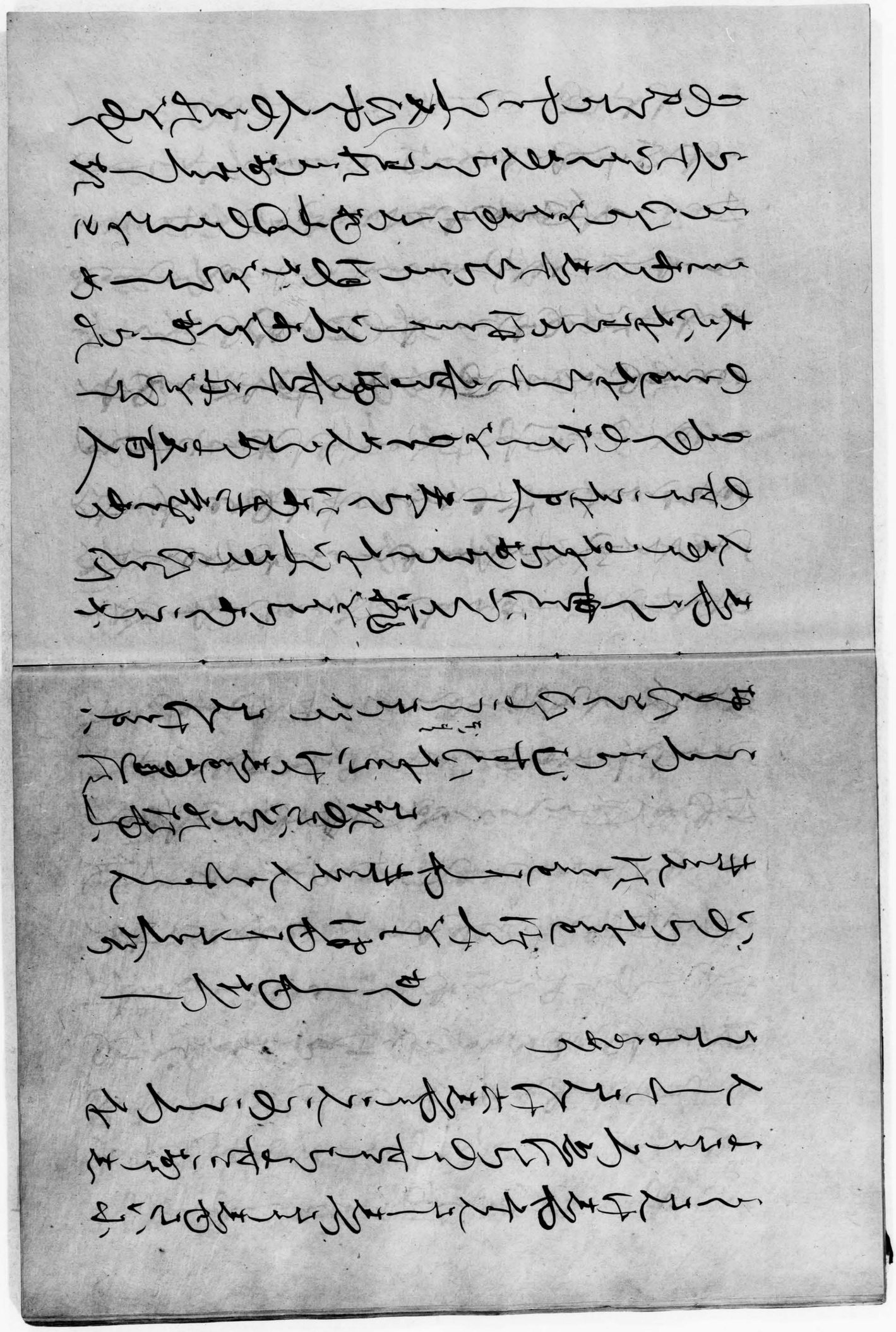


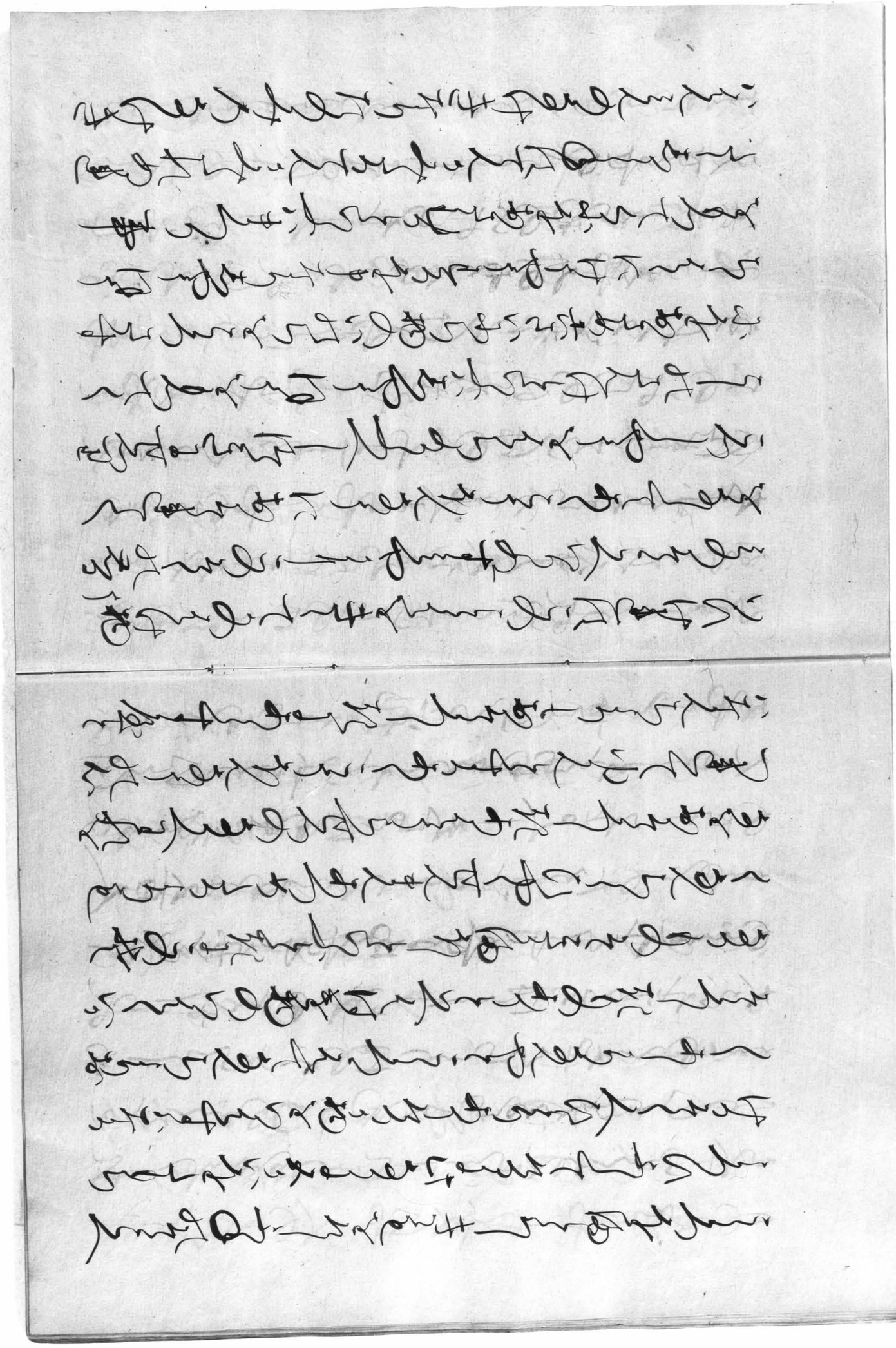
ほうし人すゝうひあつ人へゝみすまゝ新さ人のに
ともに半すちゝハこゝ大しのさゝこゝともよし
人太ゝ人よ座ゝやゝすへ新ゝえをとゝ半すて
みくふいのちとをりなの見えまいらくまいり
人されてくやゝをとけておくるゝ申しやう
せられりそのゝ新見ゆるぬさら給へ
し新やうを人ありくんよやゝあゝ一けりしやうや
すけつ見え志やすいらゝころ志やうひつたり
ろくけりあつこのやいくんゑやハ才一のけりあり
しきやうをけらえ人すゆ内ころしやうね

りしゝへてしもゐゝすけるとゝゝしへりそ
のゝろ見えまいらせ申しきゝきやゝゝ見え
ゝてあすゝのゝ俊人のあゝ中才云まこゝろ志やう
をさんゝしてほゝけまゝへしゝみハ宇之ハ
よ志やうとゝくろたのしゝハさえけのあゝにあい
し此人なりたゝしやくせえしのあへらくしやうに
ゝやうとひきてのゆるく人のゆゝ一やをゆる
あれゝまハあく宮せ人のあゝいあいゝ人座
粉人よあとすみのあゝしひのすじ刀とやうしん
人まゝこれみるさゝのゝらかりとしへけいへ人



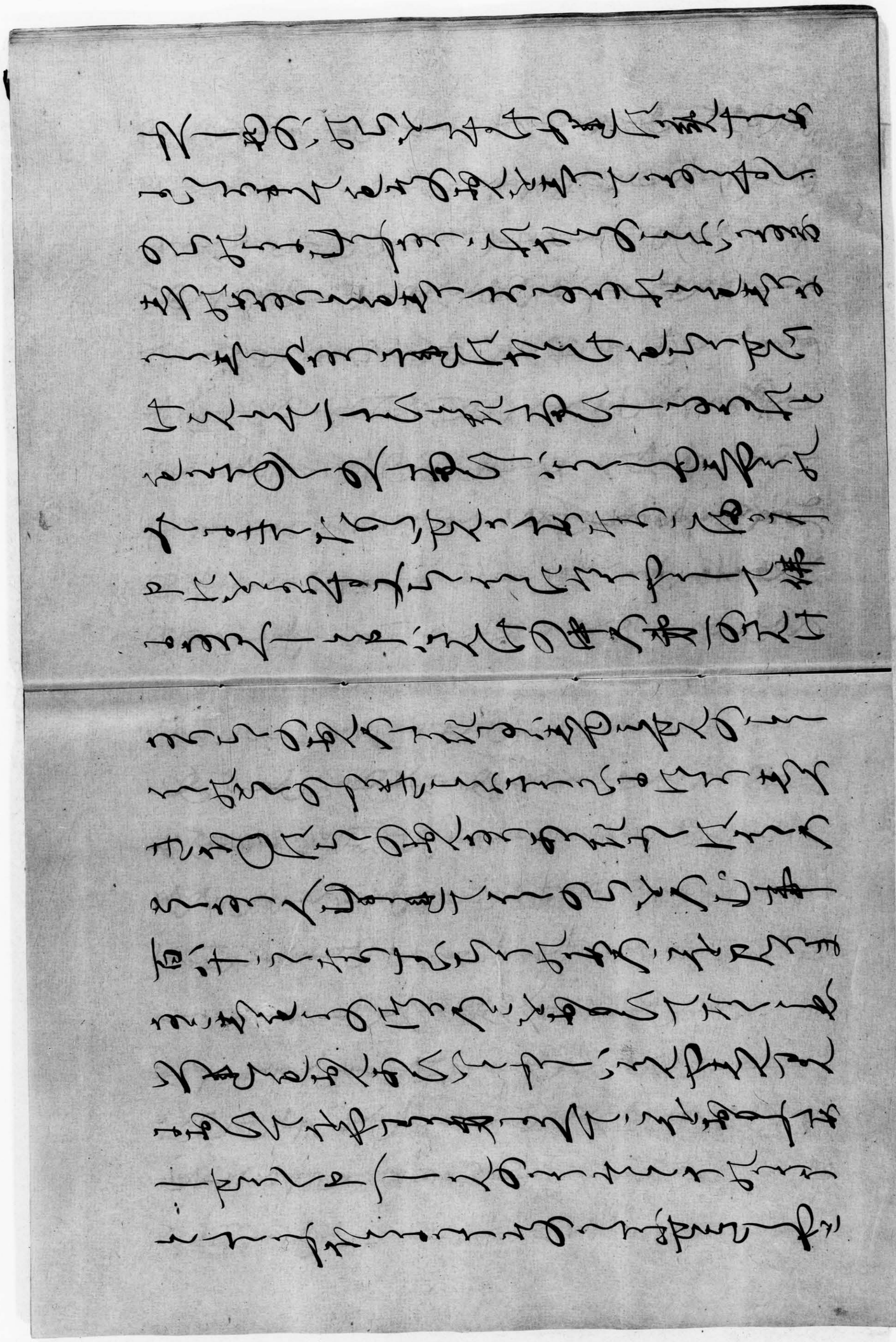






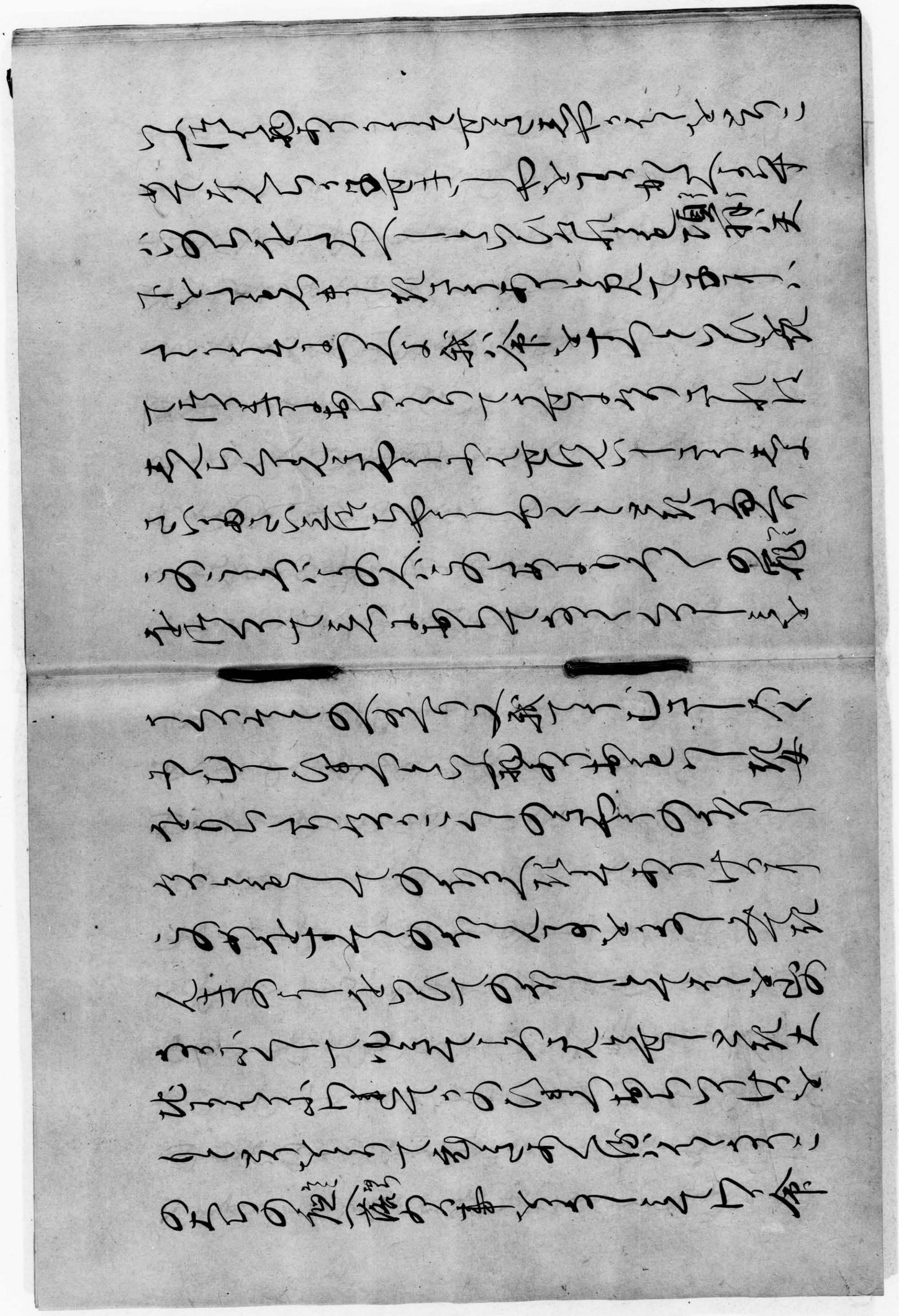
するからさいにかたりまいらするのおしきは
こんせいせのくらたりさまとはきのうえてい
はなさいしらせのいのちをしらしるかすむしら
しこしやみのありかうあられひとつみつは
あれかうをとりいけるかよしにらてこんしや
このいのちのひとりきやしややしやえ
ひはまうかうけのかうつよすあつくそうちて
たかふくからかうゆへよらやしやのかくとあ
くちすされは八まん大ぼさつれはかうしえくり
くさしこうれいつくかうちのはかとひとあなく

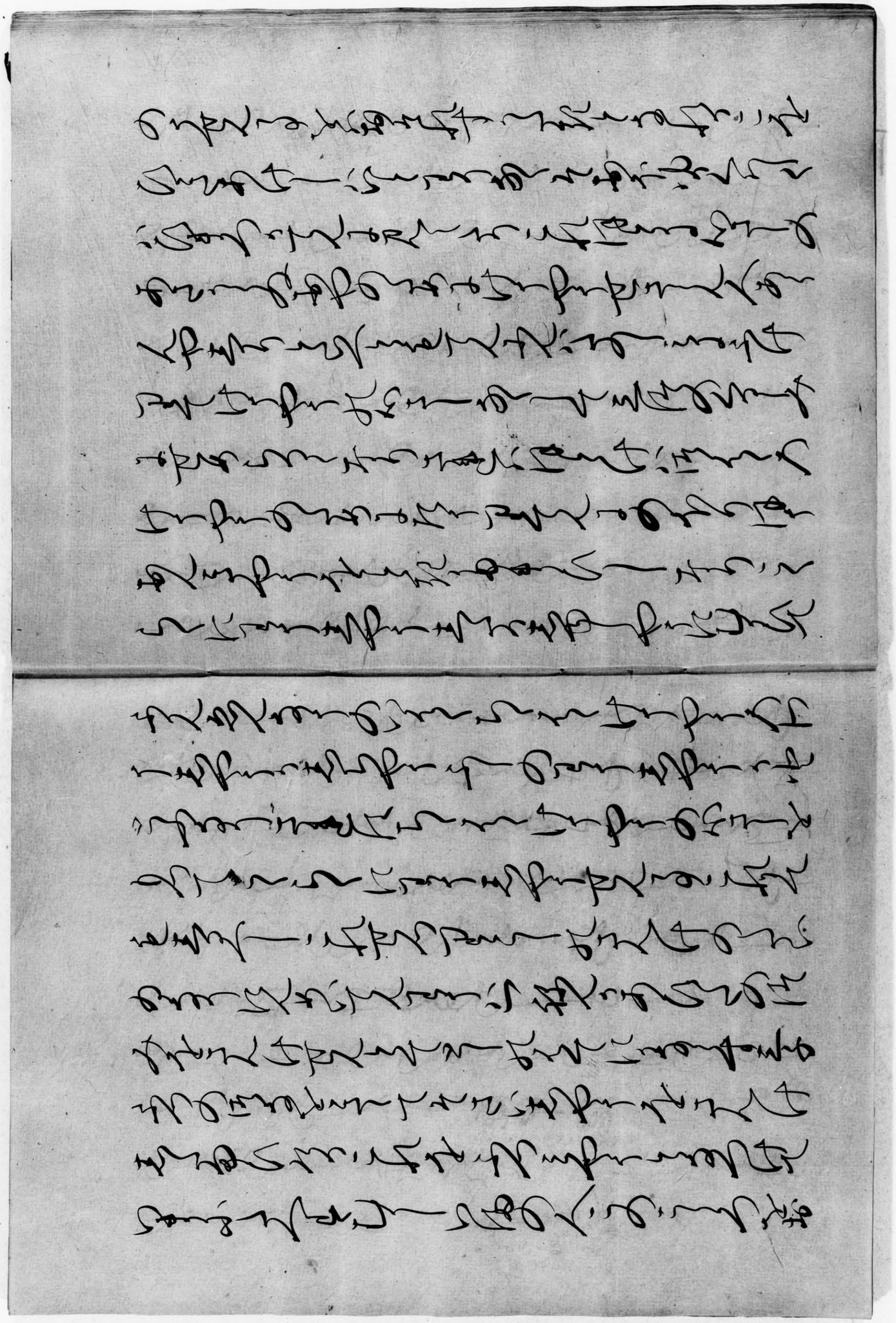
のせんしやうとはかしせんしひしそのくん
はいかすくしえしあよすしまれかうよすあれ
うとうりて大かいよくあらうしまへりいまれ
くらしやしよのまつりるのこれあるつくし
しやうえしれいけるとかうえてくあり
たちいちいさきからをとけかれあれとを
いのちをおしむるすいあつさんとうおとし
さとひちくはつくしむまうくえくとこと
ありよくらふ人かいらりとも死かうくらくも
のいのちをしろかすましてしくあられみ給



しやのいのちをたすけめまいらせ九十九あ
まいらすれはそのおんをほうずる事をあく
のられなるむまかこれかるのこんいくるる
ほうめかなりともほうぜんとするこれをほうずる
うしなつのうへにはかりけれはもちいてせい
けんとてしひを給ひしるあれと
をとものしのえをかひしかはしかもほうずれ
みなまきたりとせんなるかたなこゆかり
やにをこそすくしもちゐかやうして仏
ならへしとはさんけの中の第一のさんけ

まいらせのおんたすけられるはほとけせんのくらし
くるしきのつきさいなきにはちうほうの
きみのはちのおんなりあつたはうかの
さうなり人しまいてもいのちをうしなふ事
百八十こうなりすいちうれあつこそみまるま
まことをそのはうのことをおもひてなくてせ
いつまでもおんあひてつしいえんやまえつえん
まおもひてたやうまうしてこそおもひ十あ
しせうくや一しんのくそてうれかう
とさよりうくそのかへふせうしやさ





おこりたてまつり
あまのしたをはなれたてまつりてはへりしかと

平重盛

すゑやまゐらせん

源中納言

これしもものゝをもしらぬ男のさかみ
みよのほとけのまつりきまする
第七よりつくのせをまもりやましとし
日はしまふはくみよをかれとてしや
くをたりし重りこれをさんりしそれと
いふもの重はらせをまもりやすゝ人は
月のさしめていつくらしまにしへまうや

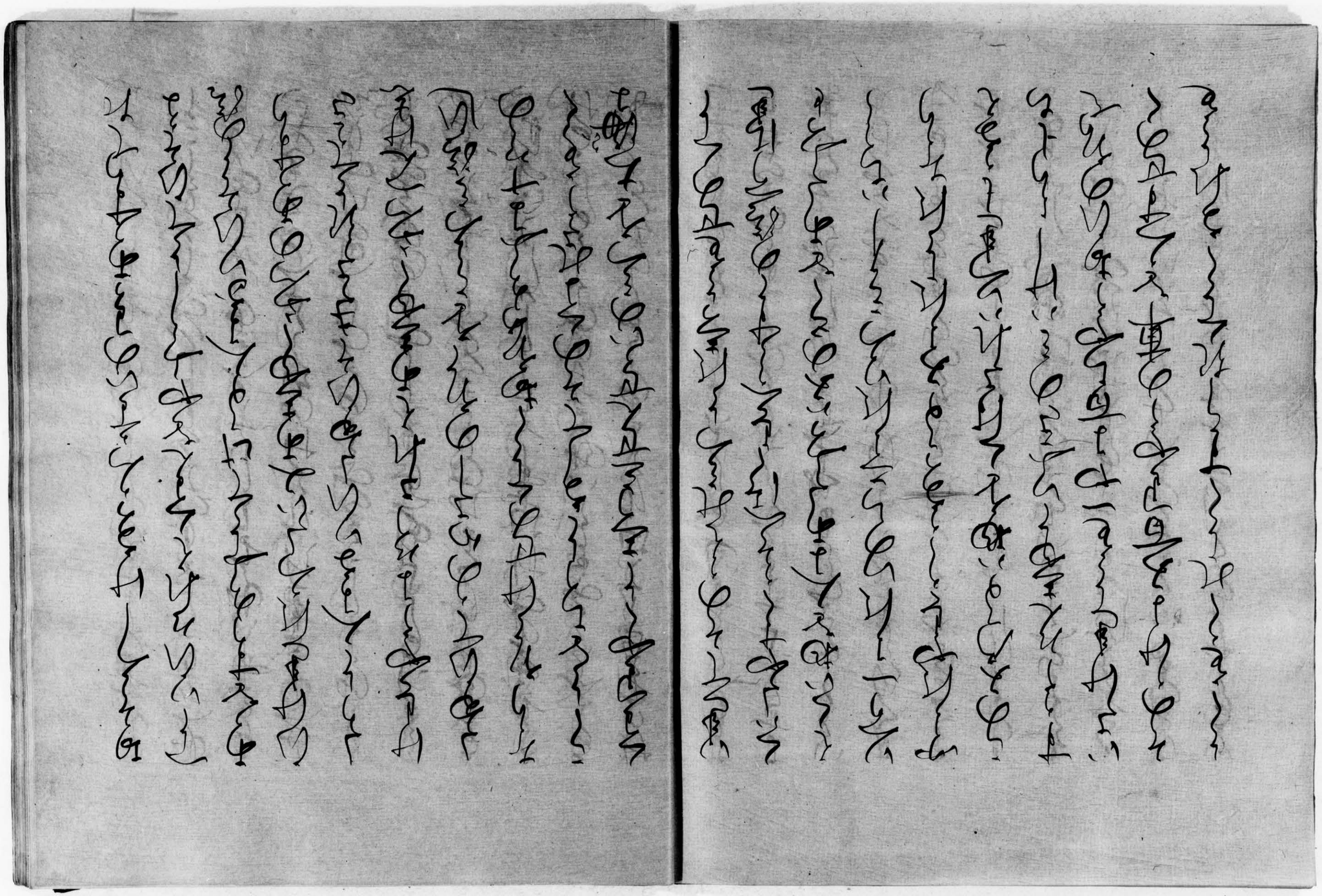
まうりしめて重りてまゐらさいしとすれ
人のまゐりはしもをもりはりまゐらせ世
すゝ事はらりしりを座すまたしてそ世
つるおけきやにはてまゐらさりはりく
すゐあきまゐらしもそくふりやまゐらや
とまれのくすりのくちはすれあれしれ
くみにころめこいらふまとるす人ゝ大人
とらひのかをもあはまれとてしくとはゝ
ありされきまゐらはらふをかをてそれ
うしのまゐらしとそうにあはさめるまゐらし

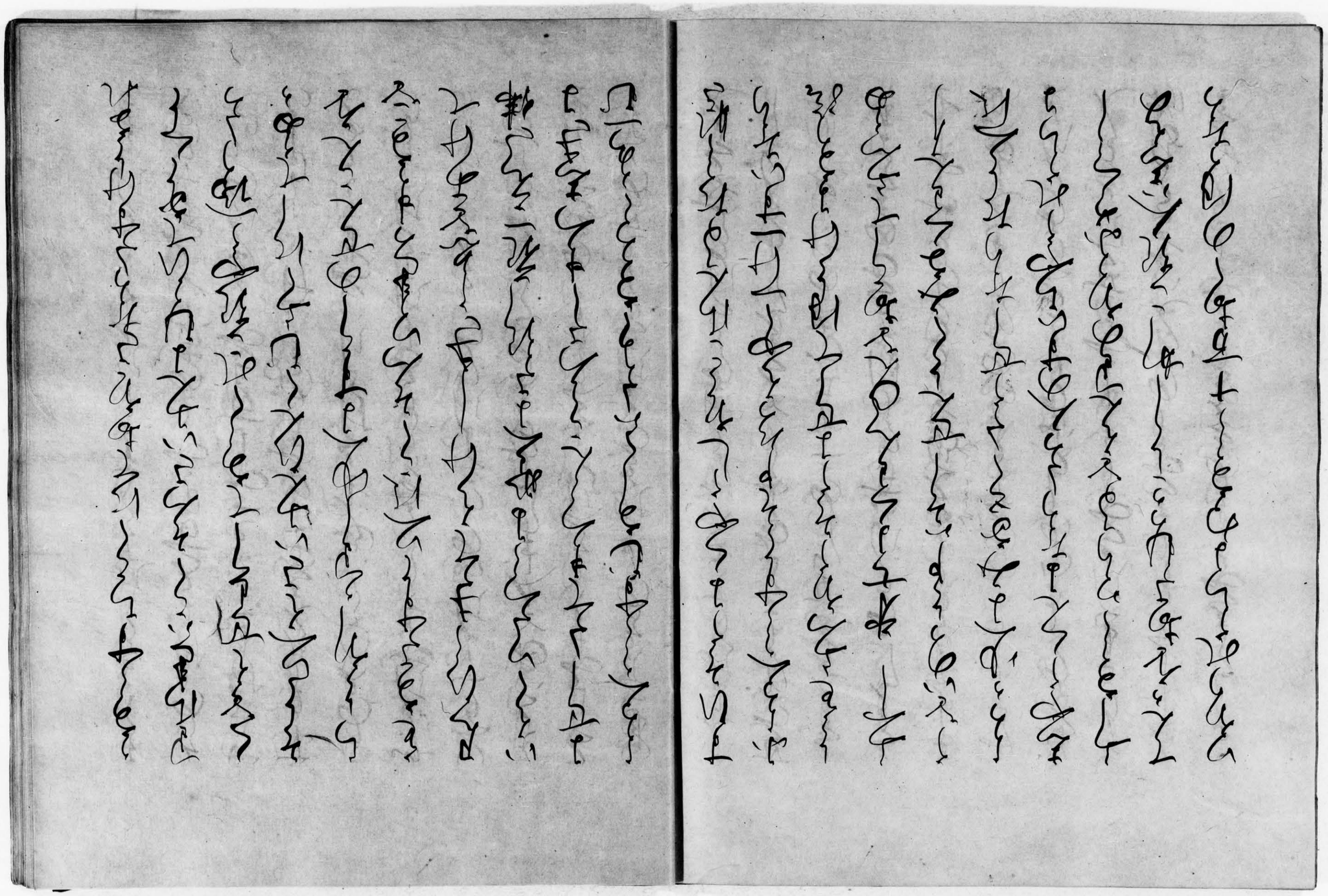
くすりとしふてうてはとこしせうせんたり
すいむちやうのうへよりおちたまひし座り
かくえんしやかはるをたもちてころげおち
たえいりてせしなりこれをきすまよ
ころさしのありける人をよくよくおもひ座
せうしかとけをもしくさうしせてせんあり
なせることてまつりてよふりてはとけの御
かうありけるこれおちやせりくわくしけり表
あんちやうしやまてひそかにあいひとゝ
まひんかよのせよ二りんりうさうらうこれを

あつしにくそてこりしありきるゆへは三年一と
すゑてかくけはあろくしをてまうをさ
すくるとふよういとをそこうあをいし
これをちやうきやのまんこうしり貧女か一
妃とはたまりのちれせへたふとまうてす
こんちやうしことあしくまするうこれ
はさありてんちうにたしありきやひしやう
みちやうよりをえてゆきあさいしくらのよ
まつたとふよのなかをすきまいてたしの人
はなをこのみてあかつきのくれ地をとりて何とい

て月日をおくりけるにちかし十二年といふに
こゝろをとゝのへてくるしみちのたより
よたりのありさまにほのきけふくもそえんとえ
こゝろをすゝめしひとありとしもおもひなから
いまよりちてくりてハさしこえしやられたら
してしかすのんとこれかくけるまゝせしや
すくせれさふかきんとおもひてけにこゝろを
ありけるまゝせうりてをしつくしきて思
よくりけるまさりしにうこひてあるとりち
てくりきちゝてこひけりとハありぬまけち

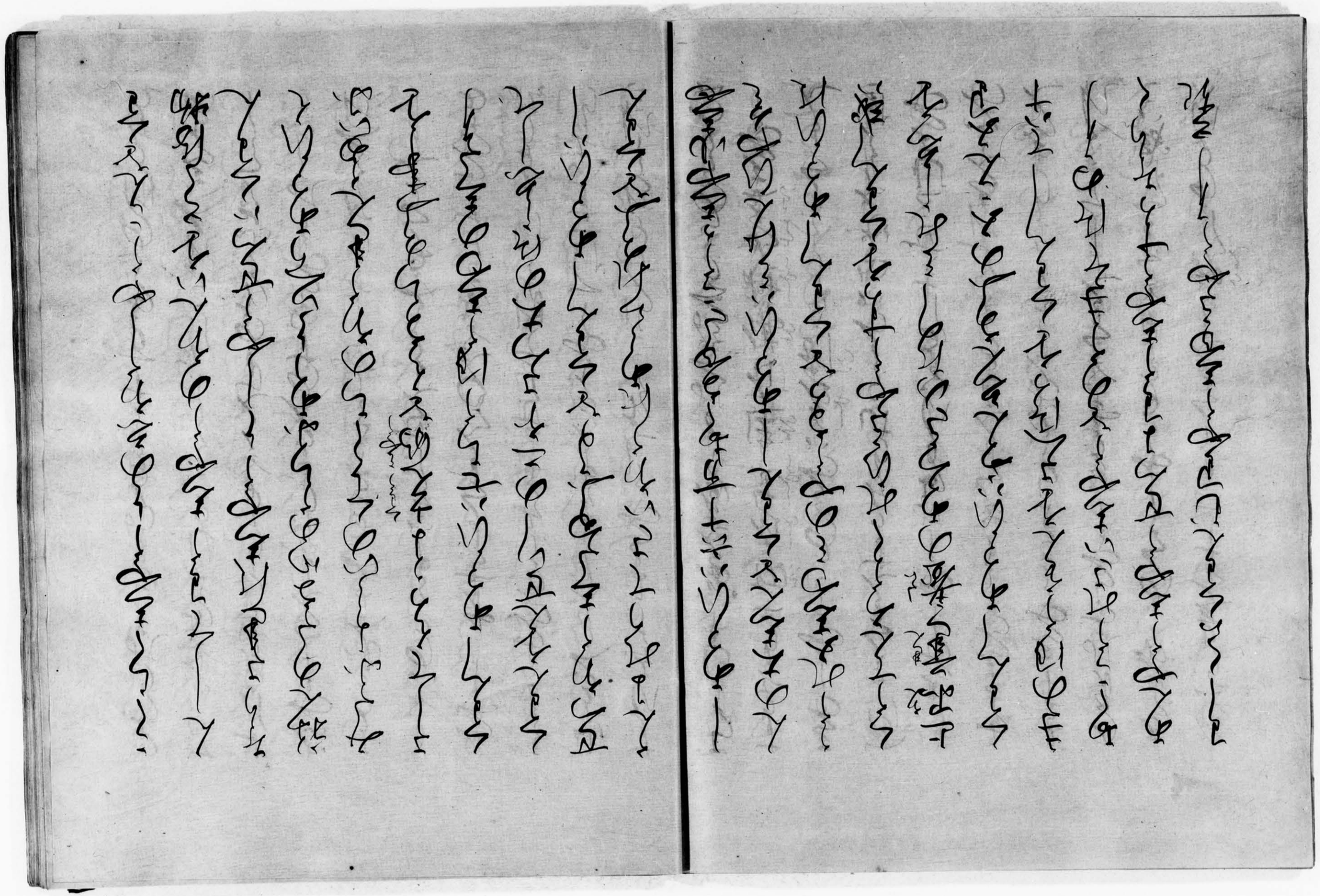
けりなきてはれてるのさすらうにらいも
まく今やすまさいねよそりめとこふほ
くをあちやけゝ事をきとしめてはおなさ
あるいをりくるれつさきしんをとくまの
しにすしゆくりえしやうのやまやう
くのとしこまやうのさく思ひやりな
文しまこれかけのはなくのこえしき
あら事ハ心をすくして人にあしせまあへし
心ならてとりてくさゝみやうくるゝこそ
ハ心をワしてみつゝく人これおもをするなハゐるよ





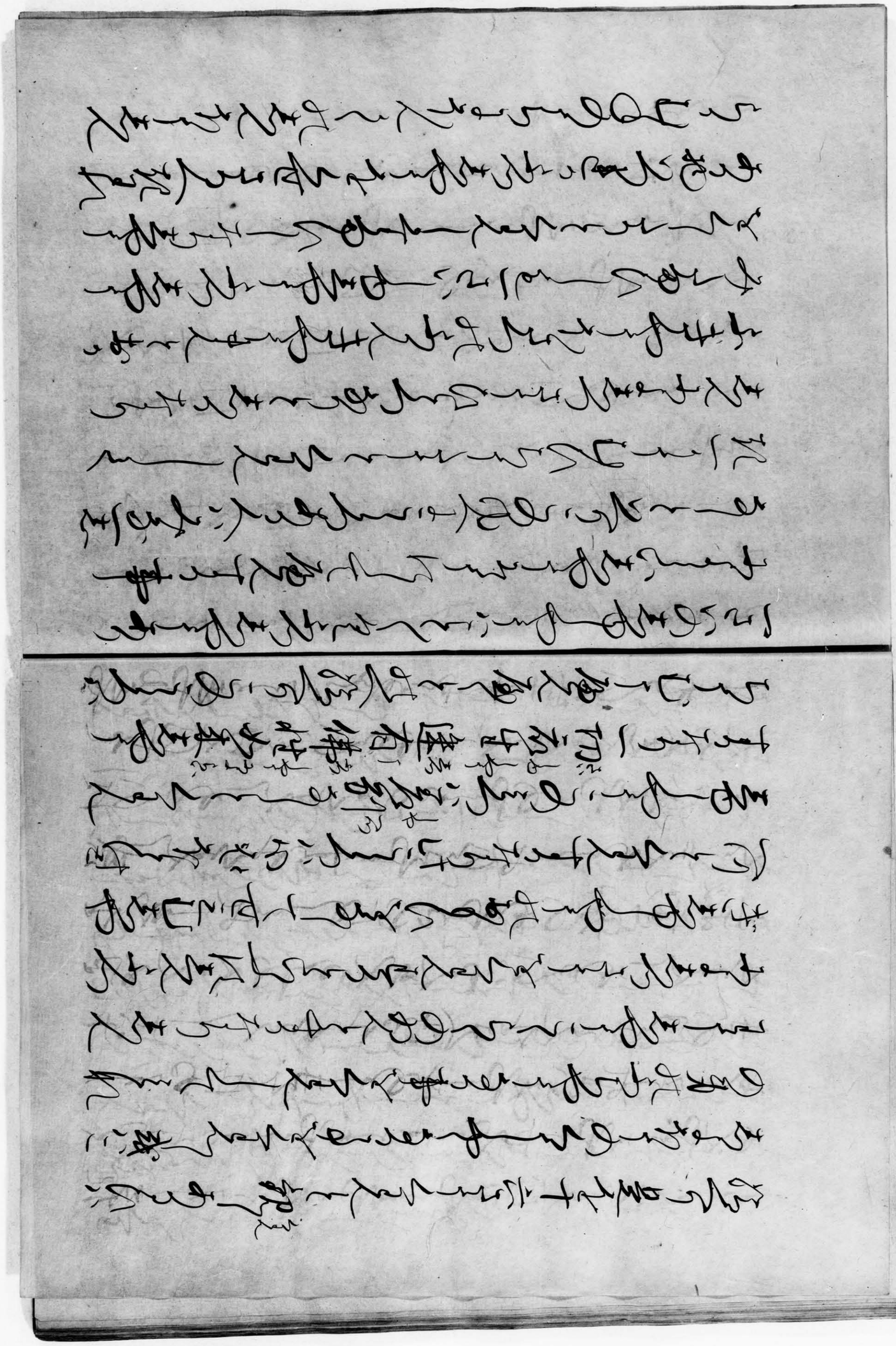
ようすちくにてあれこそかうみすけとあれ
日月はいころさいはえよしひてむくと
くさし世にてあしくぬ花やうゆりくら
さもえへさいはえひくしむらにしてあり
らもかうむかへはすこしのせんこえを
をあさみすもえはにうそうかまろすまをと
見ひきてそけしきもをあけて
いさくいろつよめ人よされ花にそう仏
よせしそてまつんこころさしまつ志きよ
ようへうすむすしくふさうちきつくるむ

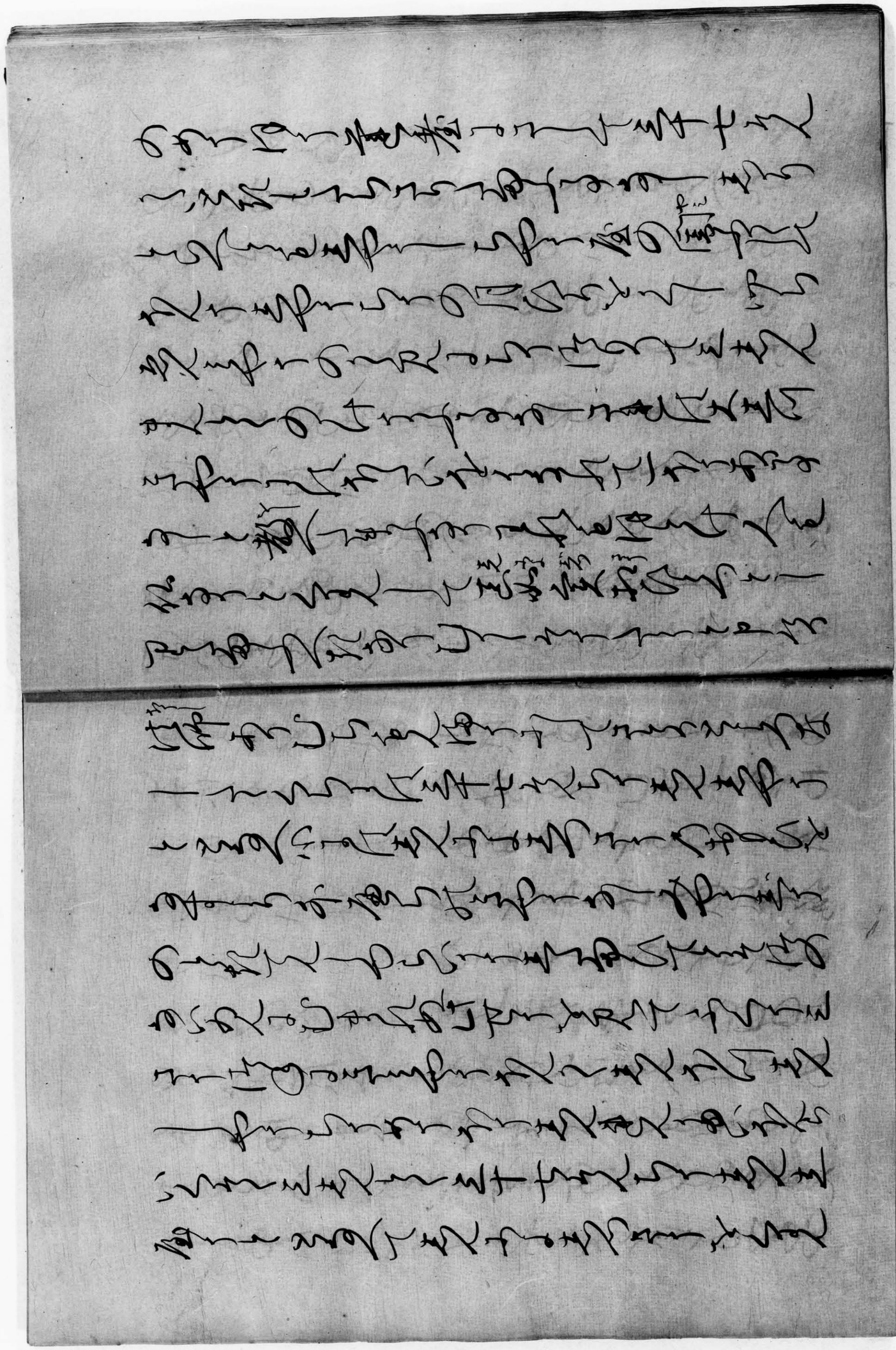
すひそうよくやらしれことはんるたれいそ
ふら人つすしそやらふをてけーすいそり
しをふるをうとよせてほとけまする
みや御七よくまんるのんをあそしてふるあ
さといのうちやそーせんとくみなくゑえり
ようか此人よみあそくさせしなりたとえは
志やらくえよなりうろ人のすいちやうれちらは
うちまうかうるとえうるおかふかくし
てんかをあきしもかこしかこ花人志るゑ
いかりぬちらよわかう十万億の国なる



こくらくしやうとのゑにかしやうしゆしんをきゝ
んしてはしやうのけんいをこしゆ物
ありさまはしやうしやうせうにくはん
ねんのうまれのちらふすうらそうあうへて
みさふよしいのくてらのおうきえあふふ
さしてくらはま光明をてらしまふすほとを
くはんあうひは七ちうはうしゆのちてう
くはんをとせうしの二千さう大のほとゑして
せうおうしするをくはんしあうひし
えんまゑりてさいおうにあうらはれをてをくはん

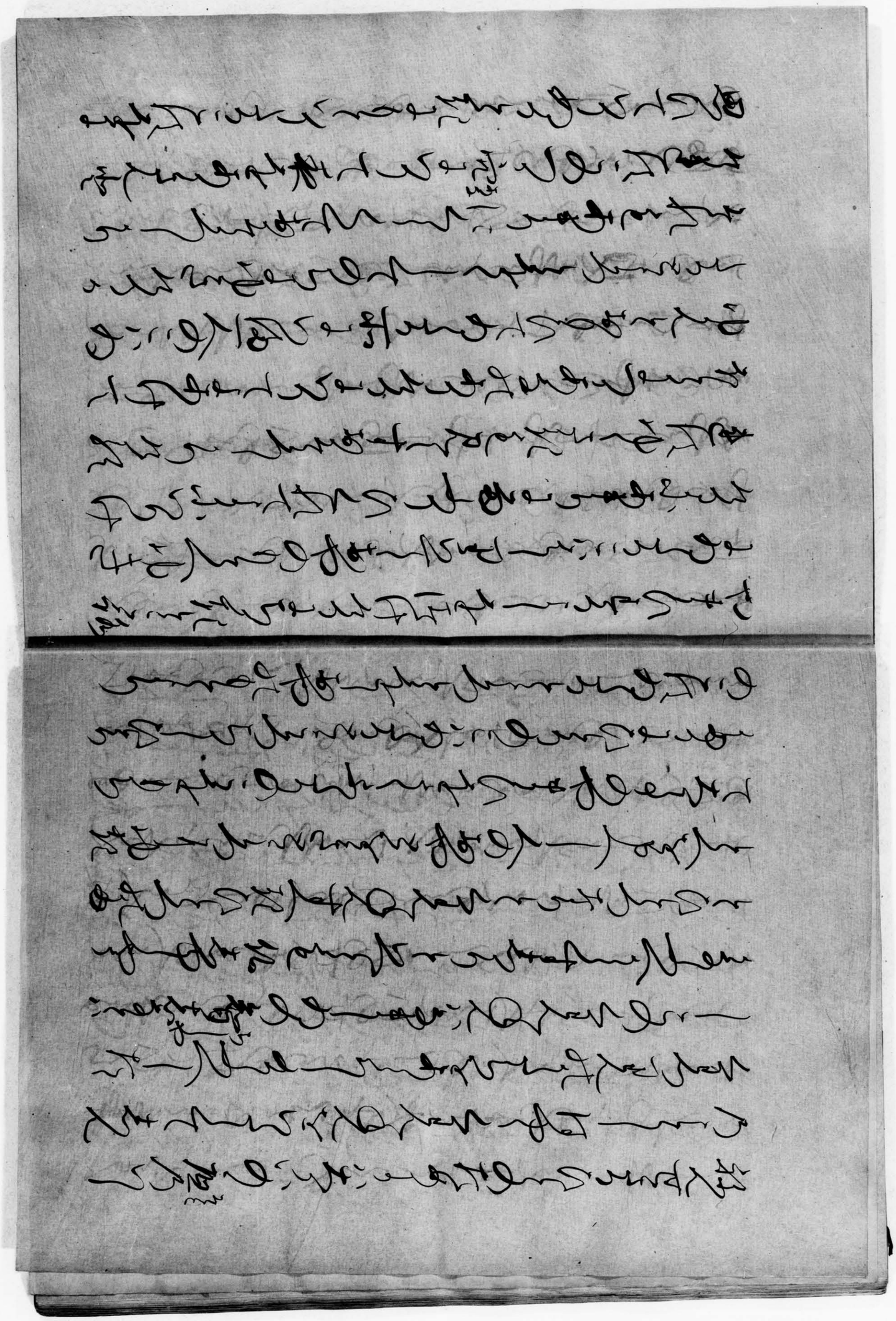
しあうひは六十万おくさいうきしやうしやう
んのたゆうをくはんしあうひはけんはやを
きうれ文しやうのやうをくはんしあうひは
くはてんろうくれはこやうするをくはん或
上品上生のあうさいはしふれしゑを
くはんしあうひは六万しんちうのさんまん
きのほうさんをさんはうをくはんして八十
おくこうのさいしやうのつみをはぬる
あんやうしやうせうよりしやうするおらく
まいりくはんしむりやうしやうしやう記





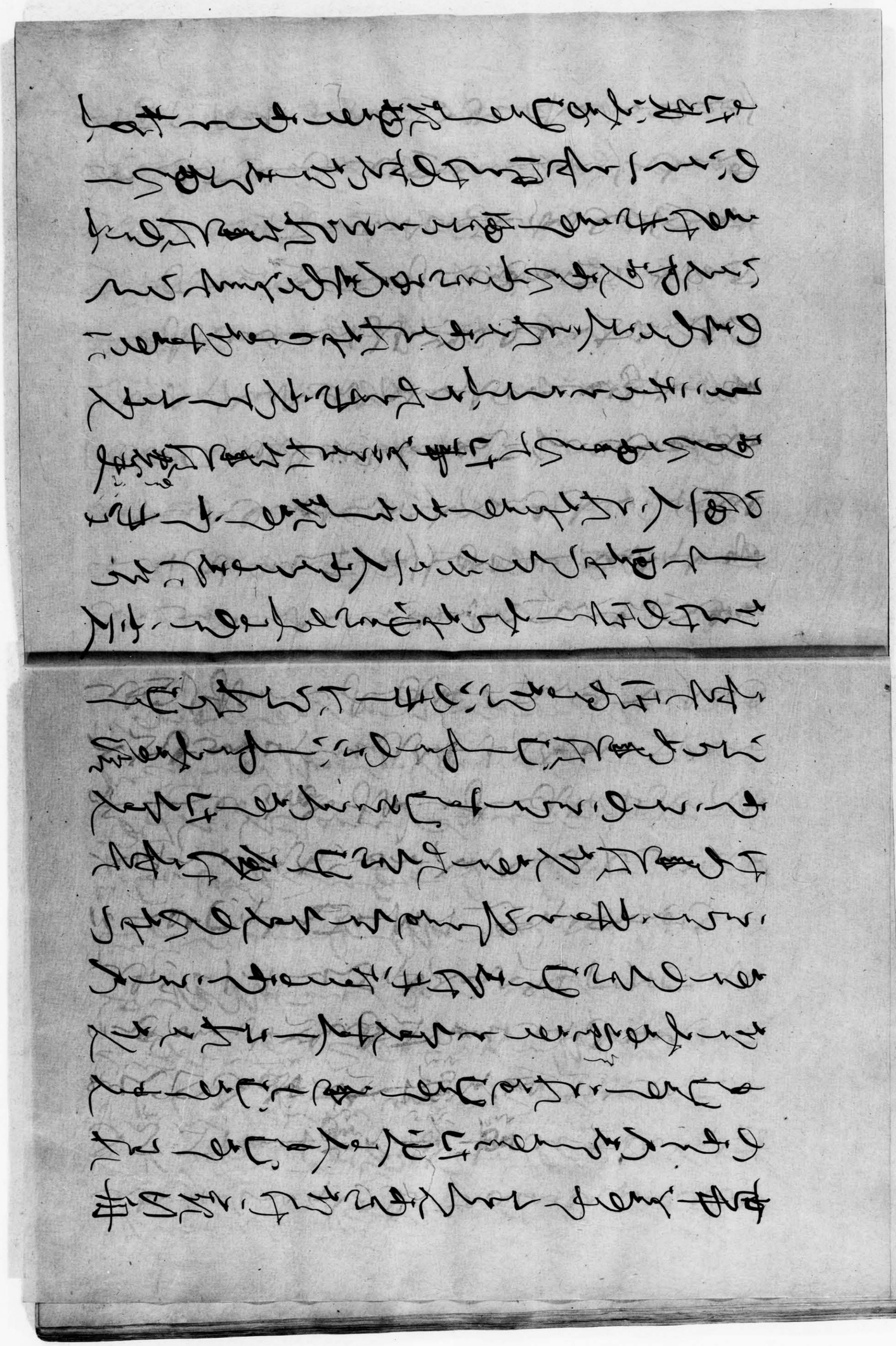
し事はなをとてしあやしとてたゞりの宮やう
うちならのさらつよ三千七百年めぐりあひぬる花ぞ
事はよ御しまつらんしてさきらしけまと申せ
いひけまし三さうれとけの御まへ入給てこの
くまんの花をうつし事にうれ三千七百年に此
あはさよあらしされて十なうにひらきそむ
ち事ひおてしこれをみてうるひぬる御
をひらくしすいきのなみさをまうし出
本にいそろ花さきて秋るのさしすふ本と申
申て見え申さは中にはうつるまし出た

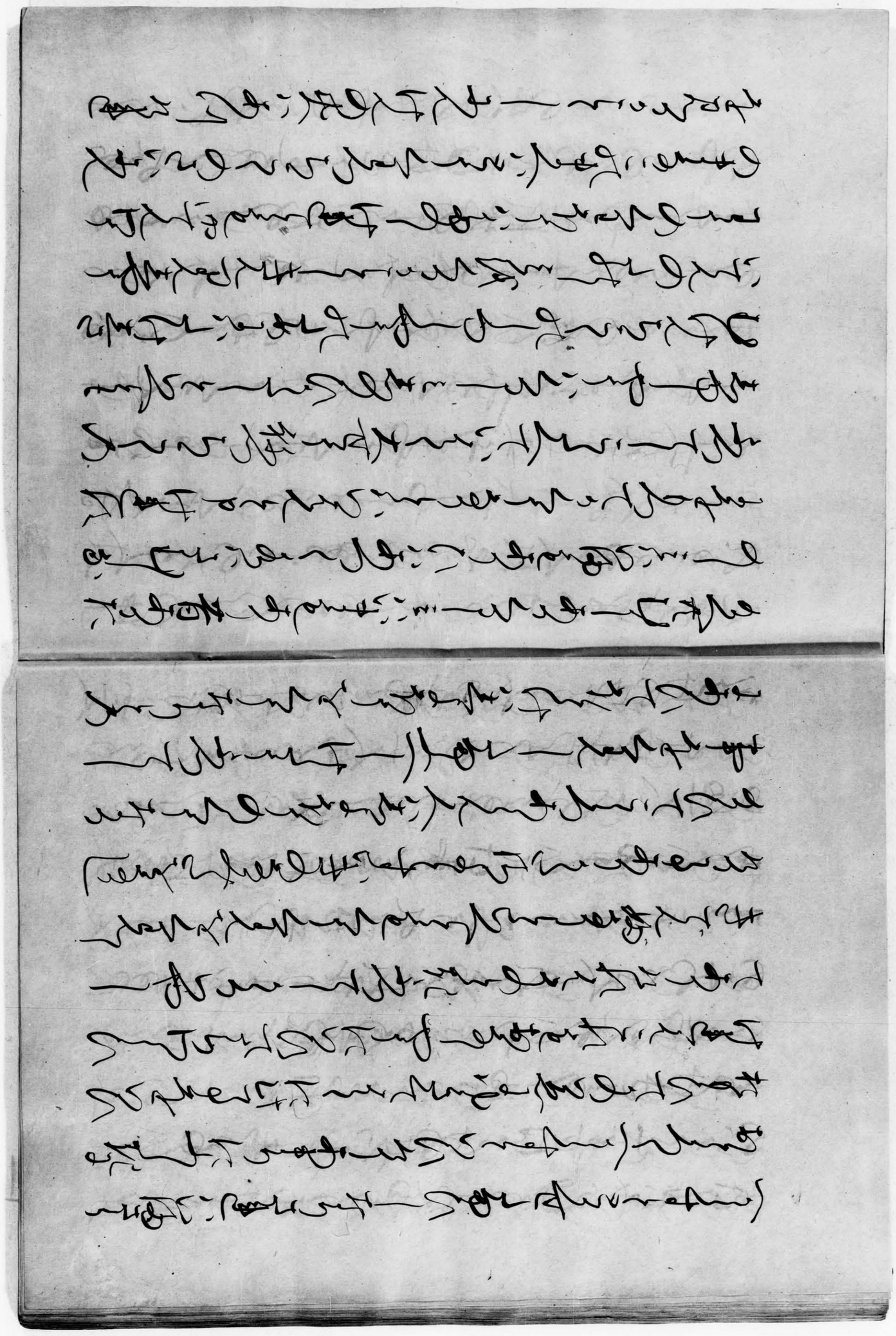
ことなりしまりとらへてまことえいてうめまいらせ
花されこのこむすふ人のこれらと見えまいらせ
妙法の蓮華をとりて三千七百年をちぎりし御事
三千すとりとらへてことしえなよしつきをむなん
すまし三千七百年あひぬれがうすうたる人に
大かのきにありしよのせのあつきらへと
むかしやうさいをえてもひのせいをあらはする
なしきれとと人なみつをさうあけてひらき
とらよ花をおつきて光をいさみすと云事
まし三千七百年まつしくわらし くもん

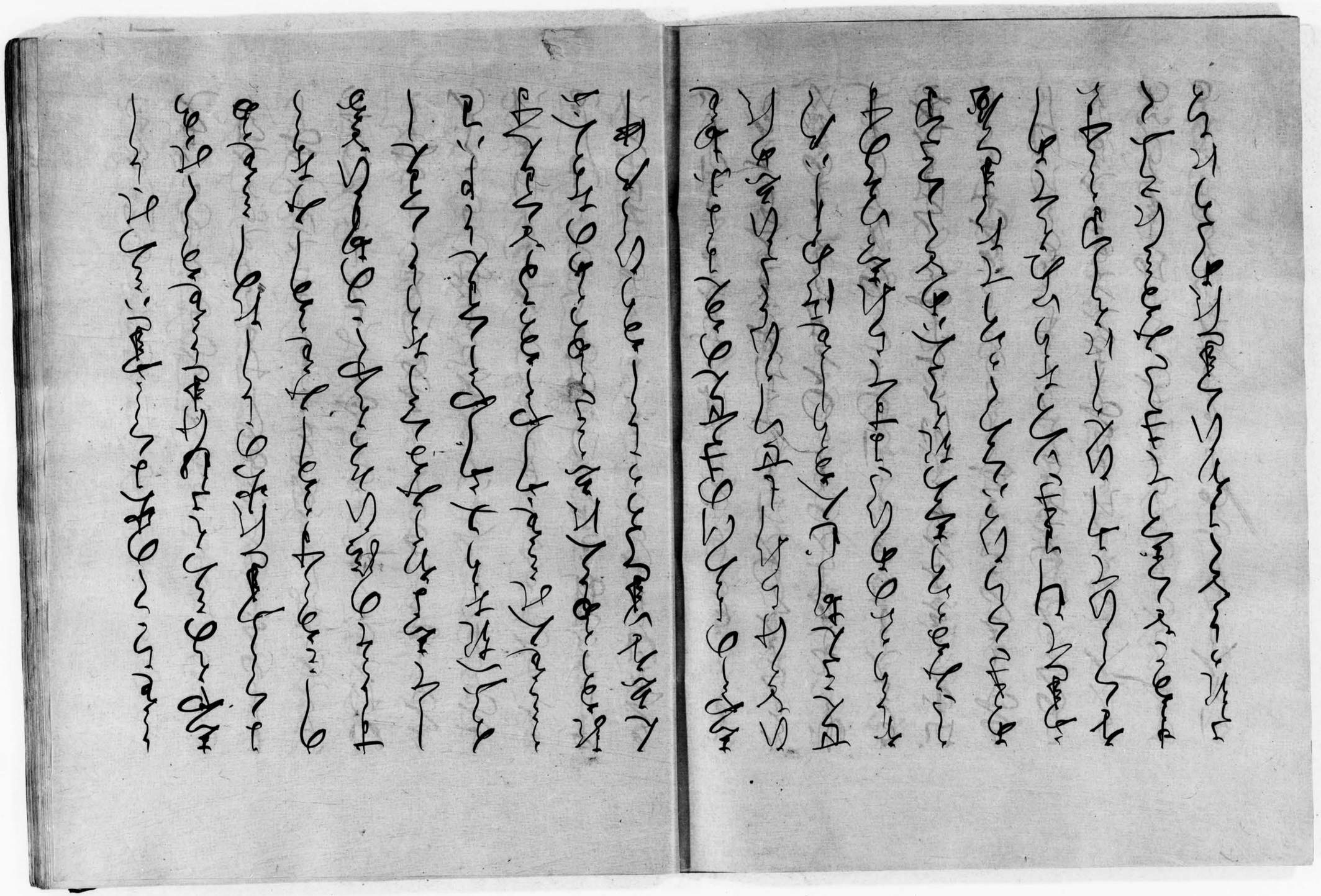


めくしひはここちとおもひてゆきまくほし
いはゐのこゑあるれちらは鬼ありて我をく
らんとすとおもひてことをはしおもて見さ
あのこほのしやうをしるいてのちかくに
やうくはあけてこころをとりしやあて見
まふさやうにいふりしやうをとられと
しやうしちやうやうはゆらひめまいらせ
やうのやふありとありけることをせんこんあへ
ほとさまなりめまてしんすはしつきぬひとつ
たちとしつるりあくこりえんするあのかまるのこ

のまへはたてけとしやうとしやへいあり
とみんれとをしんすはしつさうとこるあれん
しんたぎさしやうやうしやらんすしは
しなり文くくえんとやいしれとせく
うのありいをれてしはゆるをむすしこ
しうむ大むいれくまんをいてしてさいあり
とおもとゐなたうさまちのまをおもこ
そはくうなれ身を観すれて峯のひかる
根をそふれさる草命を論すまてはれ
鳥ゆよはるろさる舟こみふをとてまみあり

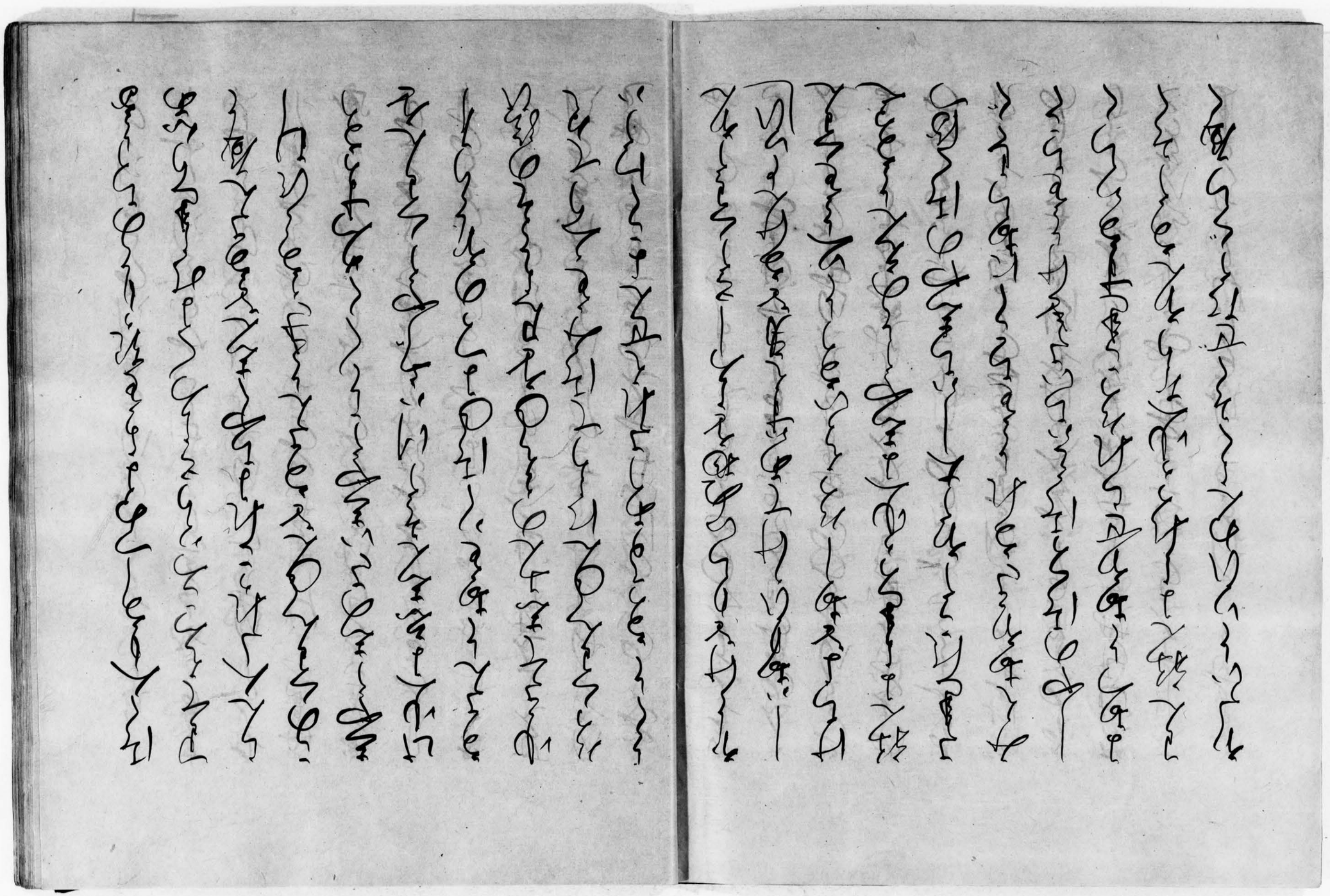






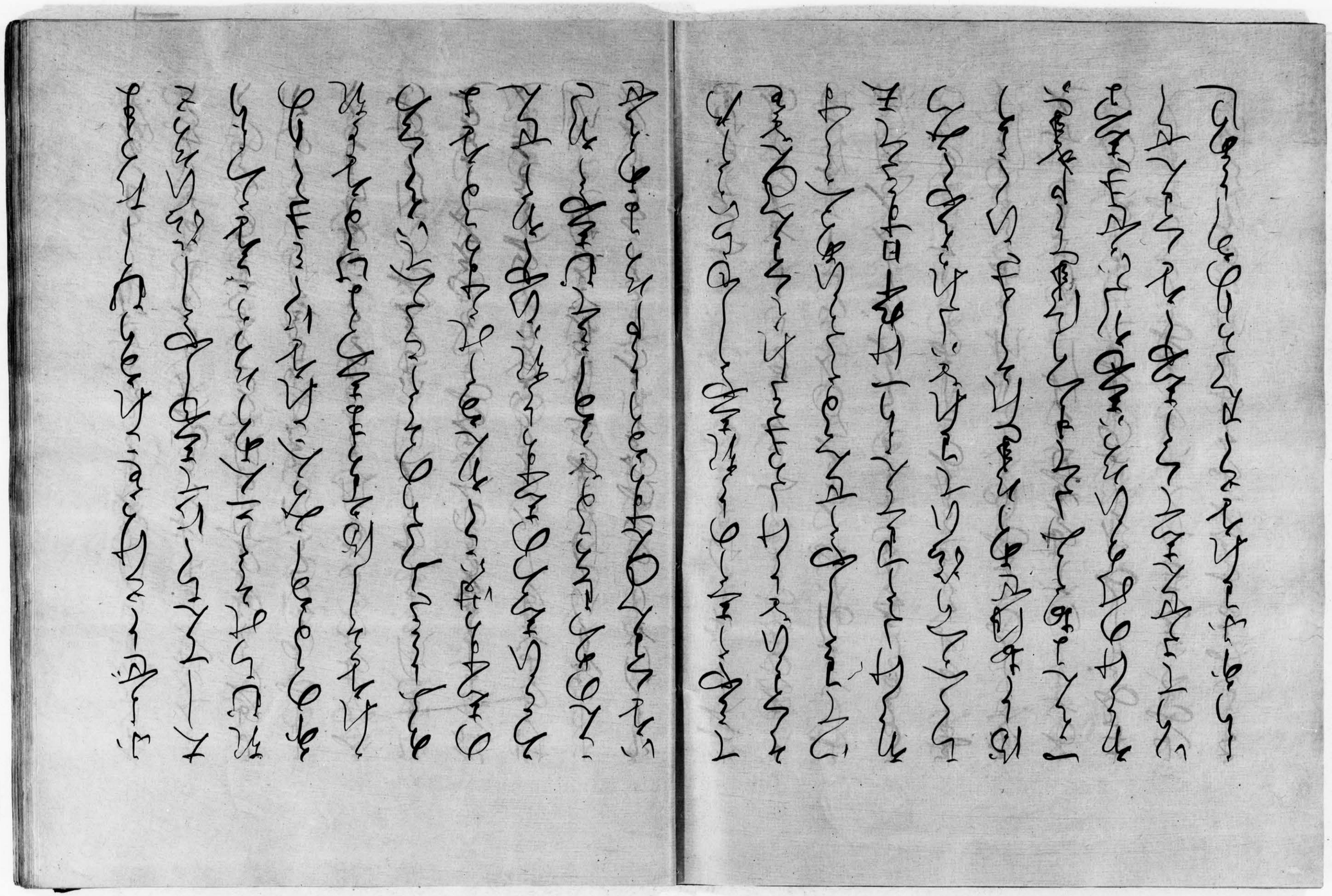
ととらへの出よく〳〵まいらせられてし
志やうのつくえにけまいらせとて候
よく〳〵御らんじ候て出のしるしなくとも候
のしるし千すゝしみもなしみなうし
すゝその給ひそくへ千へこのおもひまゐ
しそて志よろしみ〳〵なりとくるへし
るふへ被なり文ふやうくるしとも八て
ことも人れこそふやうあうるとくるへ千
あすゝあもへれ忍ふもあもの千うへふ
人忍をいまてろうとしまりいつの申

志やうのまうけのきせんのえまよふおもと
ひとはらそれしもせうひとこひ忍めれ
せんこんおしゝ人あらしと候あるハの
なりふのあひこまずてられ志うそのす
ことみなうり志ろ被とこ人ハおとくくま
あさくらひハくろくうりてたまへ
ふまてしまきひうなりハあそてあ
をくしひてよひえうにとよき千す
ますこをくもりてききみるにそよく
されからとくすりひくまいらせあうらにてう



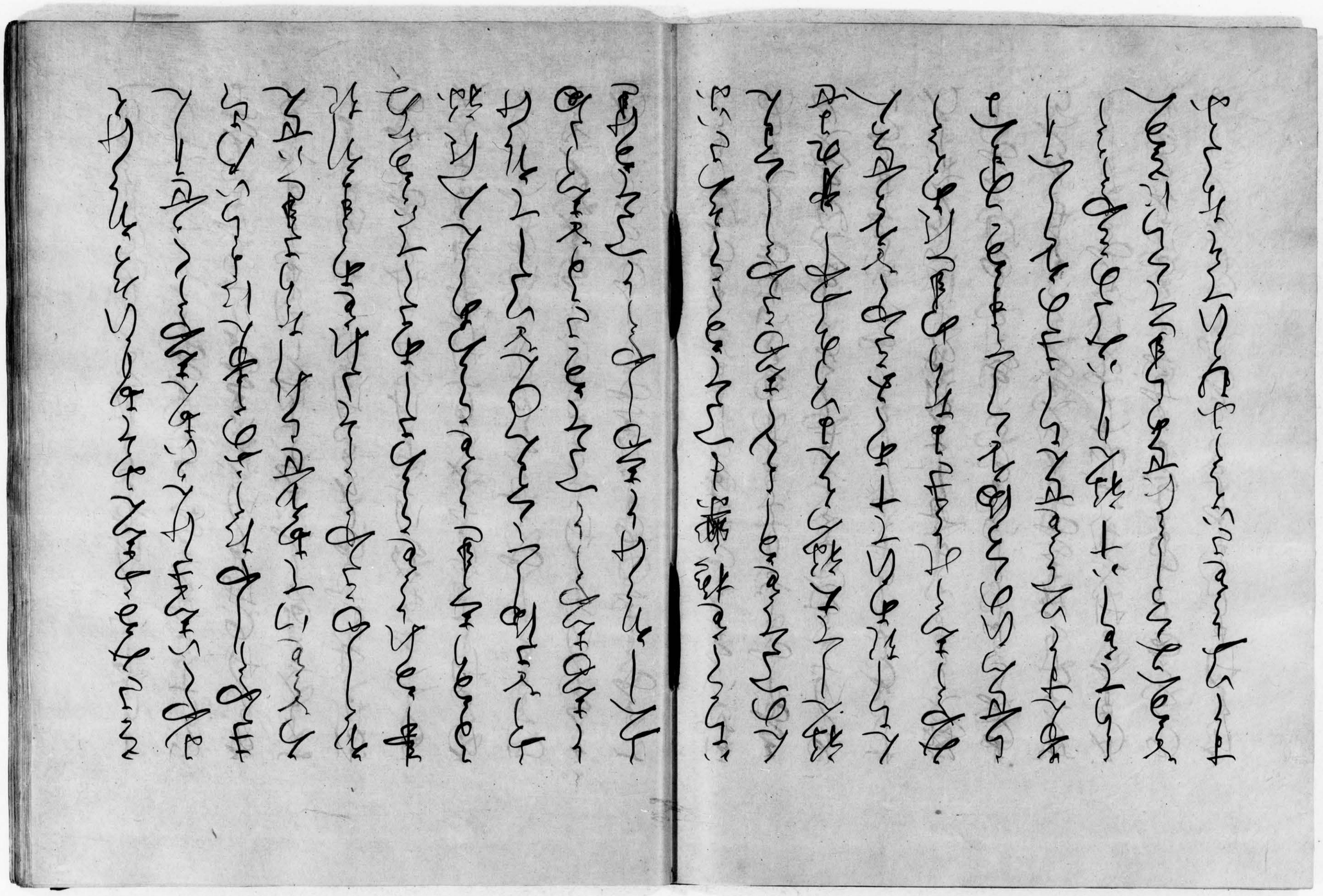
ほく人まいつてあまよみをとかりしのちりまゐ
ひまてたろこうかりそらくよみまとりいあ
らん人これかこれよちやくしんとあさん座と
このうらんてゐんとうさんときさらこれしし
しやうしのさいしやうらくくめすまう
はけん人よ念しんさけいふすやくとんを
あさんとあをいほゐようのかたとりけ
ゆさうて志みえのまゐをみしとその経
なくさんてゐえにようてほみをとりて見
らくとうてうあつされてせんようとうりふ

かくけをりらいあ御そしろしころうなん
しいありいけてあかすく男をあけんと
けちよとあしろくいありし又とそくうん
経よよまう仏よしやうしのえんとまうた
こまれこうおう太しいちきやのほとけ
みくあわさうれしをちてにあちしく
しやのほとけたいさをけとをちこく
よあつとあらせられうこまするらく
うん経よしれうさ仏なりあんなうそく
かくいとひいかんしくそせたくぐら座く



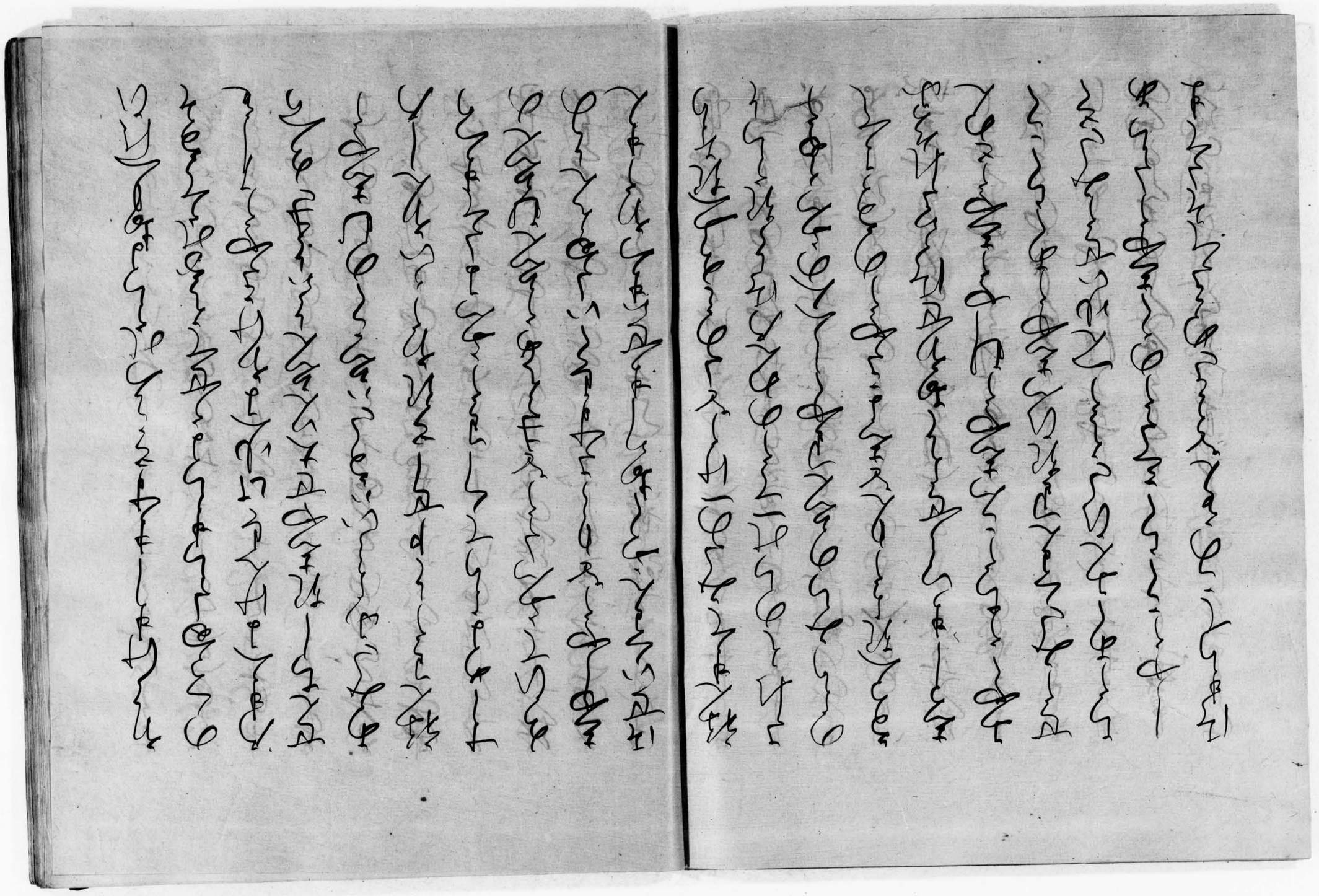
かよせとこけるをこれなりむしたるま
太してんちくにて高やしなひたるこ
れむちれそ二人ありたるござとらり
みのるましみる人これをはくときりみ
これそしはそうまによりよするそとれ
のふところのそにこ入ていくとよろ
のこすけたてありしぬきするをよ
うとひよろのこすりと見はむやかしせん
こんのあこしろをするしそてむかしかき
いまくさんの入するりとはよはあるせ

てとやうよりのと見高やしもらひてか
そらいとしけるきされとくまん入をを
はてましやもせんるさらひあるへうす
われけるあてんも一け丸千日すとそ天
ちくへりなひてこれをかくれてやみ
はとおほせありしまかへそしきひくう
一てんよおまみ入てまつりほうてとかまへ
わるけのみのひさいかまいせきこよ
いりてさせん志てくしやをくまんせし
しりかふされませ見てくりのあしとあき



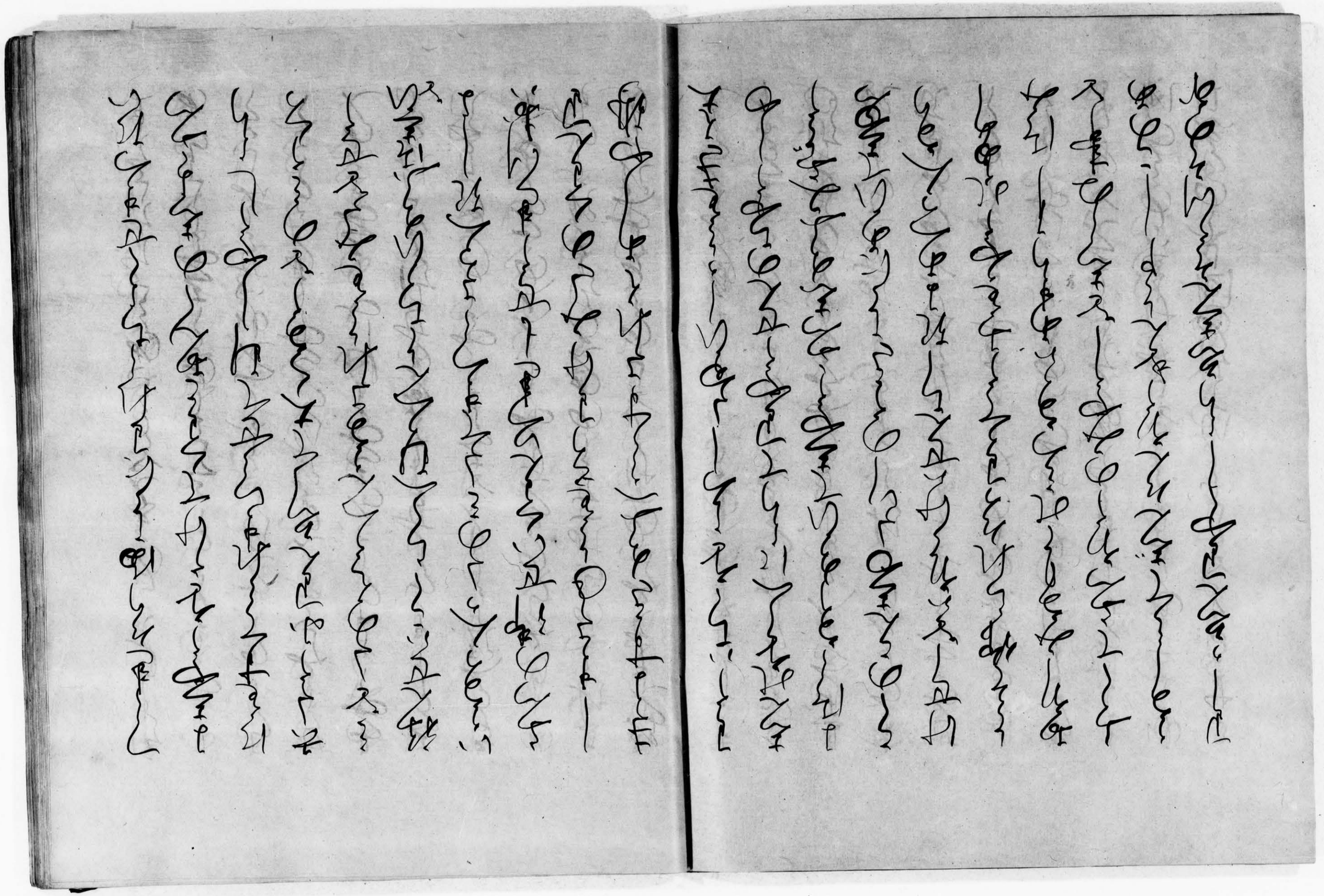
こゝみるにしんみてありしいたつらにけれ
みやうしやうけんらいあんしやうくせりん
きやうしやたいふのちやうにはらいわら
ろとゑけてあみたをせられしなりさまにはせん
ねんしゆつやしてこれをあはれまれけれ
まうされしもころさしあさくてはなに
るよりしまとしもころあしん人は経
けうとさゆしてくわんのんをたのみてまけ
ともせしやうしてまうさうすをしう申
たえしかりけともしやうとしてうしま

いちくを極楽にまいらすへきこつさいふ
人のうへをあはれむとしやうしやうしめん
経よして大経つくるほうのそのせ于弟九はせ
んちしをおいて十あくのこやうそそせう人
みやうしやうれときよたりあまにはあく
らせうひのくちをくしてまうさうのまうは
あんすいたてともせんらくきのちとしく
りてをし八十経えりしみたのこやう
とるえみつししにせあらまてくちにたえ
すいうちをさいそくふむひてそなへふ



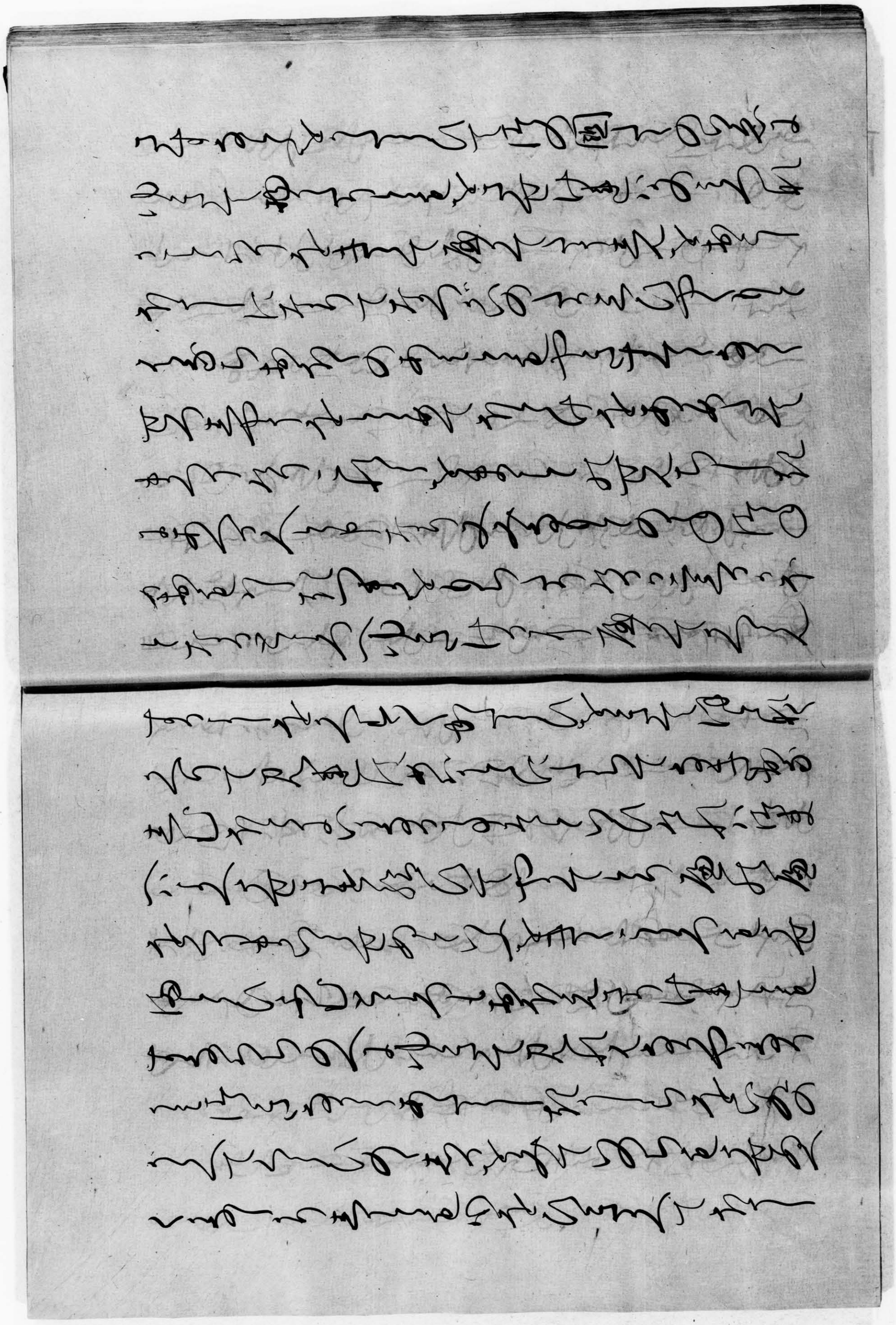
わかけましますところにはからはおほしめし候は
のくるまにめさせられはやせてたまはれさふらふそ
ゆきのはけんしけ候へはおほけなきやうにしも
せんちしれきやせ大かたのさんとそきもの名
あみたかほとけいはさいたゐへのむしきやう
給へことしよせしされはいたまへしの
すめはらてくしいふはまいらすまいらす
めいてふかきしきしめしらむしらめ
志やうとりしてまいらせ候いふとへのみ
はせいくらんつしおほしまいらせまいらせ給へ

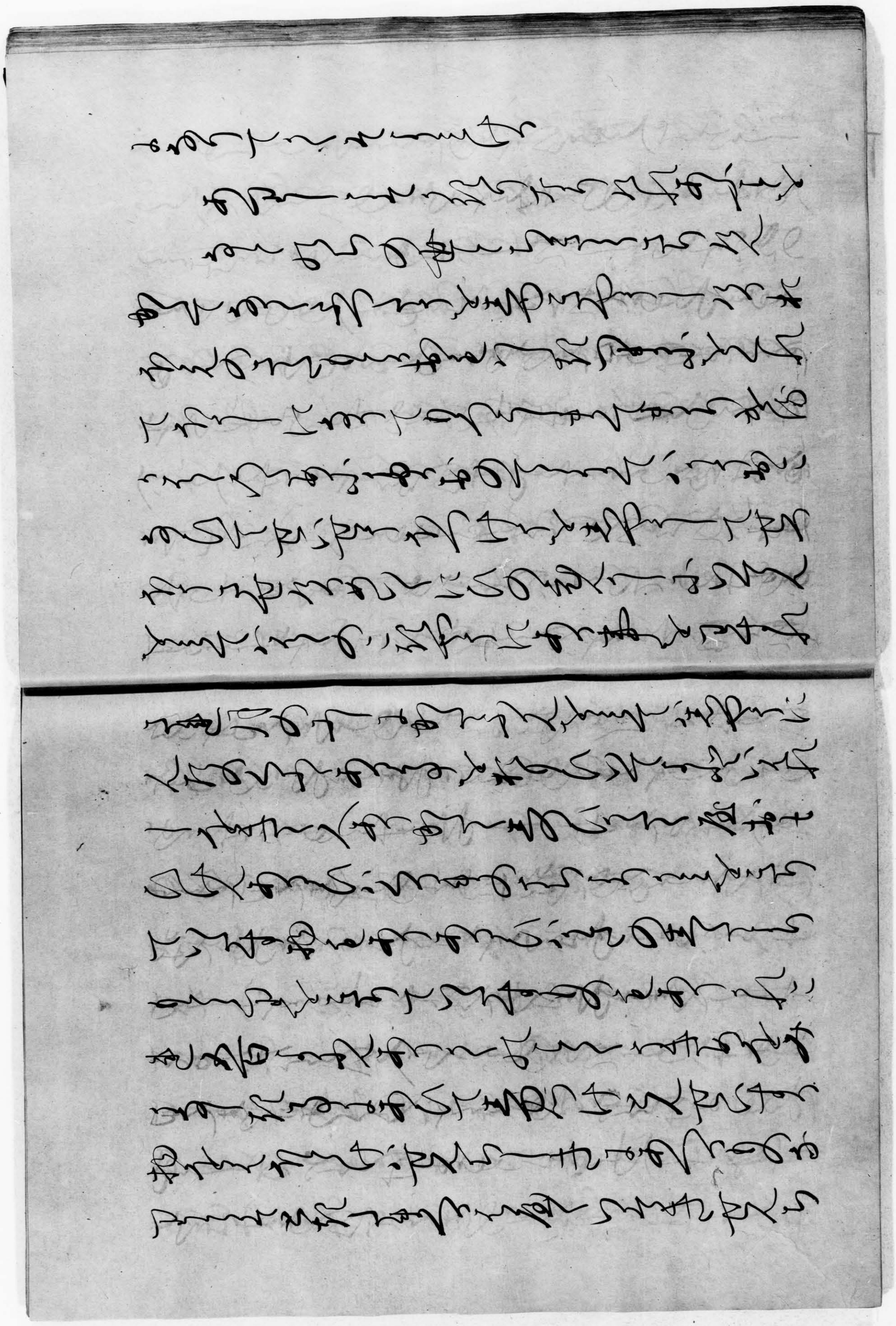
給へまてみたの一けしとこのとこの一かれなり
これしのられ一つのかへ乃はこれらて
のちみちのさんつやしへ人のふうめす
まいりかたりしりんと志やうこやそのこつて
志つしまいらせてあちせはこれあふ
みやうちところ志やうしやうやうさの人
せうみきへのかれのつ志やうあくらこて
らしあみえひさしてかいせうみさそ
しやうらてさてこの志やうしらあ
はまらてこのさんをさめさせてまいらせ

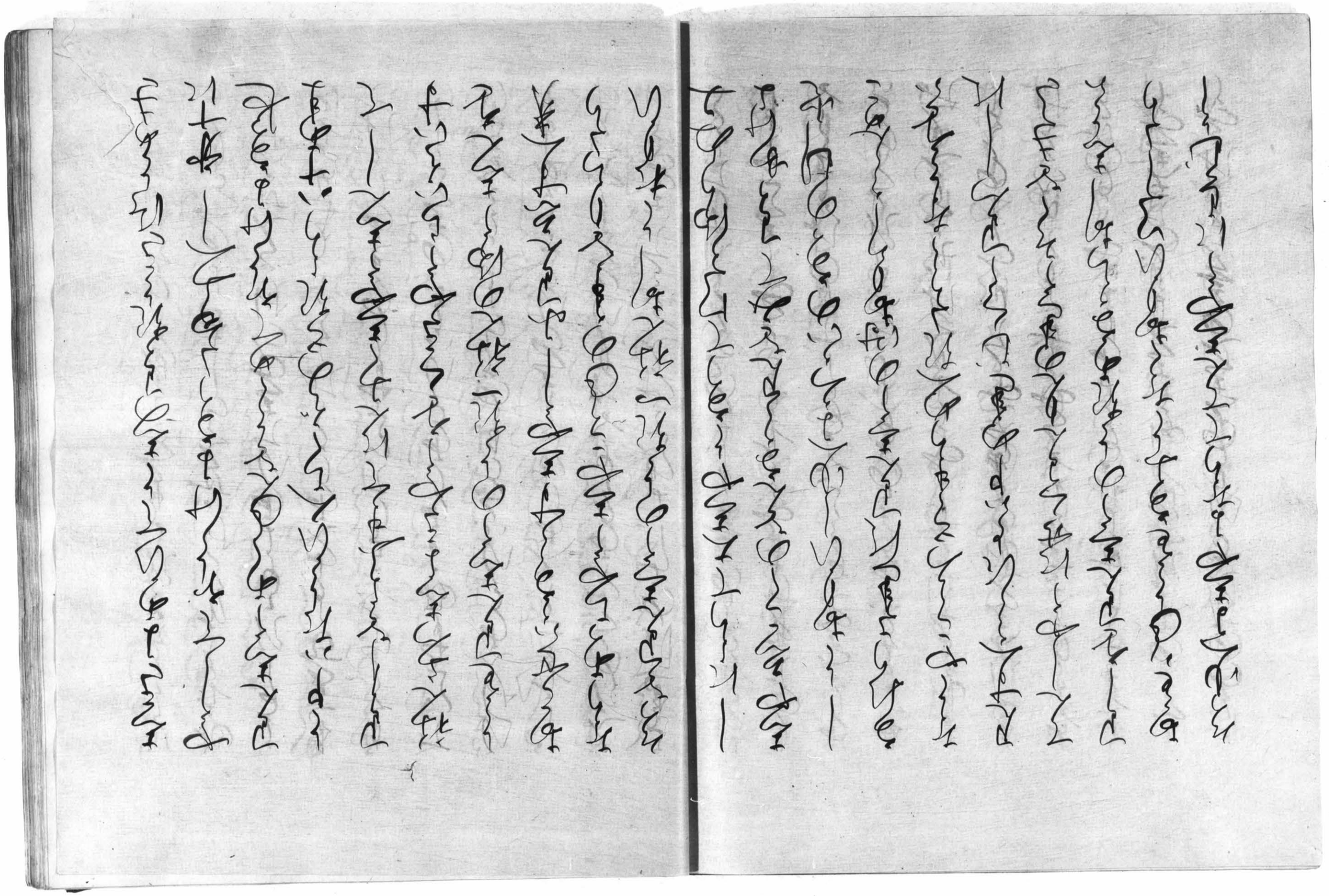


つまさりゆくにしたかひてせまつりたに
よきやうをさけてくるとあくのきよくる
にもすてられたるへきそかりしやうしかり
むさかのかんをしてたゝるいとのことく
ことよのゝくんまされともみさとせつ
稀人せいくらくへいくとちひのふ信心と
いろいろ人のこのとこそすつくさるゝ死しよ
ふんの御てさくえんるまとせすまてりおい
しすさ〇ことさへけみさのくさんりと
きよすさめ上へかしまされそおしや跡

まさいちゃをとそしまひしかのときさ大
志んれをもくへにかりてりやせんのちゃしも
よほしなりのひて志やしかたのよ文ふきり
ことのこん喜さしのことにおひて喜
けせりまゐれとけせんちしれはあつ人より
とそ作られたるつとてにつとをやはあし
あはれみあはれるるかあなけりにほみ
かくてかんのみやしとまつぬまと
るしそまんんなりまんとやしこみあ
かしの忍んかみしりさまんきいそのお





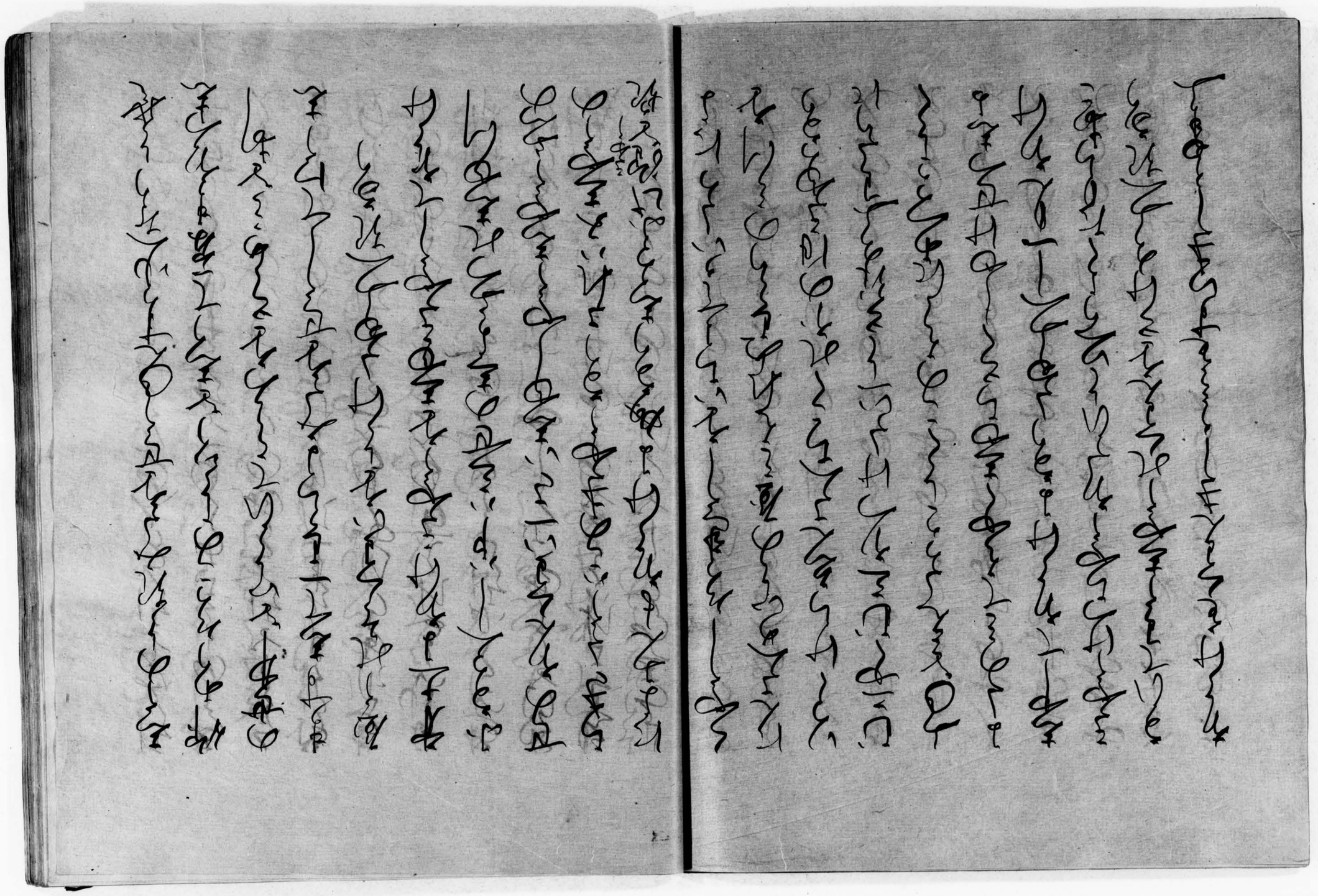


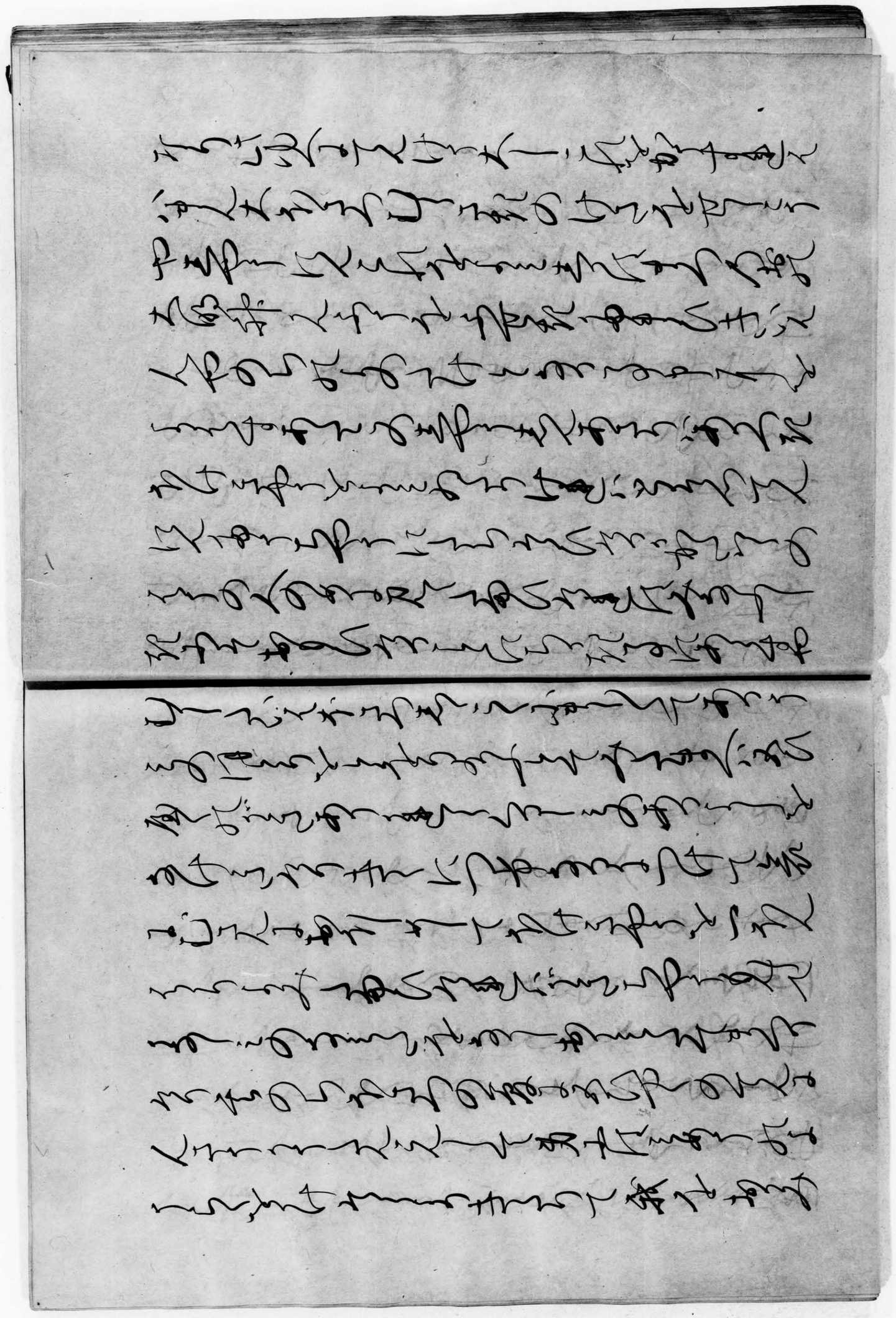
しさよあひてしものうれしさはとあき
やしてたのしけなりし事なへし年十に
なんしやうあきをとめてたのしけなるを
とかいなしい人ちくさみのそれより八十あまり
なりしとさふまてけんみくしやうしやうしして
祝とうしやうしやうをくさやうらいけす
しとなんしやうのこれ祝のゆうしやうを
おとせいるのはすしやうしふなんしやうすえ
なりあつらやしやうこのまとりらさり
なかとなんしやうのこれ祝のおしとなりは

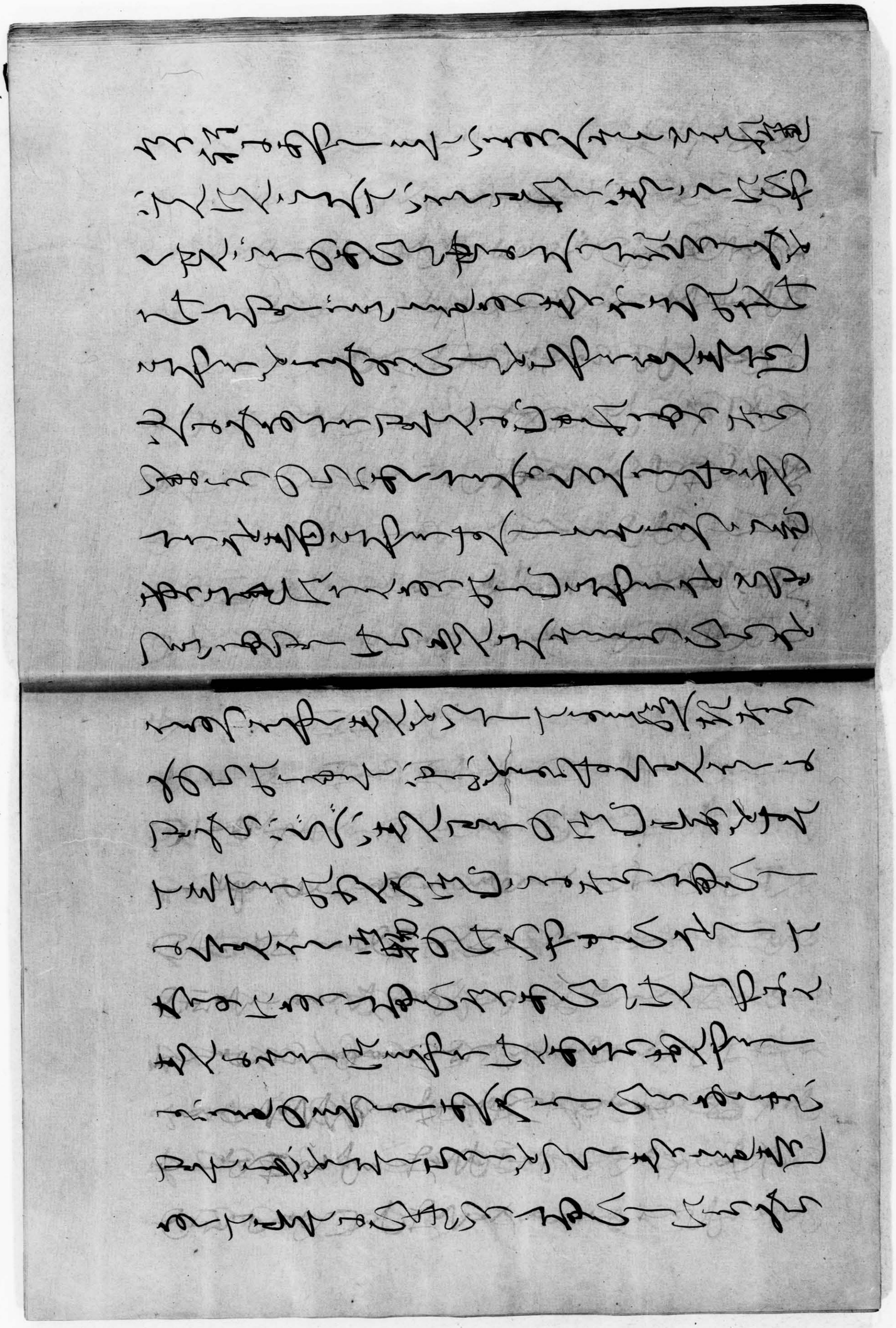
しにらりて大しやうとなりてゆうのみ
しやうとうのさんなるなんをみてなまは
しとおもひしゆへよるいのあうの山也
ゆるりさま文なんしやうの時おもうしやうめとに
みとやうろうまめへれうみとまう
なんすへしれとかいめまひくうなんもしれ
てんしやうにちくまりんのきうをとききう
なしきなんしやうのこれあまうらおしゆとに
あとひとこともうふてなかおもひいうこすり
ひのゆへなしやよなりでてんしやうにはしとし

こゝのたんなひとの太子の宝はまれさや
ましのとも一紙之ゆゝしきよろて天下や
よそをさるせまれなるよありそ年くらのせな
をとりて三たりとくやうせてもかんえけ
まれ大王之ゆあさあてやうて日ろしのへり
よゆきててんしやうと見れハ北くらえ見丸
ましそくありこのなりふちいされくらゑ
ありたる王さなりことなりてのれそりを
りつてあけきやをさくやうまそてま
はりくらよの宝川このくてにゝてとく

こゝろありしといひてそのゝちふくらうさ
えしてされハたるそのとあひすゝ花ハこてふの歳
とりそへ花ハちくしやうふむまうくあけゝ
あひてかほとらふ人のまたりかたしけにゆ
さいなれハ百のよ人くてと法くはなのち
こゝにありしは申ゆへつゝと法くる花かたは
なりとやれまいれりけつきてのくゆハ百年
くてゝと法くる花のちこゝにあつるさハ人
まつのときあくるよ人をわかゝ千ゆへなり百年
はみなとはくる人のわかけるなるハみやり

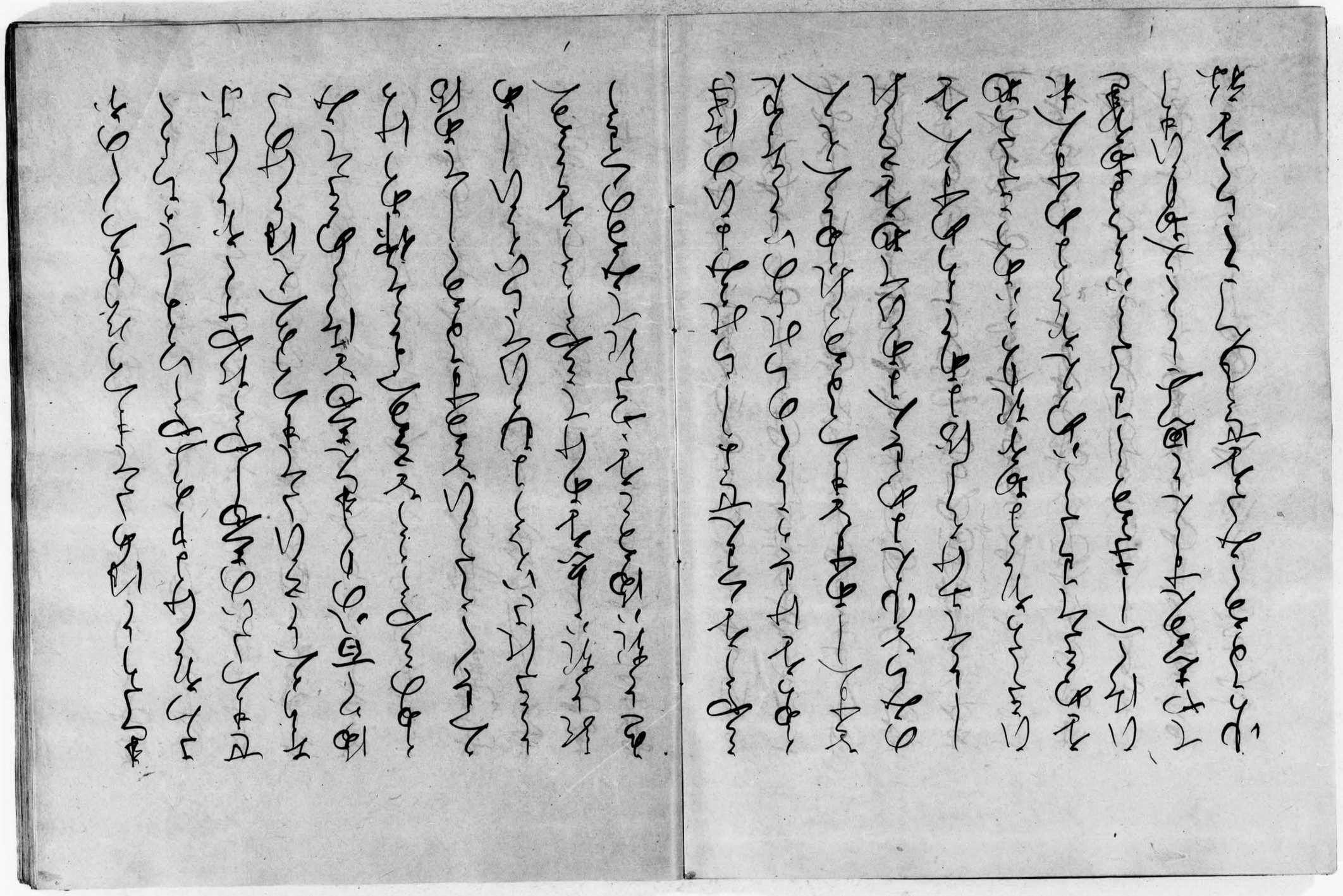






のほらくおしけれはくるへくおもちまうさる
しおけさせやまれおはしやうれんとみまいらせ
たりつるに人のみなおいてあらよゐをあ
てらるさふらはんそれにてさをみられりて
のはちかくにくいちのおほせのあはれなるかなま
ひてこれにこそいたはしくさふらへはおほせ
しまうしつれにありてのちに
しすあそをかきてたらうもとさるせんとあり
かさらめしけまてれそのすけそてまうしさ
ありてことはけとやうよきさふらひてまうして

このひとひたちにてそのうちありさまひろさても
ともにみまんことろへはしくるまとまつりくる
せそはしとをかせまひるけまつるほあん
あひのみちはみちりとやうとかたきさ
ゆけまてをこれ程よあさうちすありし
めしうつとはなみさよしとひはなひて
あらしかきやうくいとあまりつるそて車
みさすけのせまそとりせまひかりら
みちのほやまひもうなしせなひてはきえ
しらあまりとかさるせまひそへうまりぬ

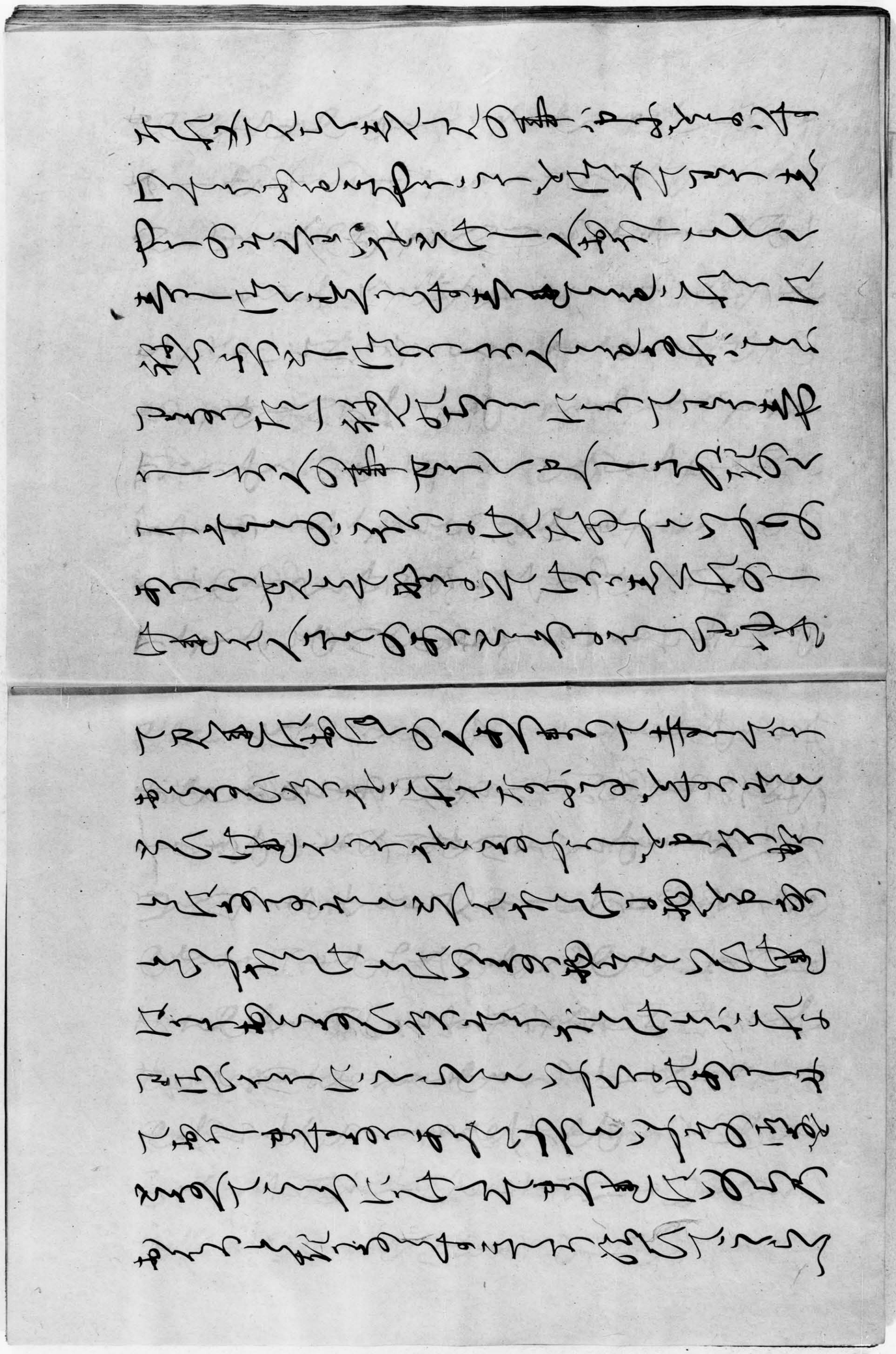


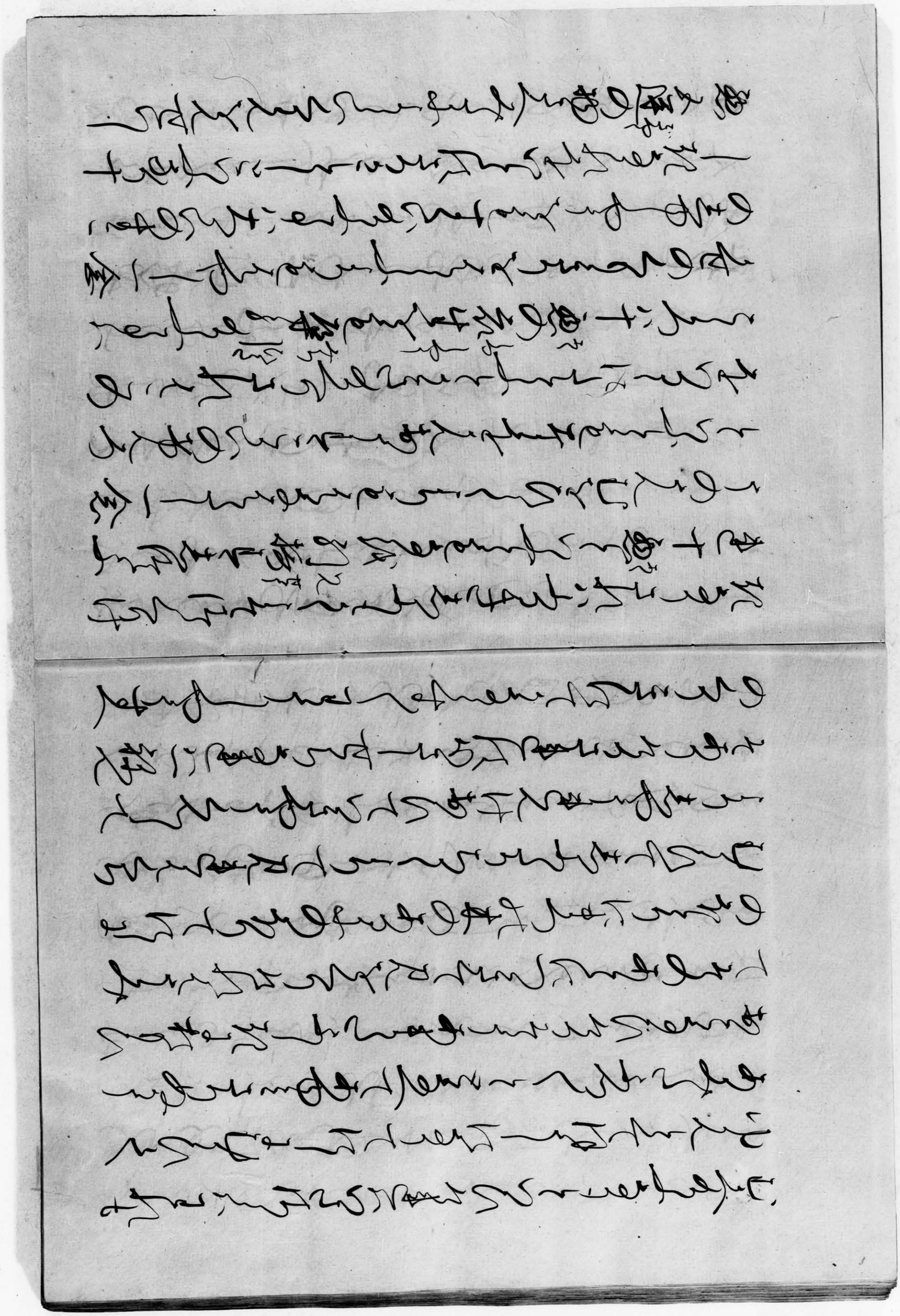
まつりとはあさてまつりかはりつゝくのか
さうなくけふやのやうにてちらく
せまつさいの事しやうなやすくたゝけふ
たり人としてひとてまつるへくはとけのさ
ゆゑ百八のりきん事をはしめさせてみ
ものゝやうなるをとなへまして作ありける
くしくさいひとなすなりしてある
ときはさいくくよむいてらいとひしあ
れとれいもをあけてものやうなるをとなへ
さとれいゆゑことをかされてみるのくまり

ものやうをとなへせよとしられみゝよひのはき
ゆゑをけしてかしこくのられよかいてこそ見
とすへしあすとまつるなれやとくへとも人
のみちをれんよめとも人よあひてれをとられ
しとてみけるはよあとてろめすへきを
ひとさうれてよおもれりつゝあつこゝろ也
をめとてよしいあれなるよあすへきれ
いはくへしきなりしこゝかうよおもふ達
てやまゝ人すへしと思ふへしく文ありいまし
ゆかるすまゝみなさせまする人てこらくを称

かくきたりたる人／＼ゆめのしるし人々に見え
あやしの人よめしよせてかのくすりゆき
てしりへとまりてはつかはかりをもしくて
あやのやくゆりやとありけるくみすを
せめとらへしてこらへかへしやりしも
きこえし和尚のちやうふりてこらへを
給へしゆかいはれよみまうらかすのす
けるてものからまうはいかりけり事
てたしまやせんてのはしやりし人なりす
とひそてまうりてかひきまいらせくとり

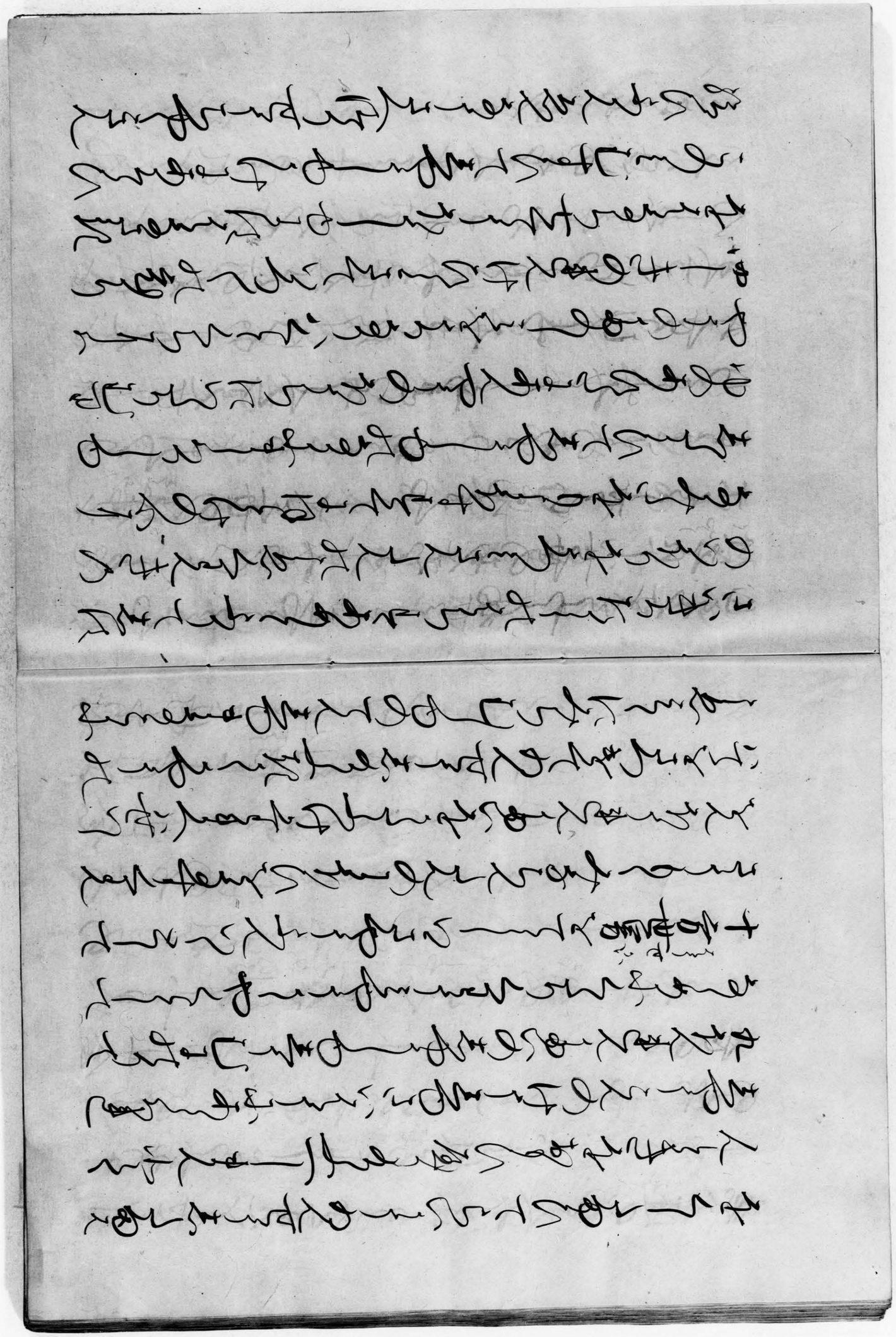
てうし／＼なかいはりきをこうらえさせうけりや
くわのそくる世にあしくてくわかいはまいを
まいらせよ本をとどうにおのをそくく
せいりやくこうる事うし心よくつよはつ
まいとおもひてみちよりやうしとのまとそく
くるなりされをとうる事あしみちをめ
くりてしくみなる給へてこらへを給へす
ひつよ人の哉をとひけまていそくいめ
太しあとこそかきうらへを給ふえ人ハ
めのひつるの庭をふとうあつまれり見る

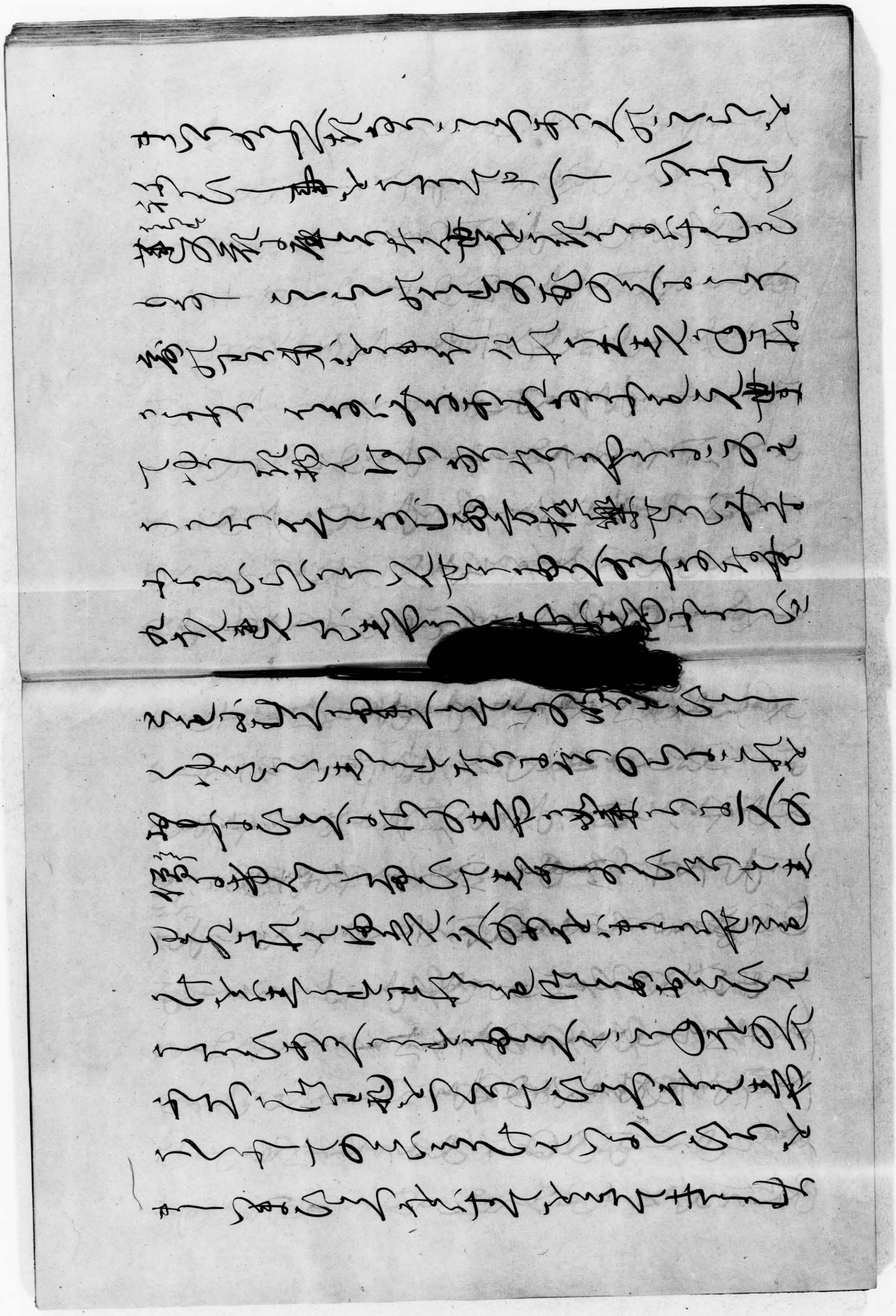


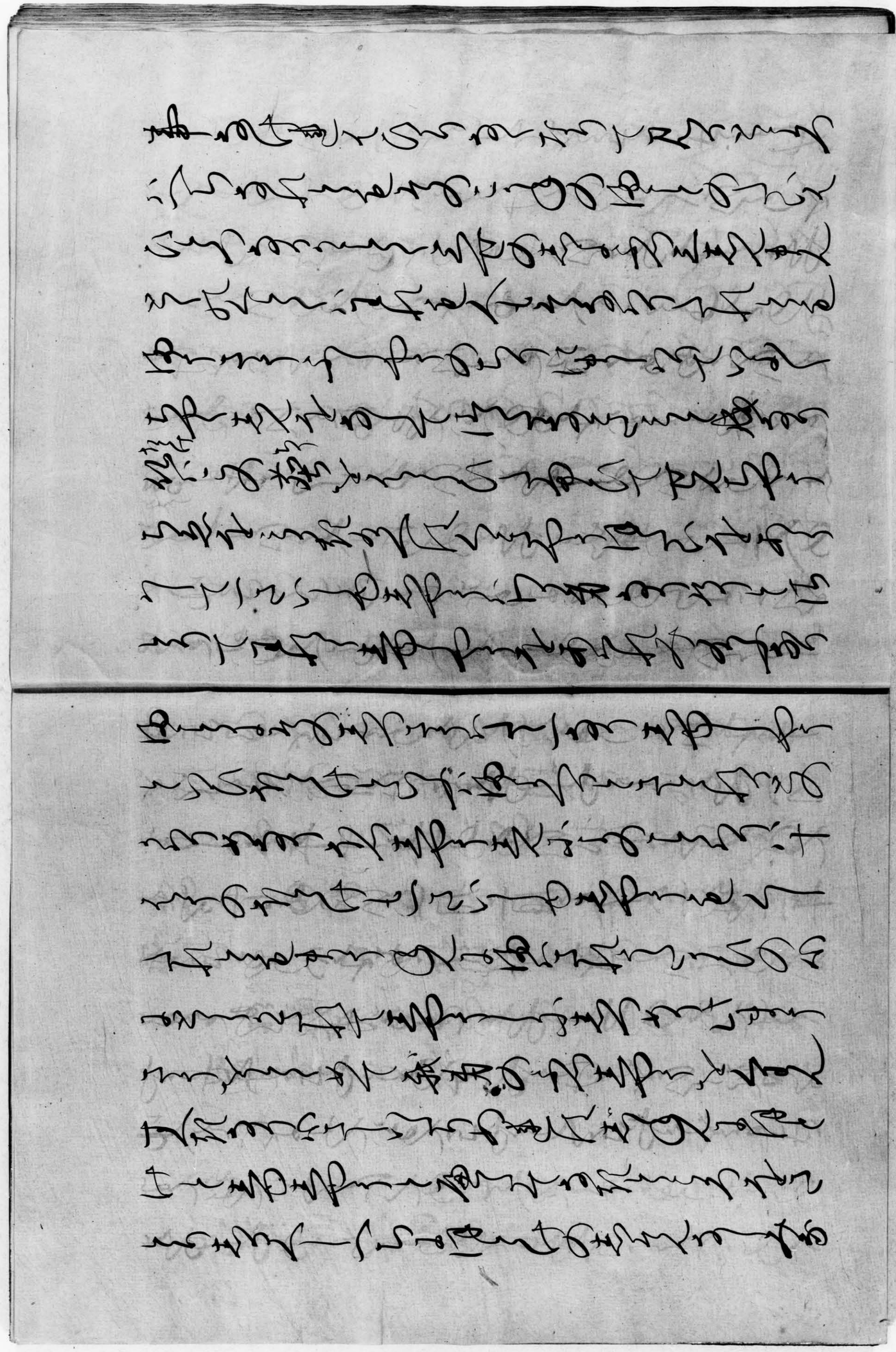


むかしよりまうしつたへたまふことはいつれも
ゆんとてゆくしにまうしてはしよしゆひく
あみださまくしてまうしてあみださまをたのみ
あきらかにおもひなからあまさへうれよねかひ
てそのあとにつきて刃をとりなれくたみ
のたまへるにはつみ衆のあさましのありてはよ
むかひてきうちくらて刃まてくち
うききやうまえけあいてうきやうくてて
そありたうさまにはかりせちうまに二種え
のうきはてうすくまうしやうすん

それあつされいかうききしきてこそはくれは
まさ十悪（あく）といふをもすぐれ刹那（せつな）にきはまふ
うのさんむをひくらをもみえし一念
といふことを五せんあつしころいのあんろ
をいつにはふくとゝこの申されしこの
ころハ十悪（あく）の衆生（しゆじやう）をも済度（さいど）するには
せのくりきとくをとうやし一念
のまゆやうとをすくいはしちいのまこ
しそれあれをいてはさうさしころよまつ十
悪五逆（ぎやく）の衆生みなもれうくきえてさう

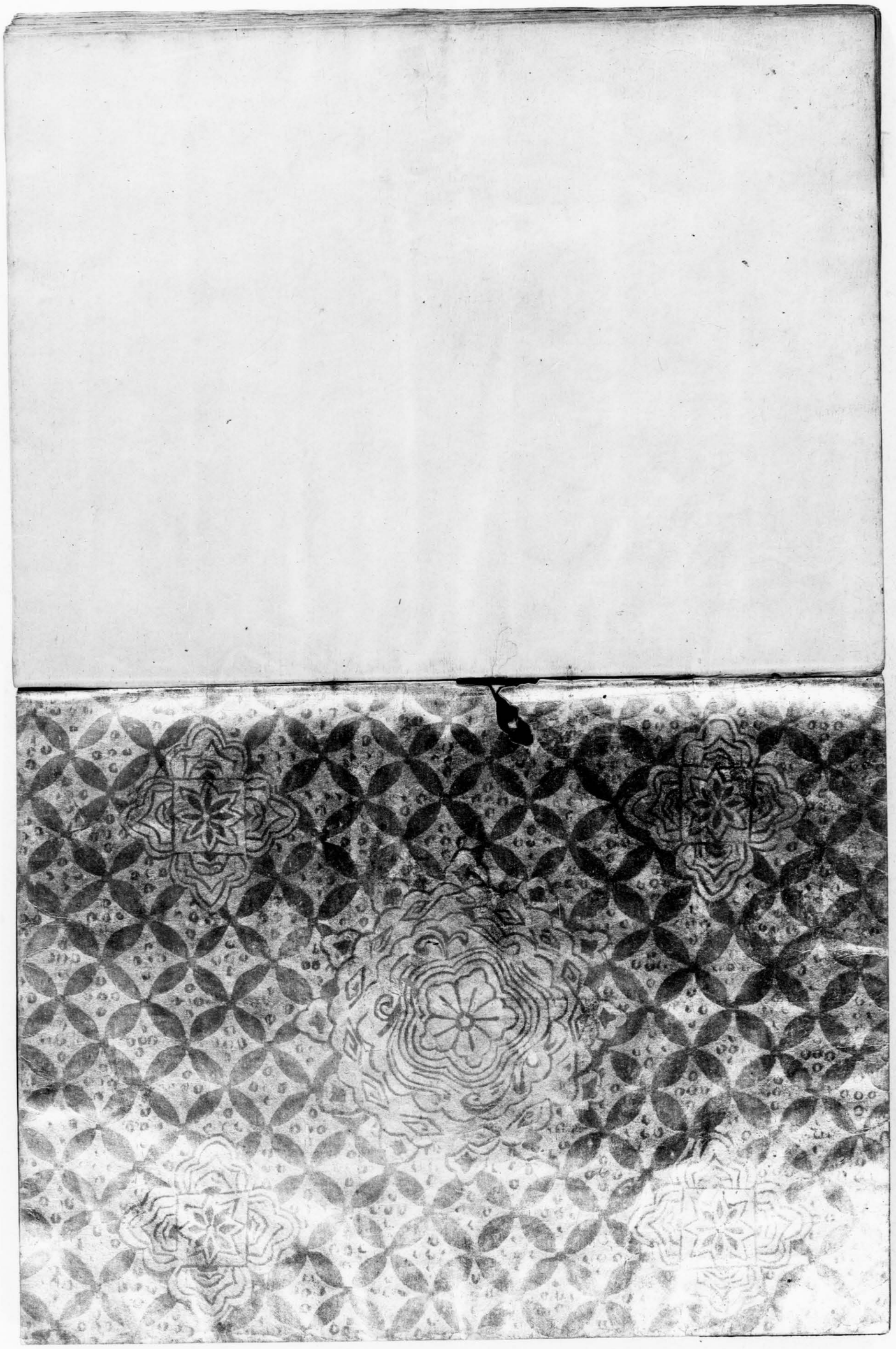






しやかのちかひにて重ねてしよにふく
まん禄之比わうにんのはしめ頃たゝかの
ひんくにようんとき人こゝろ〳〵をときき
やうせ千すこゝろしやうけさとひ給ひなり
るをめくれ男まさしやうしのみえさく
ふきさありいきおこし給ふしやうしいてあるひ
くつ二百あるひ二月二日とハ一禄之三年
とハ五年十年のあひさしもなえし
といへさハたゝけしやうしやうしやう
まさるをさとりしる人たまりこれならす

ゆるしのふかさしやうしやうしんをかくるゝ
これらゑのほうきゝしんするによりてこゝろさを
きゝこゝろにはこれぜんとひやうれいらまいらは
しやうしの隔をやぶれしてみちをたちなく
従此してまつ仏法の寶の山いつかわれ
こゝし打捨てまさるまじて三途の古郷
に還事なかれ

寶物集巻下

九州大学図書館